# 文藝

[illegible]

第百九拾七號

東京國民之社

# 女鑑第百九拾七號

## 目録

# 女鑑臨時發刊豫告

我が神州の淑女をして滔々として輕佻浮薄にのみ趨らしめたりし秋にあたり本社同人衷心深く憂慮する所あり明治廿四年八月本誌を發行し女敎の要專之を萬邦無比なる歴史に徵し之を祖先の遺範に稽へ優麗貞淑なる日本女子固有の特性を啓發をることを本旨とし以つて忠良なる日本臣民の賢母良妻婦女子の伴侶たらしめむことを務めてより年を閱そることと九年号を重ぬることと百九十七號に及びぬ今や世運の推移は海內諸般有形の事物概皆舊觀を改め更に國威の伸張は內外の人雜居して等しく大御稜威に賴るにいたれりまことに前古未曾有の時期に遭際せり是に於いてか吾人同人の益々奮勵盡碎を要する者また多く加はりぬ茲に三月五日發行すべき本誌第二百號を臨時發行となし女子問題に熱心なる諸家の剴切精覈なる意見を蒐め又厚く賞を懸けて緊切なる問題の解釋を求め汎く歌文を募りて其の精を選び萃を集め以つて大書册となし一は刻下の急に應し一は多年愛讀者諸媛厚誼に酬いむとす

## 第一懸賞題

### 一地方に於ける婦人會の規則

地方に於いて小學校卒業以上の女子及び一家の主婦たる人々の爲めに德風を奬め日常必須の智識を得せしむる目的を以て組織する婦人會は如何なる方法によりて組織するを最良とするか之を完全に細示する規則書

規則書中に揭ぐべき要目

▲會場に揭ぐべき教訓▲會合の場所、時日、刻限▲講師招聘の方法▲講義談話の要目及び其の仕方▲備へ付くべき書籍、雜誌の種類▲會員の心得書要領▲會費の徴否及び其の費額▲會頭及び役員の推擧及事務要領▲會員中に遵守すべき規約の條項(この規約は各人平素專ら家政上に於いて實行すべき事柄たるべし)▲以上の各項は最も切實を主とし何れの處にも實施せられ得べきものたることを要す假令其の方法善美を盡すものなりとも今日の地方に於いて實施し難きものと認むる時は採らず▲且つ各地狀況各異るものあるを以つて町と村落とに差別あるものは各項の下に割註にして町にては何々村落にては何々と記すべし

一男女何人にても應募することを得

一優等者には賞として訓誡の金言を彫刻せる金側時計　一箇

## 第二懸賞題

### 一自ら戒むる詞

湯の盤の銘のことは今更に之を言ふべきにあらず明治の御代に生れ遭ひたる日本婦女子が之を座右にして朝に夕に省み戒むるに最も適當なる詞は如何なるものならむ本社は敢て文字の數を限らず書くべき要項を示さず唯最も簡潔にして而も日本婦女子の戒箴として最も深き意あり最もひろく用ゐらるべき上乘の作を得むことを望む

一婦女子は何人にても應募することを得

一等優等者には　鏡　一面

裏に當選の詞を朝野に推重せらるゝ高德の士に揮毫を乞ひ之を彫刻せしめて美麗なる箱に收れたるを贈呈せむ

## 第三懸賞題

文　仝　仝　仝　歌　仝　仝

わがつとめ

所感

平和

なつかしきものと美しからぬものと

慈悲のこゝろをよめる

花を待つ

菅原道眞

一應募者は女子に限る又一人にて數題を物するも妨けなしと雖も然る場合は一題毎に別紙に記し題の下に住所姓名を記載すべし

一文にて貳拾篇、歌にて三拾首の秀逸なるものを選拔し更に歌に一首文に一篇優等をえらび本社が特に堪能なる技士に囑して製らせたる左の賞を呈す

文　優等　文庫一　　歌　優等　硯箱一

秀逸　臨時發行の女鑑一部宛

●二月十五日を以て〆切期限とす遠隔の地にて應募せむとする人は遲くも二月十三四日迄には本社に到達する樣に發送せらるべし●應募の文は楷書にて記すべし假字は平假字片假字いづれにても應募者の自由なりといへども最も普通の字体を用ゐて明瞭に記し決して二字以上連續せしめ若しくは異体の假字を用ゐるべからず●郵税不足郵税先拂等のものは受取らず●女鑑二百號臨時發刊(三月五日發兌)の紙上にて發表すべし●各懸賞題の審査員は優等者發表と同時に發表すべし●應募者は應募者の姓名又必ず住所を記すべし、匿名を用ゐることをゆるさず●懸賞問題に關する文書の宛名は國光社女鑑編輯部宛にし朱書にて懸賞の二字を記すべし●心得の諸項目に依らずして應募せる者は受賞者の中に加へず

吉右衛門夫妻



## 春のこゝろざし

あら小田をあらすきかへせ〳〵、とく霜がれの田を。畠を。すきかへし、すきれこし給へや。敷島の歌のあらす田すきかへせ。あらすきかへせ。歌のあらす田。もの初めなくして、終りあるものはあらず。春は、一年のはじめ、春期を失ひては、萬物、また樹たざるべし。歌のあらす田にもあれ、霜枯の田にもあれ。人の心のあらす田にこそあれ、あらすきかへせ。すきかへせ。此の春の光、きゝたる、此の春の光に、

世の中は千草の花のいろ〳〵に
心の根よりなるとこそきけ

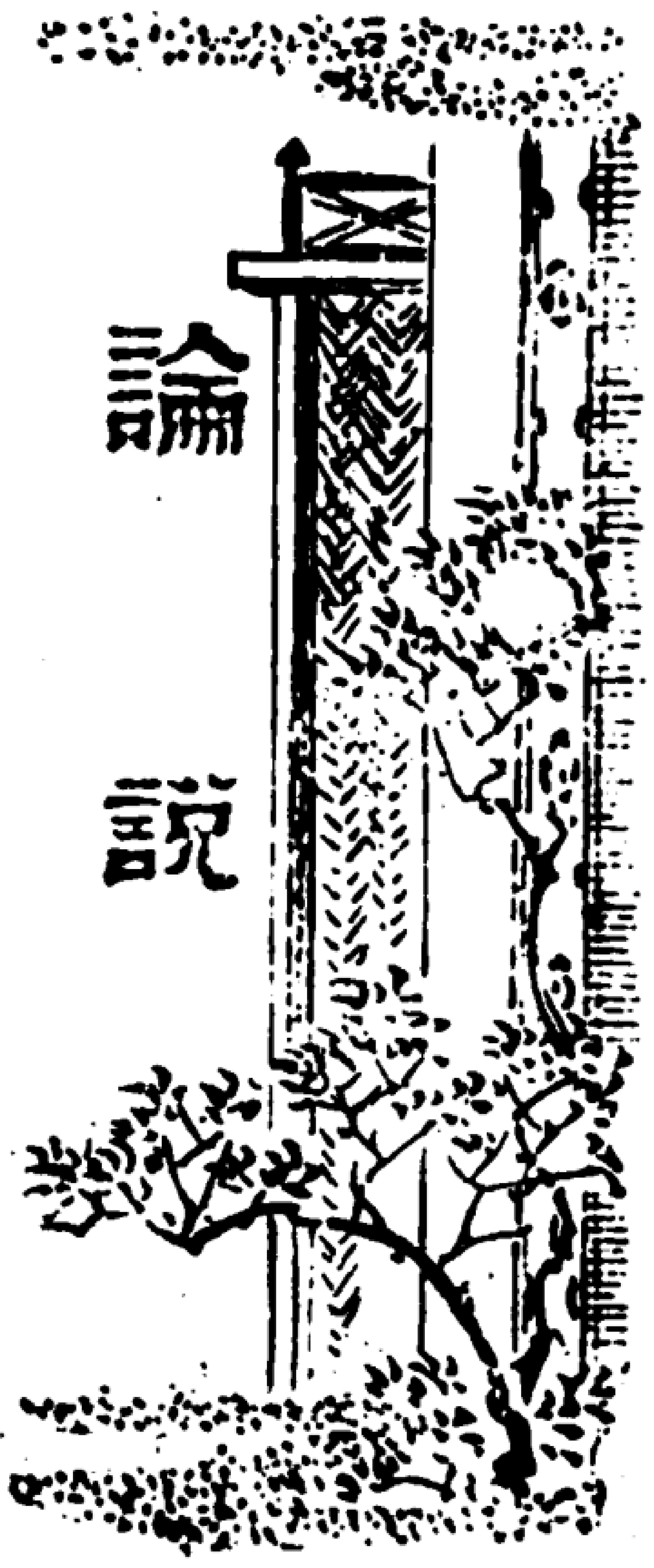
げになつかしき撫子とならんも、やさしき尾花とならんも、あはれなる萩がつまとならんも、めでたき藤ばかまとかをらんも、さわがしき萩とならんも、とげと

げしき鬼わざみとならんも、皆心の根より生ずるにて、たとへ、一つ色なる春の草を見ても、まづ、秋の千草のいろ〳〵を思ひ、ゆめ、しこ草のとげ〳〵きものにならで、にこ草のやさしかれど心ざし給へや。

春は、そよふく風もあたゝかに、花も笑ひ、青柳もしなひ、鳥もうたへば、糸遊もあそぶ。げに野も山も、何となくうららかに、見るもの、聞くもの、のどかならざるはなく、すがの根の、日も夜もながきやうなれど、日は同じくくれ、月は同じく立ちぬ。あはれ、久方の光ののどけき春の日に、散る花を見ても、まづ巳が春のながからぬを思ひ、若草の日に〳〵のびるを見ても、ふり分け髪のやがてたぐるべきを推し、たゞ三春を行樂にのみ過し給ひそ。

さて、春の日ののどかなる風を忘れずば、たえず家の内に吹かせて、親子、夫妻、兄弟、姉妹、相和し、相興じ、共にはげみ、共に助け、四氣共に心の花れもしろくさかせんと心がけ、霞の野にあさるきゞすを見るにつけても、親の恩を思ひ、うら〳〵とてれる春日にあかる雲雀を見るにつけても、子をいつくしみ、なは、木

のめ春雨の木の芽をめぐむ如く、家をも國をもめぐまんと志し、又そのめぐみに榮ゆる木の如く、草の如く、何れが何れ爭はれぬ花をさかせ、實をむすび、家をも名をもあげ、國をも、身をもうつくしくせんとし給ふ春の志、誰れも〱あらまほしく、我が社のねがふ所になん。




# 日本女子今後の覺悟（十三）

三輪田　眞佐子

實に交際の本旨は、信と敬とにあり。故に心の信だに通せんか。その外容の動作は問ふに足らず。亦、心の敬をぞ表せんか。その慣例の如何を論ふに及はずといへども、概ね、外容は、心の表象にして、慣例は、禮の記號なれば止むを得ざる事情あるか。若しくは確乎たる信向あるにあらざる限りは、世間一般の作法に戻らざるを良と知るべし。さて、作法の根源は、自然の理勢に基くあり。將た、史上の積習に由るありといへども、歸するところは、先代の作法を摸擬する、一種の風俗なりけり。

凡そ、現時行はるゝ風俗は、概ね、人の注意を引くに足る一個人が、創見して、行ひけんものを、

當時の流行を逐ふ輩、競ひて、そを摸擬し、漸々と一般の風俗をなすが如し。既に、一般の風俗となる以上は、たとひ流行を逐ふを好まざる人といへども、これに背かば、世人より、異人視せらるるため、止むを得ず、時の風潮に從ふなるべし。更に、この流行が、其の時代を改むるに及びては、最早流行の意義を失ひて、純然たる國風民俗と化して、幾分か、禮義の意を胚胎するに至るべし。果して、流行變じて、風俗とならんか。これに從ふ能はざるものは、社交上容れられざるなり。要するに、時の風潮を逐ふものは、輕薄者流なり。然りといへども、既成の風俗に背くものは、頑固者流なりと呼ばるゝを如何せん。あはれ、この間に、身を處して、當を得ること難いかな。

試に一二の例を擧げて、流行と風俗との關係を述べん。見よ、今日、わが處女の結髪風は、駿州島田驛なる遊女に摸擬するより、一時は流行となりけるが、現今は、女子一種の風俗となりぬ。なほ、勝山なる結髪風も、吉原の遊妓、勝山なるものが、その祖なりとかや。亦、今日、女子の纏ふ被布なる表衣は、往昔に於いて外套に用ひけるあり。若しくは寡婦、あるは、隱居したるものなどの用ひけるものなるを、爾來漸次に變遷して、現時は殆ど禮服のごとき觀あり。しかのみならず、若年の童女、幷に、處女も、これを裝ふに至りぬ。更に、婦人の齒を染め、眉を剃る如き、女風も、淵源を尋ぬれば、武家の男子より始まりけんといふも、後世は、全く、女風と定まり、遂に、貞操を守る表識とさへ信ずるに至りけり。これ等は歴史上より考ふれば、寧ろ忌むべきことながら、既に、一般の國風と定まる以上は、反りて、尊ぶに至るは、全く、人の感情に由りて、然るならん。故に、そ

れらの由來を知る人に於ても、當時流行の束髪よりも、勝山を高尚となし。被布も非禮にあらずとなし、齒を染め、眉を落すも、着實の風俗とおもふは、さもあるべし。これ等は、單に、日本のみならず。西洋に於ても、類似の風俗多しとかや。たとへば、洋服上衣の後印に(ボタン)あるは、昔日、獵の盛なりし比、上衣の端を、これに留めけるより起りしものなるを、後人は、如何なる故なるを知らずして、これに摸擬するものとかや。兎に角、風俗は、摸擬より基因するものなるは、明ならんも、既に一般の是認する習慣たる以上は、これに戻らんか。忽ち、人より異人視せられて、おのづから、社交上の障礙たるも知るべからず。されど風俗を萬古不易と信ずるは迂なり。歴史を探りて、これを非難するも可となさず。要は、中正にぞある。

# 女子の原勢力

（女子教育論の一）

日本女德會未來會員　秦　政子

女子の四德は、古の教綱にして、今日に應用すべし。されど、中村惕齋翁は、之に由て、往時姫かゞみを著し、小池山の井等の女史は、近時、其の教育に鞅掌せられ、三輪田女史は、其の本分處世論を物し、又、將來の覺悟を説かれぬ。是に於て、女たり、妻たり、寡たり、母たる女子の務は章かなり。されども、世運の進歩、日に駸々として、月に新なるに從ひ、世間一般の形勢を見るに、未だ、一定の本能を守ること能はずして、或は歐化の風に流れ、或は守舊の弊に陷りて、中化の女德を保てる者鮮し。故を以て、妾等不分の身をも省みず、左に女子の德義として、又母性としての操行に就き、いさゝか感せしまゝを筆して、同志の姫たちに諮り、其の雌黄を得て、共に後進のわらは女が栞ともせん。

## 女子の本能

凡、女子の女子たる價値は其の天職を全うするに在り。天職を全くするは、其の本能を私せざるに在るなり。所謂、本能は、殖の一語に止まれども、啻に、子孫を繁殖するのみにて、澌然一生を修るを以て、能事尽きぬといふべからず。宜しく經濟を理し勤儉の德を修めて、貯蓄し、財を殖して、富强の一源をなすべく、衣食を殖して、禮節を知らしむべく、家庭圓滿の種を殖して、國家社會の秩序を保たしむべし。されば、妾は女子を以て家庭の原動力社會の潜勢力とし、約しては、世の原勢力なりと信ぜり。但し、利器は、其の本能を失すれば、必ず害を伴ふものなるが故に、此の原勢力一變して破壞力となり、紊散力となり、約しては壞散力となるなり。之を草木に譬ふれば、女子は、猶、花のごとけん。夫れ花は、啻に美を德とするのみならず、芳香馥郁を保たざるべからず。次代の草たり木たる果實を結ばざるべからず。之を結べば育せざるべからず。之を育るに、根より得たる營養分を收蓄して、妄りに、費せず、旱魃には、其の收蓄せるものを以て、果實を保育し、霖雨には、自ら足るを知りて、漫りに貪らず、大風には、自ら衞りて、瓣蘂を失はず、斯の如く始めて能事了る。之を原勢力といふなり。之に反して、花の爛熳を衒ひ、果實を保育せずして、風に靡き、雨に敗るれば、獨り、花自身の消滅のみに止まらで、次代の草木を消滅せしむるなり。斯の如きを壞散力といふなり。希くは、色なく、香なきも、松花の朝風に、常盤なる操を立てて、高尚ならんことを。蓋し、人類の弱點は、乏しきを掩ふにあり。不文者の學者らしく、貧賤等の富貴者らしく、各、之を虛飾して外に衒ふ。女

子の容、醜きものは、衣裝を以て掩飾し、心黑きものは言語を以て、令飾せり。妾、故に謂へらく、高言令飾は美鮮しと。

明治維新の後、歐米の物質的開化本邦に傳はりしより、精神的異風も、之に伴ひて、男女同權の論一時、世に囂々たりき。甚しきに至りては、米國などの女尊說さへ加はりぬ。されども、我が國は、其の國体萬邦に異なるだけ、國風も同一ならず、古へ儒敎の時代に、女子を卑しめ、武門の時代に奴婢視したりしも、常理にはあらねど、さりとて、同權などといへるは、亦少しく權衡を失したるやうなり。元來、女子は、身体の搆造より、社會業務の上に於ても、男子と同等なる能はず、男子よりは、幾分か、輕くして、之に一步を讓るべき義務あり。故に、男子は亦男子の德義として、之を愛憐保護す。米ーの如きは、此の天則より、之を憫むこと厚く、女子も、所謂原勢力に富みて、克く、其の本能を盡すのみならず、一人にして、大學校を興す者さへあり。是に於て、男子の、之を敬愛すること、益深厚を加へ、竟に、上下一般の風となり、女子といへば、却て、壞散力のみあるものをまで、一樣に待遇する弊を生じ、さてこそ、女尊男卑の如き現象を呈するに至りたるなれ。眼を一回して、わが邦の女子を顧れど如何。曾て、男子に卑しめられ、奴婢視せられたる時代は、却て、柔順にして、品性操行、並に高く、孝貞、慈愛、勇忍に富み、夫唱婦隨の敎を守り、境遇の順逆に因て、之を更めず。四德三從の道端然として、行はれしに、近今同權論の時代は、約ね是等、東西の女風に、合格する者なく、稍、女らしき者は、默して、語らず。喧々囂々たるは、大抵女學生にあらざれど、壞散者流の於轉婆なりき。されば、女

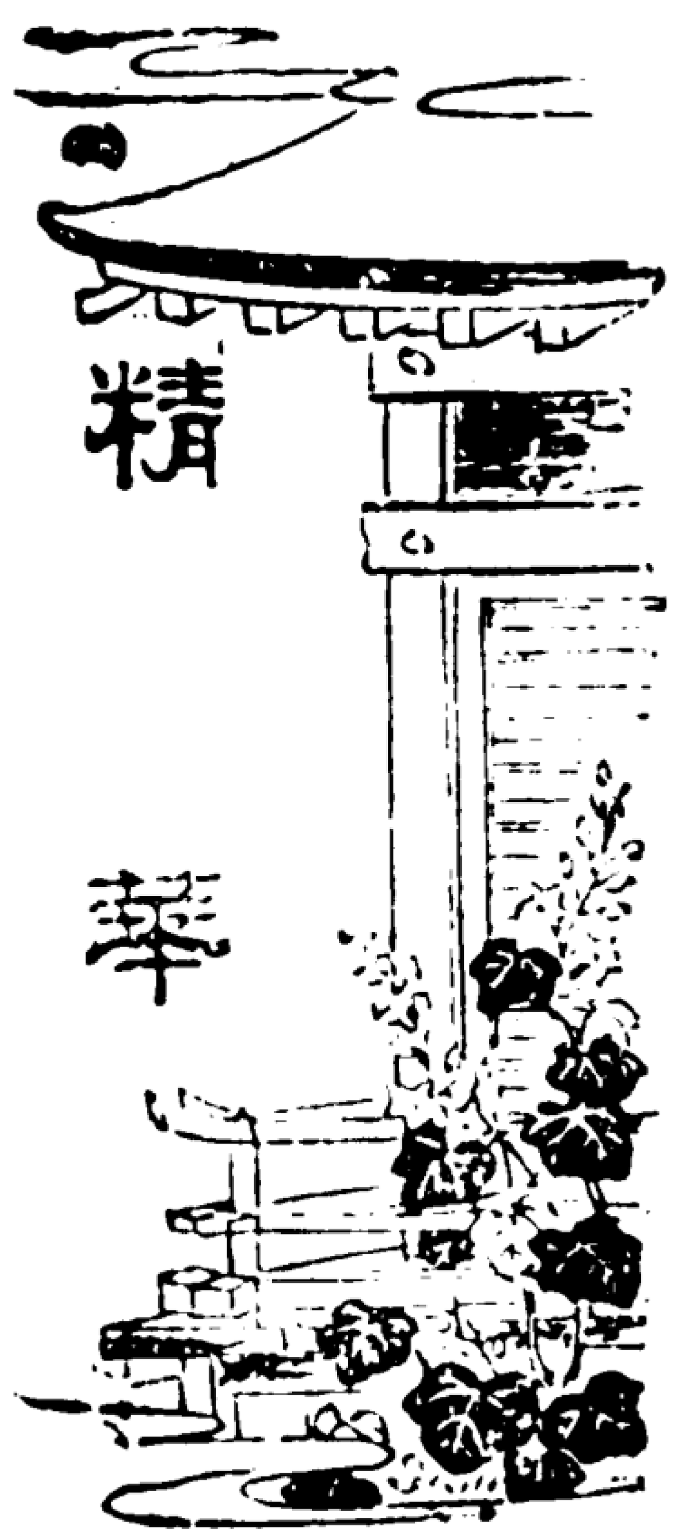
子にして、苟も、男子と天理の權衡を保たんと欲せば、必ずしも、女子の本能を盡して、原勢力たらざるべからず。妾等、固より、男子の掣肘抑壓に服する者に非ざれど、亦固より、天理の原則に抗せざるなり。そも／＼、女子の原勢力たる本能の原素は、何ぞ。曰操なり。其の分子は、何ぞ。曰孝貞慈愛勤儉勇忍等なり。之を品性操行といふ。以て、烈女たるべく、以て良妻たるべし。以て賢母たるべし。而して、此等の諸分子は相化合して、一の動力となるものなり。其は、皆、下章に叙すべけれど、今、先づ節儉貯蓄の一端を說かん。

女子の性は、男子に比して、緻密なるが故に、貯蓄に適すべし。又、堅忍なるが故に、節儉に耐ふべし。凡、女子の責任中、最重大なるは、家庭、子女の敎育にして、今本邦の民法に財產相續等の篇あり。長子相續等の事は略、歐米に異ならざれど、古來の習慣私法として、戶主財權を專にし、分財の法定まらず。されば、不幸にして、戶主、天災疫疾に罹りて、產を破るか、或は、放縱懶惰にして、財を蕩盡するか、或は、中產以下の戶主死亡して、生業を失はゞ、家族、之が爲めに、自活する能はず、甚しきは、子弟の學に在るも、中廢の慘境に陷るべし。若し然らざるも、父死し、兄、戶主となりて、其の弟妹の爲めに學資を給せざる等の事、實は、往々見聞する所なり。此等の不幸を免れんには、平素の節儉貯蓄に如かず。分財管理の方法を定むるに若かざるなり。今、歐米の女子を見るに、豪族素封家の子女と雖、必ず、相當の內職ありて、或は、毛絲織物に從事し、或は、美術的製工をなし、學業の閑、之を營みて貯金に力め、女子の如き、婚嫁の時期に至れば、之に、父兄の分財を併せて、歸嫁す。其の未婚の間は、母

たる者、一種の「トラスト、セトルメント」となりて、之を管理す。是れ、則ち、一家の憲法にして、前例の如き、不幸なる場合に臨んでも、志望の目的を失することあらず。わが邦往古には、分財の法公式となり、或は、譲状に據りて所有權を享有す。所謂法律の享有を許されたる財産なり。然るに、武門世襲の久しき、武士道と稱する、一は喜ぶべく、一は憂ふべき風行はれて、士たる者は、特に、財貨を賤しめ金錢算用等の事を商人の專業として顧みず。散ずることはあるも貯ふることなし。爾來分財の法も、自ら廢して、農工商、亦、之に倣ひ、資財を子女に頒つ者、十の三四に過ぎず。小糠三合あらば養子となる勿れと云ふ諺さへあるに至り、以て明治の初に至りしかば、餘弊、今に傳はり、一旦逆境に入れば、意外の慘狀を免れざるなり。故に妾は自今、この節儉貯蓄を普及し、父兄の分財義務法を設け、其の貯蓄を分財と共に、母たる者の管理に屬し（母なきか、事故ある時は、公式管理は、則ち「トラスト、セトルメント」の制に從ふ）之を增殖せんが爲めに教育貯財銀行、又は、育成保險會社を設立せしめ、以て預金せしめんと欲す。蓋し、是れ、女子たる本能を全うすべき上に於ける急務なりと信ずればなり。

今日は明日の計をなし
今月は來月の計をなし
平生は一生の計をなし
生前に早く死後の計をなすべし






## 報本反始

神を敬ふは、本に報ゆる所以にして、即、忠孝の始なり。神とは、我が國開闢の始祖にして、又、民人の大本なり。我等が、今日あるは、皆、其の深厚なる遺徳に由れるものなれば、遠き源を追懐し、古き始に反り、祖先の功徳を仰ぎ、鴻恩を謝し、遺業を恢弘せんことを務めざるべからず。その、之を務むるは、乃、神を敬し、祖に事ふる所以にして、忠孝の始、道義の大本なり。他の空理を説き、虚事を談じ、怪力亂神を説くが如き類とは、固より、天壤の差あるものなり。故に、神の子孫たる



我等が、毎朝、神を拜するは、父母に、禮を述ぶると同一なる心得あるべきなり。若、夫、神道を解するに、世の宗教と同意義を以てし。或は、之を以て、巫覡の類と混視して、遂に、其の本旨を明にせず、祖を蔑にし、本を忘るゝが如きことあらむ、その弊、國体の尊嚴、道義の大本を誤り、元氣の衰廢を來たすに至らん。故に、敬神は、皇室を尊崇し、父祖を敬慕し、國家を愛重すると同趣意にして、之を忽にする者は、忠孝の本義、未、至誠に發する者にあらざるを知るべきなり。國民たる者は、常に、國家の禮典を重んぜざるべからず。國家の禮典とは、大祭祝日を始め、すべて。公に行はるゝ祭典儀式の謂にして、皇家の洪範、一國綱紀の根源、教學の由りて出づる所なり、我が朝庭に於て行はせらるゝ祭典儀式は、皆、古より、深き緣由ありて、世々に傳はり、この尊

き國体と、終始、相離るべからざるものなり。されど、歴代の　皇上、御自、篤く、之を執り行はせ給ひしなり。祭典を重んじて、祖神に、敬をいたし、儀式をつゝしみて、禮を正しくするは、皆、其の本に報い、始に反る所以なり。

また、神を敬ひ、祖を尊ぶは、我が國第一の大義にして、古來、　列聖、深く、此の義を愼重せさせ給ひ、禁中に於いて、大事ある毎に、必、神事を先にし、後、之に及ぶを以て、作法と定めさせ給へり。是、敬神報本の大義は、人道の大本、世間萬事の始なることを明にし、以て、下民を敎へさせたまへる所以なれど、苟、生を、皇朝に享け、皇室の臣民たるものは、必、神を敬せざるべかざるなり。

凡、一國の風俗習慣は、皆、其の特相によりて發成するものにして、國民の結合一致、亦、爰に基するものなれば、重大にして、忽にすべからざるものなり。而して、國の禮典は、實に、一國風習の精粋にして、其の体相を維持し、愛國の精神を涵養する所以の本源なり。海外諸國、其の國家の成立、蒙昧に屬するものも、皆、其の禮典あらざるはなし。况して建國の体相、至粋至美、報本反始の大道を基として成立せる、我が大日本國に在りては、此の禮典を崇重すること、大に、他邦に超越すべきは、言を待たざるなり。

抑、我が國は、古來、祭政一途にして、祭典儀式は、歴朝の、最、崇重せさせ給へる所なり。歴代の　皇上が、祭典儀式を重んじ給へるは、祖宗の神靈を崇敬して、其の遺意を紹述せんことを誓はせ給ひ、以て、報本の誠を盡し給はんが爲にして、庶政を總攬し、蒼生を撫育し給へるは、即、　祖宗の御遺訓を紹述し給ふ所以なり。故に、祭祀は、

庶政の本にして、常に、庶政に先だちて行はるべきものなり。蘇我倉山田石川麿の言に曰はく、先、神祇を祭鎭して、而る後に、政治を議すべしと。實に、此の意を述べたるなり。

今上天皇陛下は、宮中に賢所を建て、神器と、列聖の皇靈とを、こゝに奉安し給へり。爾來、毎年一月四日の政事始には、先、神宮の事を奏せしめ、而る後、庶政を聞こしめし、又、外國に使する者には、必、賢所に參拜せしめ給へり。又、憲法發布の大典を擧行せさせ給ひし時にも、先、祖宗の神靈に、御告文を奏り給ひき。是、皆、祭政一致の旨を行はせ給へるなり。

祭政一途は、實に、國体の基く所にして、祭祀は、政治の本なれば、我が國臣民たらんものは、此の聖謨に欽式し奉り、神祇を崇敬し、祖先を敬祭して、報本反始の禮を盡し、其の遺意を斷承し、遺業を恢弘して、以て、子孫臣民たるものゝ務を全くせざるべからざるなり。

## 吉右衞門夫妻

鹽井ふく子

人の子の親になりてぞ、我が親の思ひはいとゞ思ひ知らるゝと。されど、それは、ものゝあはれを知りたる人の心にて、妻子をもちて、中々に親のめぐみを忘るゝが多き、あやしきものゝ中に、之はまためづらしき夫妻、夫を吉右衞門と呼び、妻をはつと云ひて、豐後の國野津原郷、筒口村にすみし民なり。吉右衞門に老いたる母あり。夫妻、之を敬ふ事神の如く、之をいつくしむ事幼きものにもまさりたり。母のいふ所はかしこまり從はぬと云ふ事なし。あるとき母、吉右衞門が幼き兒をいだきて、圍爐裏の傍にをりけるが、立んとすると

き、ふとあやまりて、孫をいだきたるまゝ火の上に倒れぬ。吉右衛門夫妻、見るより、あはてゝ走りより、母を抱き起して勞はり、已が子をもひき上げて見れば、むざんや、いとうやけたゞれたり。いとかなしう、心をつくして、さま〳〵に療養を加へけれども、遂にかへらぬ煙りとなりはてにけり。吉右衛門、子と云ふものは、これのみなる心に如何ばかりいとをしかりけん。まして、愚痴なる女心、妻はいかばかり悲しかりけん。されど、夫妻とも、深くかなしみを忍びて、色にはあらはさず、中々にかへすよしなきかなしみにむせびをる母を慰めさとして、そのうれひをゆるべけり。これぞ、子を以て知る親心、あはれ、其の子のいとをしきにつけ、母の思ひは、いとゞまさるらんと思ふ心より、なきてもはらさぬ心の内、きくもいとあはれなり。

かやうに孝養ふかき心、いかで親の子をいつくしまざるべき。敬せざるべき。其の兄の隣りにすみけるが、極めてまづしかりけるを、吉右衛門はうゑぬやうにとて、粮を送り、跡を與へば、妻女は、また、暖かれとて、衣を送り、薪を分ち、農業、時に後るゝ事あれば、夫婦、必ず、共に行きて、之を助け、たゞ、車の兩輪、鳥の兩翼の如くに思ひふるまひて、かりにも垣にせめぐ事なかりければ、近隣のものども感じ稱せぬはなく、事つひに公けに達し、安永九年卯月十四日、夫婦に物、多く賜はりて、めづらしき行ひを四方に聞え、豐國の寶とぞなしにける。



## 澤橋兵太夫の母（つゞき）

田島利三郎

澤橋が母は、希望のごとく、八郎をかい懐き、秀家に從ひて、八丈島に至りぬ。故郷なつかしき潮風も、昔のわりし榮華をとぶらふ松のひゞきも、心にも浮べず、耳にもかけず、朝に夕に、たゞ、養ひ君の上、主君の御事にのみ身を碎きて、立ち歸る浪のやすみなく、過ぎ行く年月の數多を、いと狹き、八丈島の中にて送りけり。

秀家の夫人は、其の後、加賀にゆきて、前田家に依りて、人々にも敬尊せられ、何の不自由もなくて、日をおくりき。然れば、夫子の上を偲ばるゝことも、ひとしほにて、又忘られぬは、澤橋が母の厚志なりけり。夫を戀ふる心、子を思ふ情、恩義に報いむとする念、總べて、澤橋が子の上に傾けつくして、慈愛み育てぬ。かくて、成人せしめ後、前田家に仕へしめ、澤橋兵太夫何がしと名乘らせ、多くの知行賜はる身とせり。

例稀なる澤橋が母の眞情、年月を經たればとて忘れ果つる者やあるべき。事につけ、折にふれて、其の譽聞しげかりければ、母なつかしき兵太夫の袂は、秋の夕ばかりか、世の人は花にうかるゝ春の眞晝さへ、露おかぬ時とてもなかりき。果は、仕も物憂しとて、出家の姿となり、何地ともなくまぎれ出でぬ。

將軍家の上洛とて、京中ゆすり騷ぎけり。華美に鎧ふたる數多の武士、嚴重に前後左右を警固し、今や二條の城に入らむとする時、訴狀を捧げたる一人の出家、遮り止むる者どもを彼方に避け、此方によけて、將軍家の籠輿に近かむとす。すはとて近侍の士、刀を拔きて向はむとするを、何者の如

何なる訴願ぞ。訴状とり収れ、事の所由を尋ねよ。沙門に聊爾すなと籠輿より制せられければ、騒もはたと靜まりぬ。この出家こそ、彼の澤橋兵太夫なりしか、其の訴状には、拙者をさなき頃、母なる者、云々の事情にて、八丈島に渡れり。たまたま、其の子と生れたるものゝ、いかで、一人を然しおきて、こゝには留るべき。是の身をも、彼の島へ許させ給ふべしと、懇に書き記したりけり。折から、前田大和守供の中にありければ、其に預け、江戸に歸りて後、再三再四かなはぬ由をさとしけれど、思ひとゞまる容色なかりけり。將軍家もいと不便におぼされ、書やりて、母を呼び歸せよと傳へしめたれば、是は遂げがたきことながら忝き仰をかしこみ、先づ書やらむとて、細々と子細を書きつらねて、彼の島におくれり。如何にも、斐々々しき心なりとて、この上を思ひわするゝことあらむや。其の状開かむとするころの心や如何なりけむ。

然れど、其の返事は、

其方よりの状、開き見たることの返すがへすも口惜しく候。御主の御先途を見とゞけ申さむとてぞ、漸に無理なる願を遂げて、斯くなりつるを。如何なる世の來れぞとて、我、一人かへられむや。然る忌々しきことを憚なう言ひ考ふる痴者を、子に持ちたる身の、今更に、いとせめて恥しう候。猶、斯様のことを申しおこす者ならば、後の世までも子とは思ふまじ。

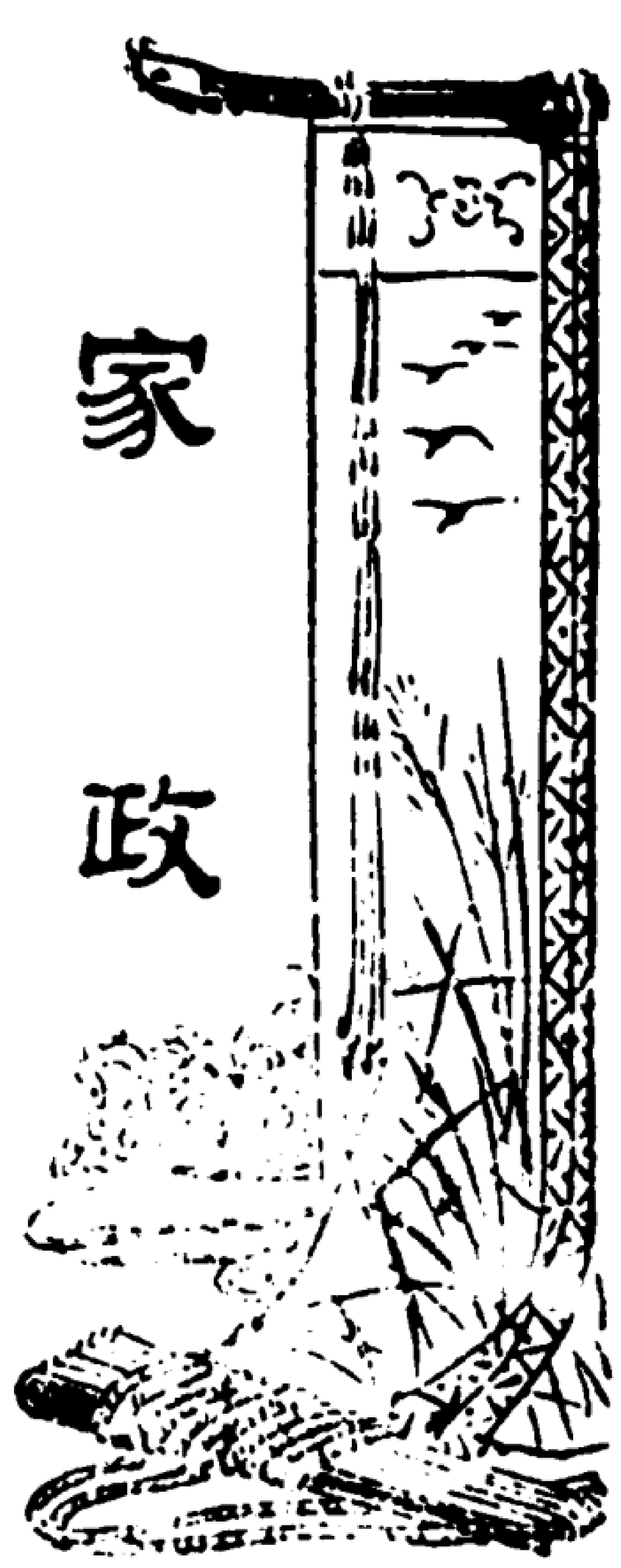
となむ有りける。潔き心には、まことに悲しく、口惜しかりけむよ。

返事來[illegible]ければ、官廳より兵太夫を召し出し、彼の島へ許さむことは、國の掟なれど決してならぬ事なり。母よりは、また斯くの返事なり。上にも、

此上なうあはれにおぼさるれど、今は詮なし。外に願ふことあらば、一つは、かなひ得させよとの上意なる由、言ひ渡しければ、兵太夫涙をおとし、今は何事をか申しあぐべき。然りながら、前田家は浮田と由緒あれば、毎年、彼の家より助成の金子入用の物品ども、永代おくりとゞけ候ふ様になし給はらば、最早世に望むこと　はじとぞねがひける。

今はむかし、加賀の前田家より、毎年、八丈島なる浮田家子孫のもとへ、小金幾包、星丹薬幾包、其の外、種々の物品定数ありて目録のごとく、公の使に付して贈りけるは、即ち、兵太夫が、願の聴されしによりてなりきとぞ。

この母にして、この子ありといふべし。其のころの諸侯争うて、兵太夫を召抱へむとしたれど、いづれもことわりて、再び前田家に仕へぬ。さて、彼の母は　彼の希望のごとく、終生主人に従ひて、忠勤を遂げたりといふ。



## 家政

# 女禮

## 女禮下輩に杯指し様
### 付受け様

有住常子

先、貴人御座敷上座に御出座、其の時、戴き人、御次しきへ外まですゝみ出で、しづかに引合せ、一禮なし、両手をひざわきへ付け、頭をたれ、扣へ居る。其の節、酌人、盃の方へ、銚子くみ付け、すゝみ出で先、貴人の御前へ持ち参り、銚子をわき

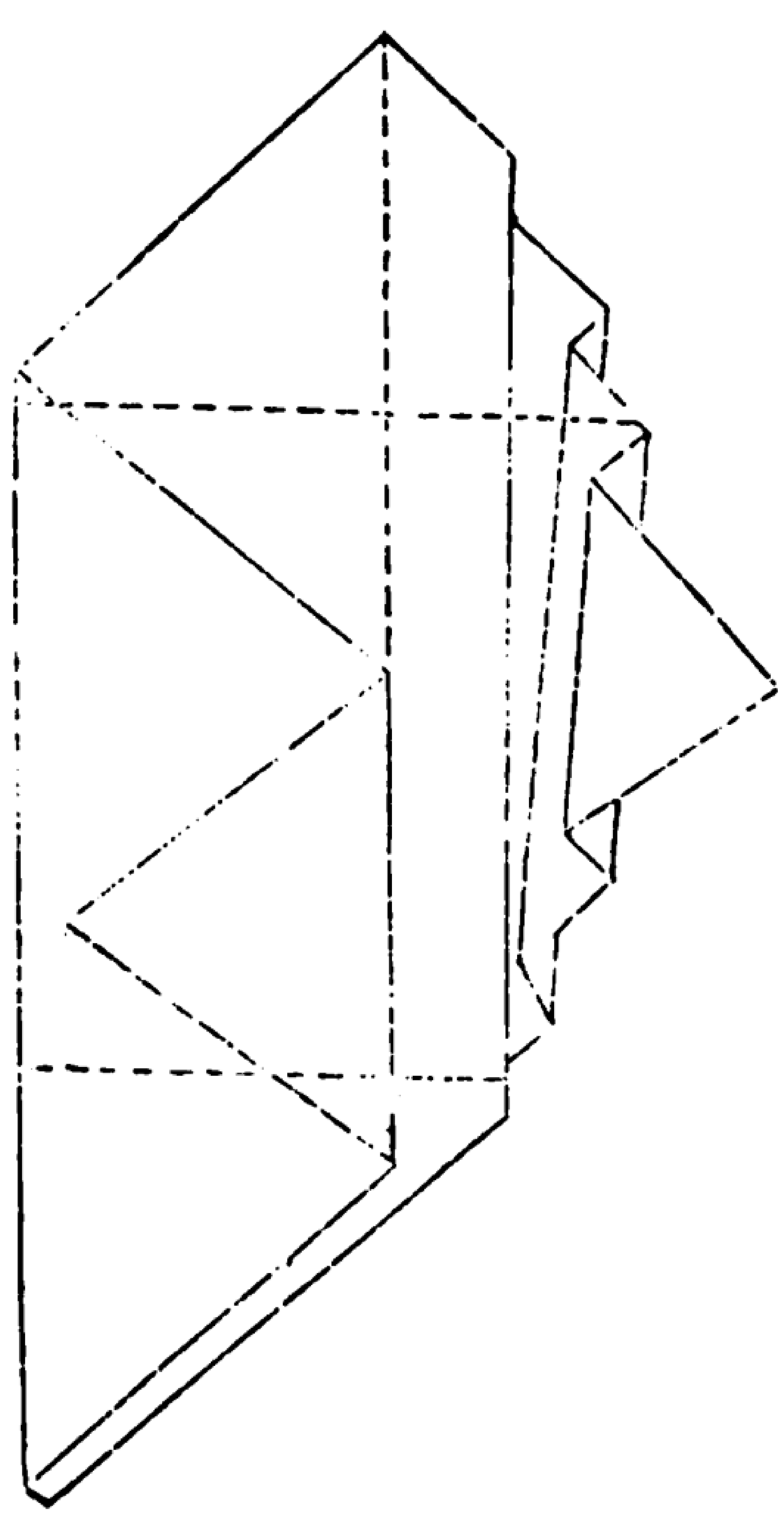
に置き、三方の下に、両手を掛け、すゝむる。貴人、御盃を取り上げられ候時、酌人、銚子を両手に持ち、二ひざすゝみ、御酌をなし、二ひざ引て、扣へ居る。貴人、御盃を其の儘三方へ置く、酌人、銚子を右がはへ置き、一すゝみして、三方を、少し引出し、御盃を両手にて取り、銚子の前より、御下をうつし、御盃を銚子の前にのせ、両手に持ち戴き、人の前にもち行き、其の儘すゝむる、戴き人は、御盃を、両手に持ちしづかに貴人の方に向き、をもく戴き、酌人の方に向ひ、御酒を受け、猶、貴人の方に向きかへ、二度戴き、のみをはらむ、御禮申上げ御盃を持ちたる儘、右左と、二ひざ引き、右ひざにて立ち右足より、三足引き、右に廻り、左足より、しづかに御次へ引くなり。酌人は、銚子を両手に持ち、二たび貴人の方へ参り、銚子を、わきに置き、一すゝみして、三方の下を引きよせ、銚子をくみ付け、二ひざ引きて、右に立ち、右足より、三足引き、右に廻り、左足より、しづかにあゆみ、御勝手に入るなり。

# 折方

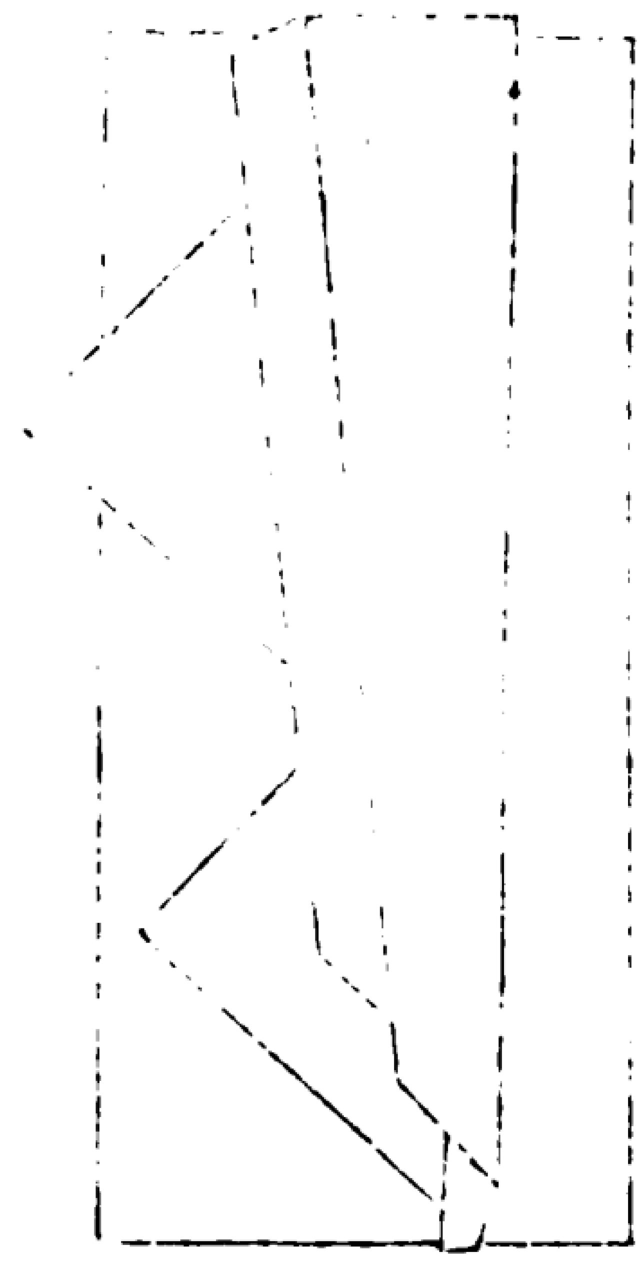
## 爪切包

有住　くわう子

是は、爪を切る小刀の包みかみの折方なり。



水引をかくる事



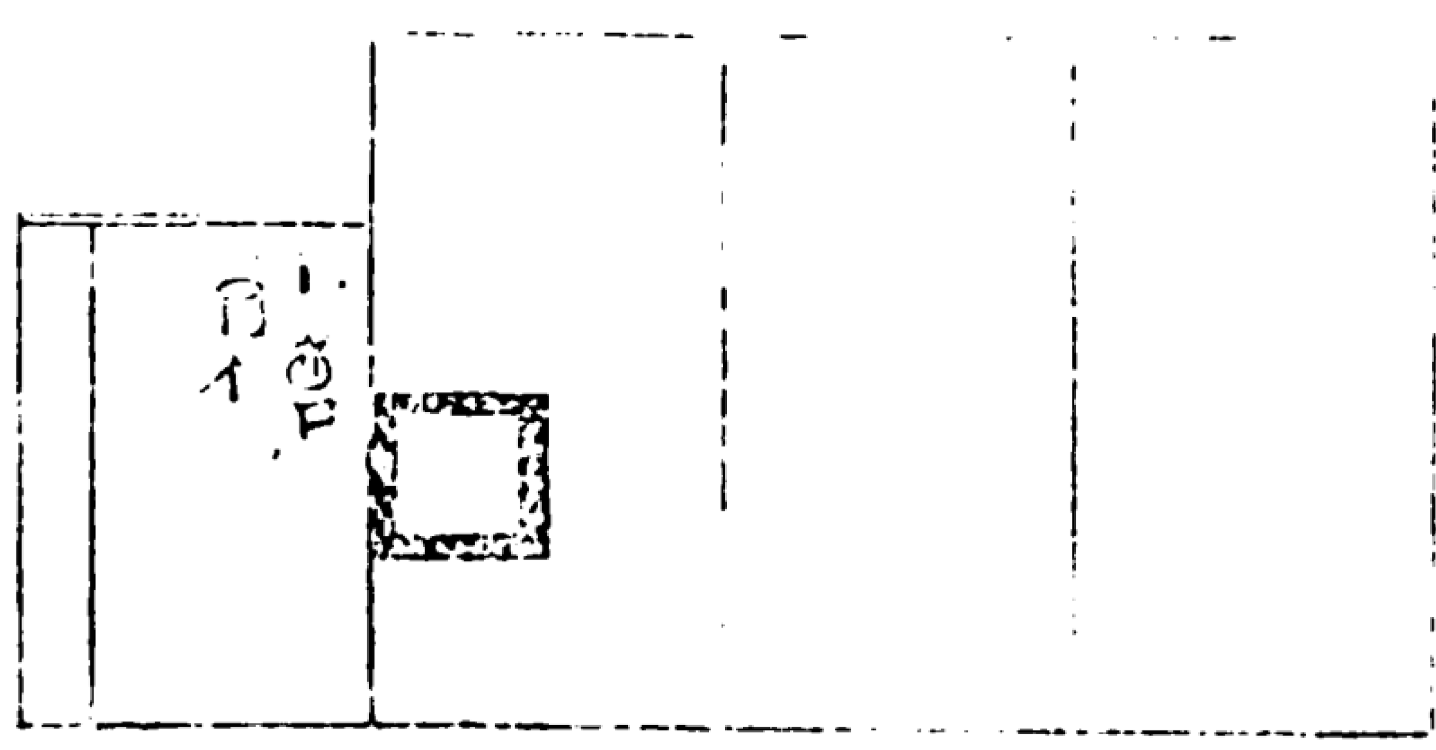
# 茶の湯

## 茶禮初學（承前）

孤峰庵碌仙齋川上不羨
關 葦雄

此の席は、不審庵の名稱と共に、利休居士以來の傳來なり。道具疊の端に板入、點前の向に出入の勝手口有り。開大皷襖なり。

不審庵
水指茶入置合之圖
イ、水指
ロ、茶入



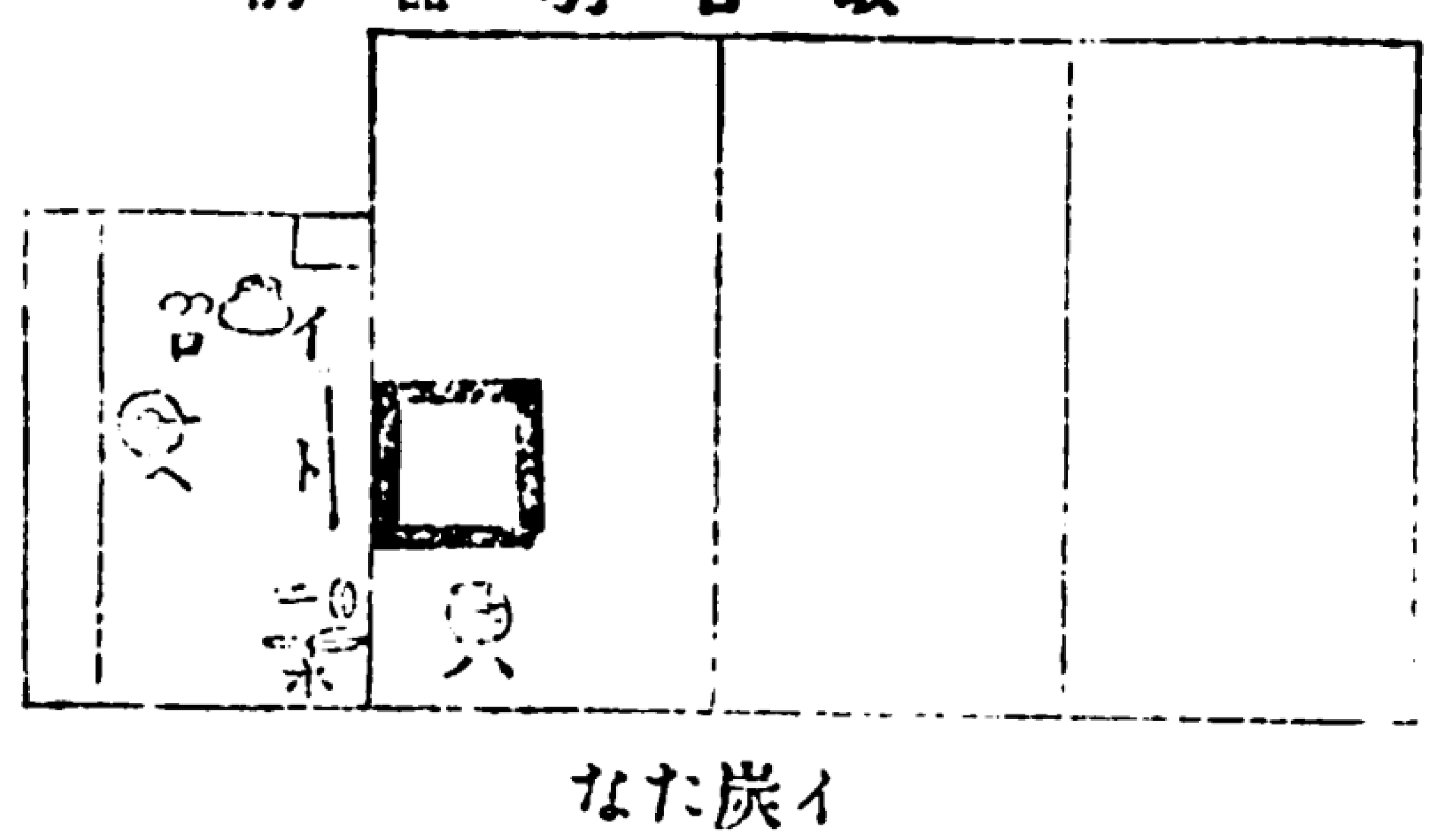



不羨曰、此の席の都合と云ふものは、道具疊のはしに、板入、圖の如し。又、板入方面の壁に、はばき板入有之。點前の向より出ると云ひ、洵に妙なり。何れ、度々の模様替より、如斯成りたるものならんと推考すれ共、何たる歟、古傳不傳。茶道は、古法古質を尊ぶ故、其の所を不改。千家の名物として、今に保存す。度々の火災にかゝるも、是を不改、流儀傳習の諸令孃等、京都巡見の節は、熟覧して、實地に着、其の席を見給ふべし。此の點前は大目の點前なり。故に別に指教せず。前號大目點の所を見合すべし。

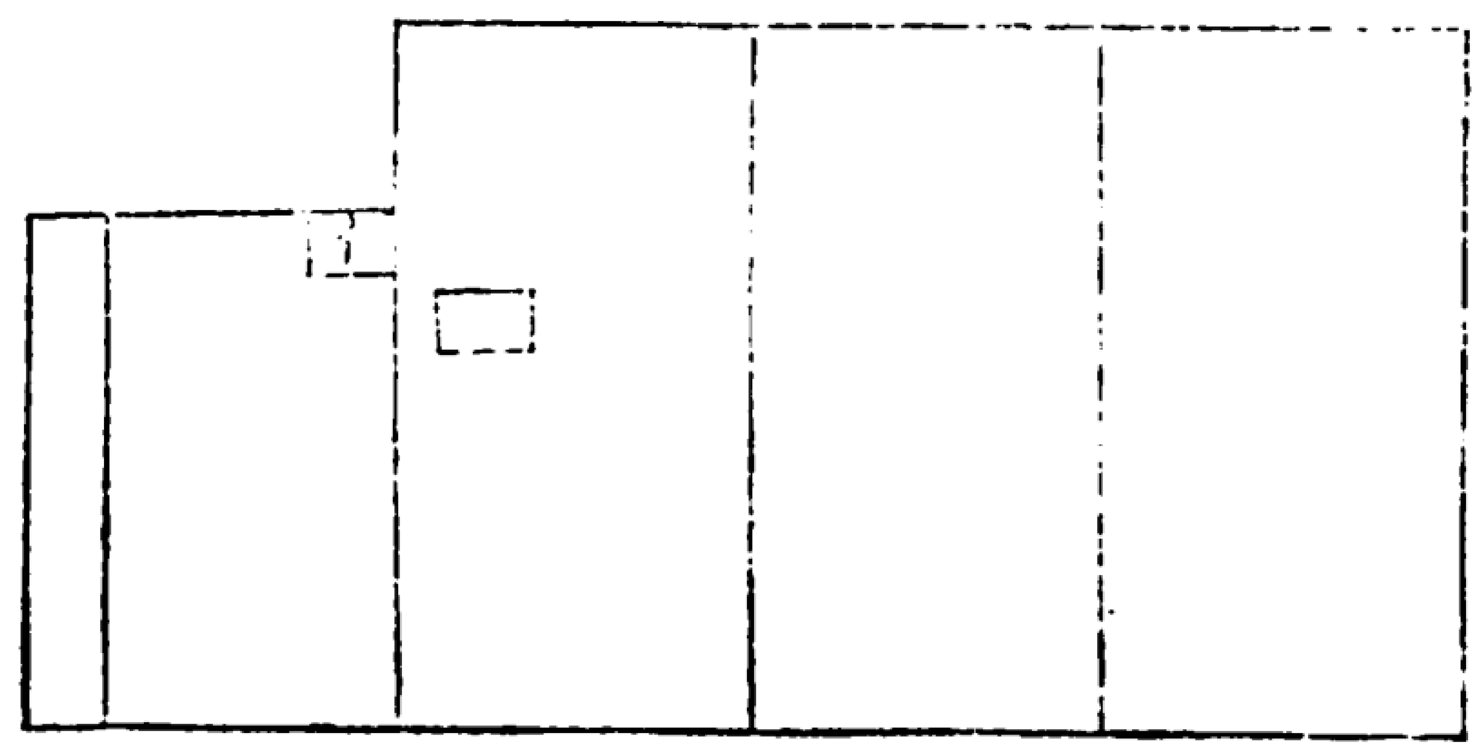
但し道具疊の隅に棚あり。

炭手前

イ、釜
ロ、鐶
ハ、炭取
ニ、香合
ホ、三羽
ヘ、灰器
ト、居前




仝　風爐の置所



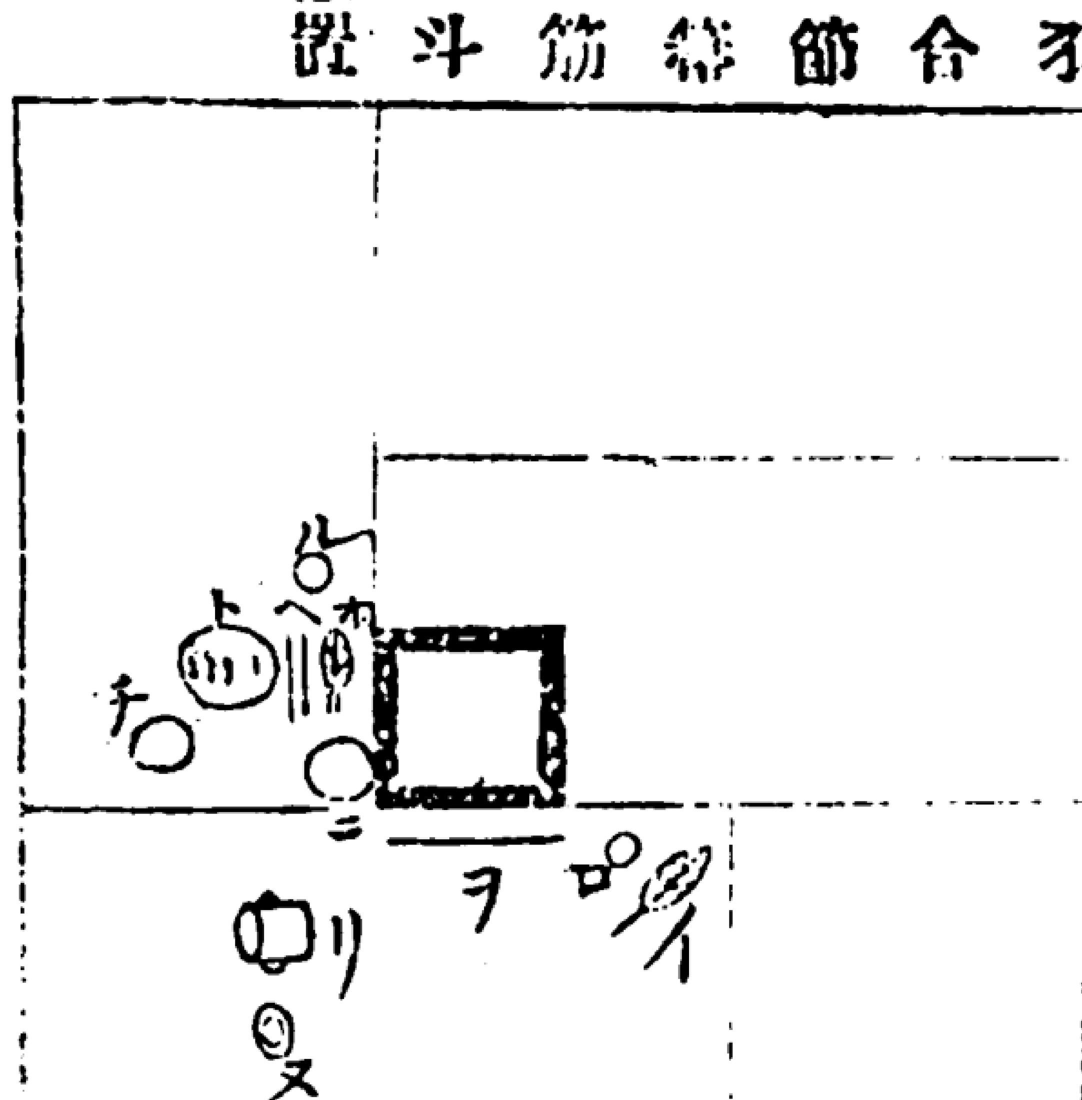
此の點前も普通風爐の點前と差違なければ、別に指敎せず。

道安好席

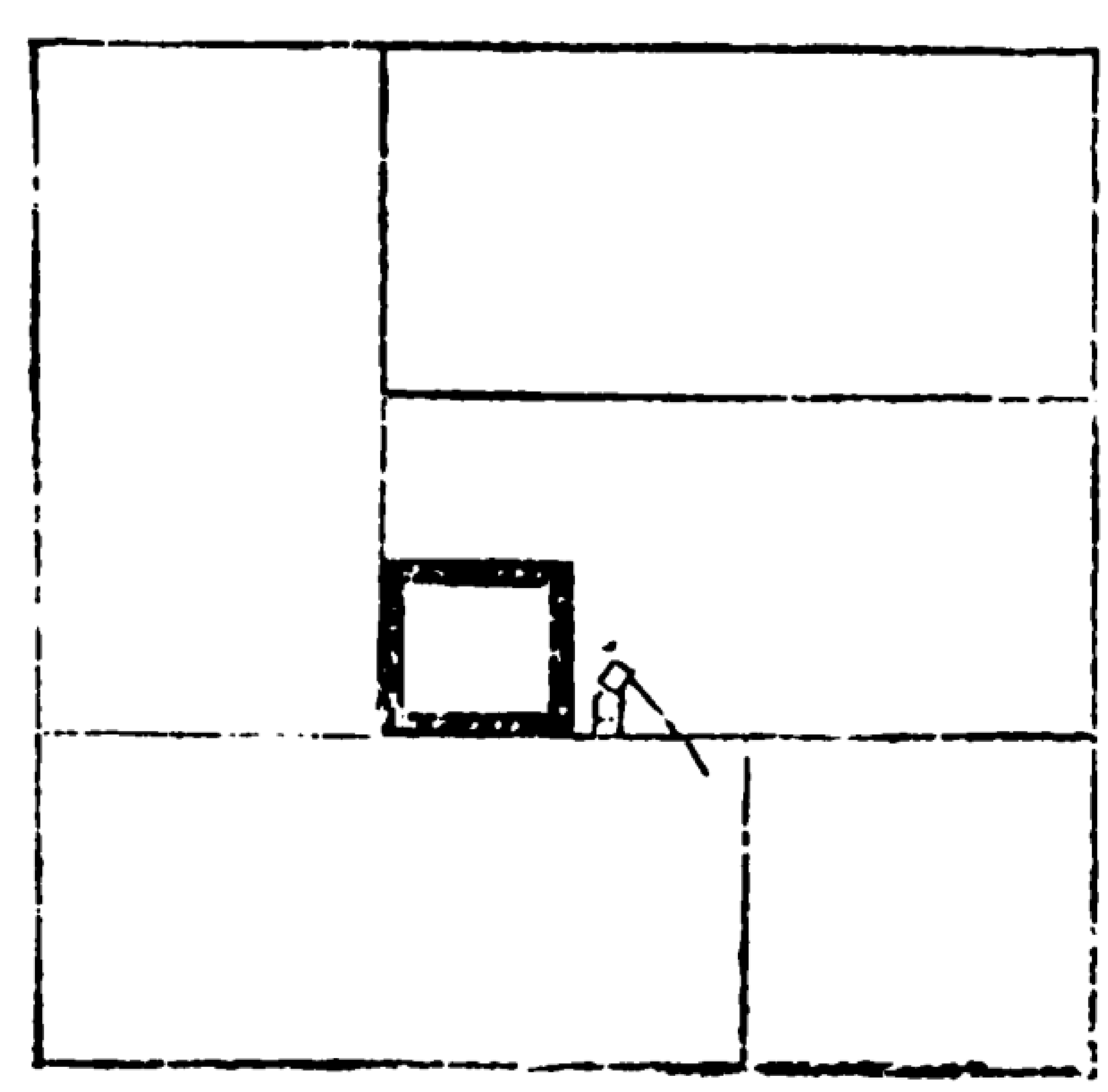
鋪居の上に、蓋置を置き、柄子を引なり。此の所に仕切ある故なり。



イ、三羽
ロ、香合
ニ、灰[illegible]節
ホ、羽箒
ヘ、火筯
ト、炭斗
チ、灰器假置
リ、釜
ヌ、鐶



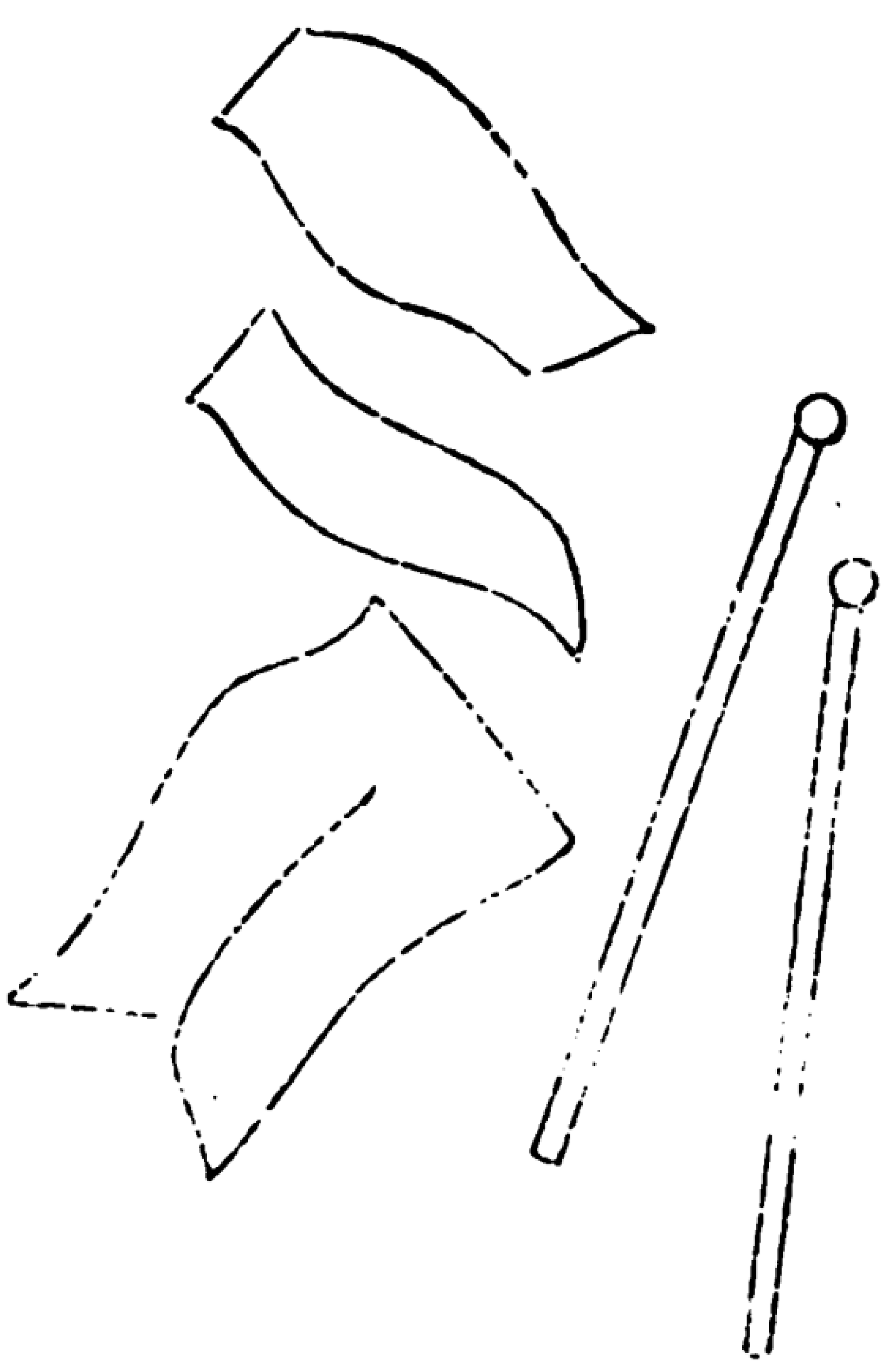
ル、香合客方へ見スル時



# たちぬひ

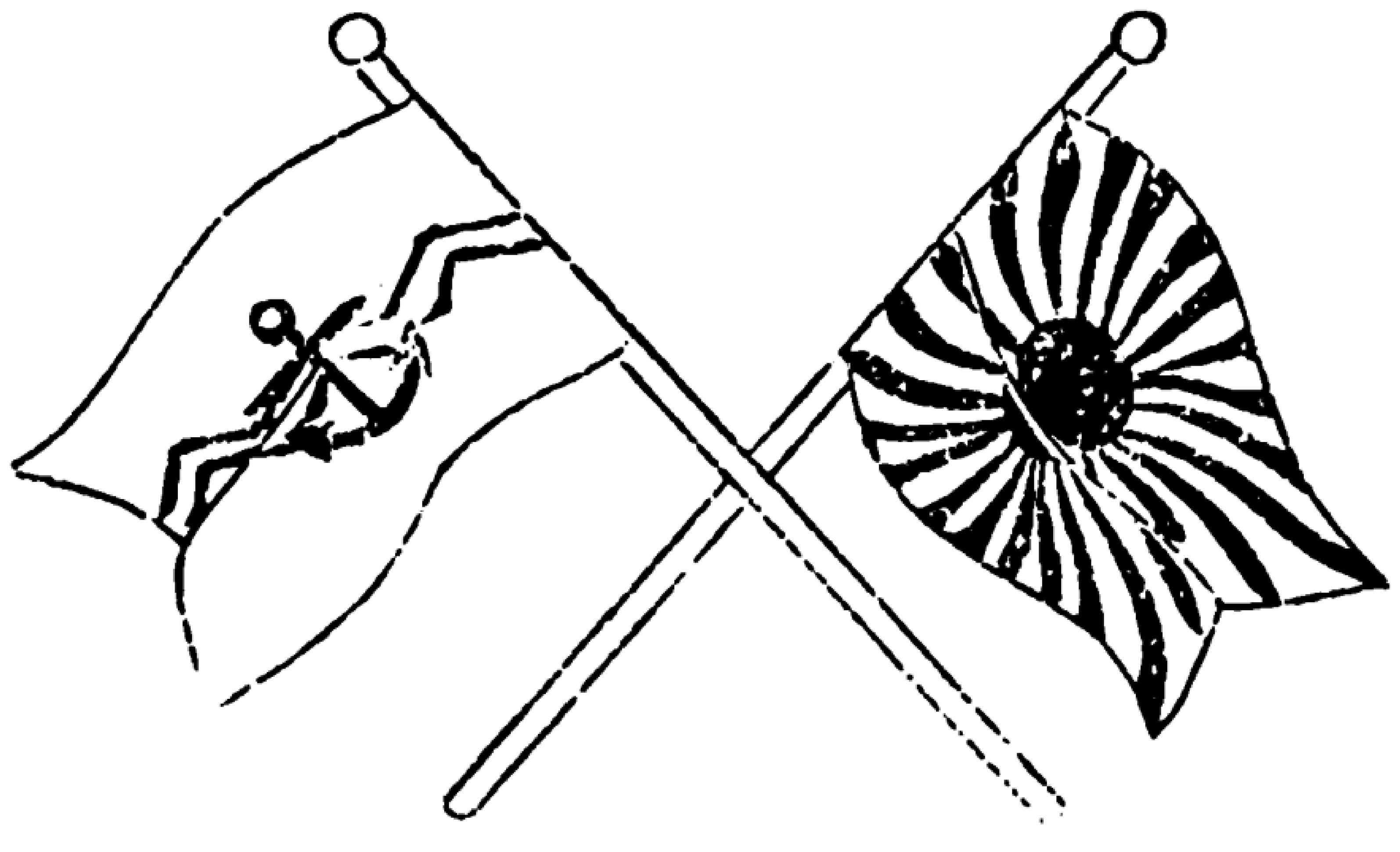
## 背負守（つゞき）

### 國旗形



厚紙を右の形に切り、綿少許を入れ、白絹、白はぶたい、白ちりめんやうの白き切をはりつけ、右の旗は、上圖の上に、下圖を合せはり、之に日の丸を書くべし。左は、ヤッカケの所にてはぎあはせ、すじの如くに見せ、之にも、日の丸が、又は、海軍のしるしのいかりなどを書がき、柄は厚紙のまゝにて墨にてくろくぬり、玉は、金紙、金らん等をはりて、旗のうらがはにはりつけ、裏切をもはりつけて、十文字になし、眞中をとむるなり。圖を見て推し給ひてよ。

左の圖



# だいどころ

### 鶉とゑんじよ白魚を椀盛

鶉ゑんじよは、鶉の毛を引き骨を去り、能く、たたき、摺鉢にて摺り潰し、これに、鷄卵の白身を投れ、摺交せ、食鹽と味淋の煮きりとをいれて、能程に鹽梅し、裏漉にてこし、鉢へとり、鉢のまゝ蒸籠に、いれて、むすなり。白魚を鹽水にて、能あらひ、ざつとゆでゝ、笊にあげ、花果を水にて、よく洗ひ、ゆでゝ、水に浸し置き、又汁は、鰹節の煮出しに、鹽を加へ鹽梅し、白魚花果の、二品も、ざつと煮たてゝ、味を付け、椀に盛り、又、鉢蒸の鶉ゑんじよは、金杓子にて、能程にかきとり、盛合せ、前の鹽梅したる汁を投れ、柚子、又は、木の芽の類を、口に用ふべし。

### 伊勢海老のおろしあえ

伊勢海老の皮を去り、肉を能程にきり、ざつとゆでゝ、大根おろしに、甘酢をかけ、前の海老を、おろしの中にいれて、能く、かき交せて用ゆ。

### 數の子の青あえ

よき數の子をいらみ、しろ水に浸し、やはらかになりたる時、鹽をいれて、能く、もみあらひ、水氣を去り、酒に、ひたし置き、三つ葉、せりの類を洗ひて、葉をかりこまかにたゝき置き、白胡麻を煎りて、摺鉢にて、能く鉢り、前のこまかにたたきたる菜を投れ、能く摺り交せ、味噌を少しいれ、鹽梅し、前の數の子を、能くしぼりて、あえるなり。器に盛りて、うへに、唐からしの粉をかくれぞなか〳〵によし。

# 栄花園

## 冬のくさ木くさ〴〵（六）

○松の花　異名、黄花、十日へりの花、又、若翠、若松など云ふ。寒のいまださらざる頃より、さし出づるものに、黄なるものあり。之を松の花といふ。一説には、松の花は百年に一度さく、目出度ものといへり。

歌　草廬　阿

君住まばいつも春なる宿なれと　色そふまつのさきをしるらむ

○うすべやなき　こは、あまりにおもしろからねど、何なきま氷のうへに、柳眉とやらむいふもの、ほころびそめて、なにとなうあいらし。一月の柱かくしなどに結びてかざりとす。

○白玉　これも、さしもはえあるものならねど、時は時なれど、一月の飾とす。花の色は白し。

○福壽草　元日にさくゆゑ、元日草ともいふなり。とこかざりなどにしたらむは、いと、目出度ものゝかざりなり。

俳　風斯

佐保姫の笑ひ初めや福壽草

また

福壽草たゞに目出度れさし哉

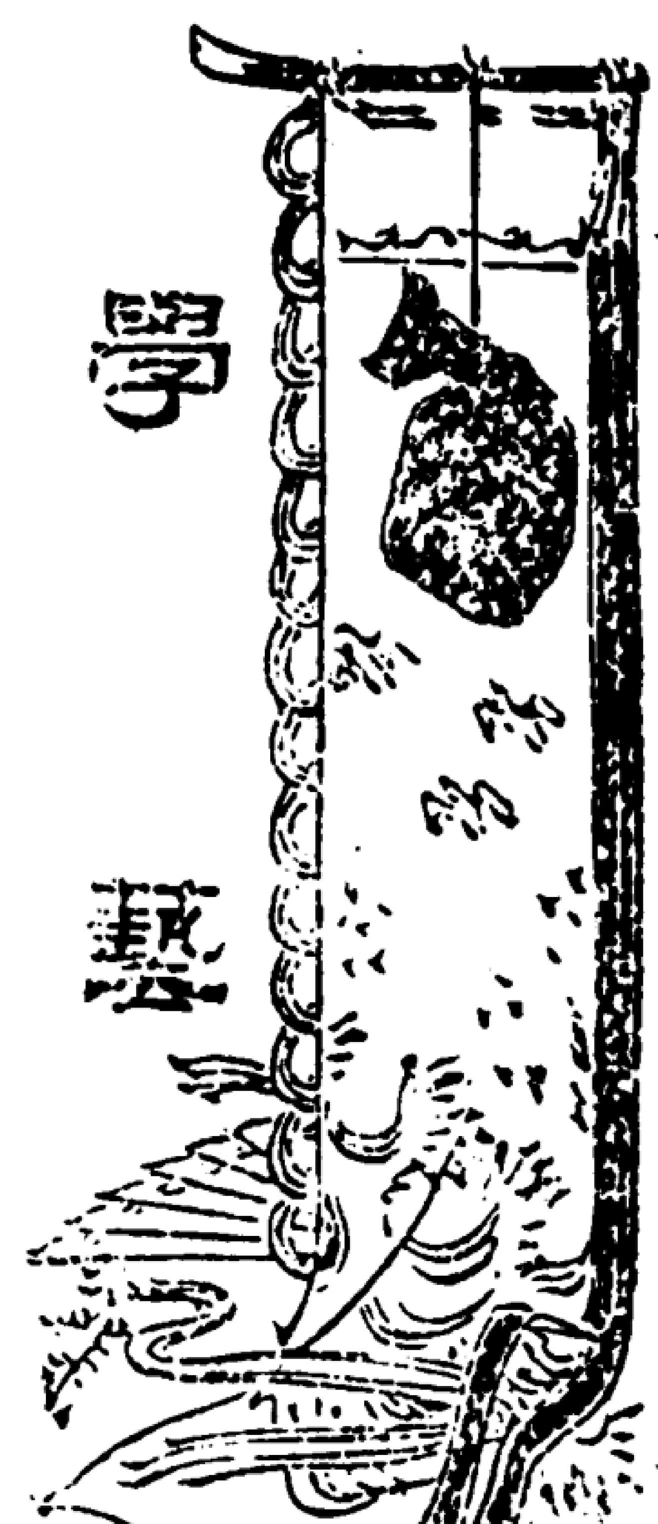
詩

壽福草五字對句

淑氣煙相宮　瑞凝三朶草　風光草佝榮　春入萬季秋

浅黄福壽草と云ふものあり。二重の大りんにて、薄白黄にて、浅黄に見ゆ。後白くなる。また、八重福壽草と云ふあり。八重とはいへ、五六へにて、花の中、すべて、黄多し。

○野菜　は、當分の内は、芹、小松菜、ほうれん草、みづは、うど。




# 國文學講義

磯野徳文

(前回の續)

○皇孫を降して、天下の大君と定め給ひしより。

クワウソンをクダして、テンカのオホキミとサダめ給ひしより、とよむ。又、皇孫を、スメミマとも、スメミマノミコトとも、天下を、アメノシタとも、アメガシタ、ともよむ。何れにてもこゝろは一つなり。皇孫を國語にては、スメミマと申す。スメの意義は、さきにいへり。ミマは、ミウマゴといふ言葉の略けたるなるべし。ミは尊敬のことば、ウマゴのウマは、生むこゝろ、コは子なるべし。古は、子孫をウミノコといひ、子孫代々絶えじといふこゝろに、子孫乃八十續々などいへり。今、我が子の子を孫(マゴ)といふは、ウマゴの略けたるなるべし。さて、こゝに、皇孫と申すは、天津彦々火瓊々杵尊を申し奉るなり。瓊々杵尊は、皇祖天照大御神の御子正哉吾勝々速日天押穂耳尊と、皇祖高皇産靈尊の御女栲幡千々姫命との間に生れ給ひし御方なれど、天照大御神よりも、高皇産靈尊よりも、御孫にあたらせ給ふによりて、皇孫と申し奉るなるべし。(この後、御代々天皇を皇孫尊とも申しならへり。)降しては、天上、即、高天原より、此の國に下らしめ給ひしなり。天下は、此の國土をいふ。アメとは、上方をいへり。國土は、天の下にあればいふなり。

アメガシタといふも、同じこゝろなれど、言語の上にていへば、アメノシタといふとは、いささか、差別あり。天ノ下は、直に、天ノ下ニアルよりいふにて、天ガ下は、天ガオホヘル下といふことばの、オホヘルといふ動詞をはぶきていふなり。大君の大はたふとみていふことは、君は、國の主なり。あるがなかにもすぐれて、此の上もなく、二方とはならぶまじき尊き御方を申す。今の世にて申せど、恐多けれども、天皇陛下を申し奉るなり。定めは、俗言にキメル（極むる義なるべし）などのこゝろなり。それと正しく立てゝ、亂しかへぬをいふなり。給ひは、敬語なり。上の太古にといふなり。こゝまでの文を明めん爲に、今、歴史のことがらを引き出でん。



天地の初の時、高天原に、天御中主神と申す神、はじめておはしまし、次に、高皇產靈神、神皇產靈神おはしましき。此の三神は、萬物を造らせ給ひ、其の化育を主らせ給ふ。この神々を、天つ神と申す。

この時、天地、未、一なりしが、自わかれて、二となり、可美葦牙彦舅神、天常立神おはしまし、又、國常立尊をはじめて、伊弉諾尊、伊弉冉尊まで、七代の神おはしましき。

こゝに、伊弉諾尊、伊弉冉尊の二神、天つ神の詔をうけたまはりて、この國土を修理し給ひ、はじめて、八尋殿を造りて、夫婦の禮を起し給へり。かくて、群神を生み給ひて、各、其の職を分ち給ひき。二神、又、天下の君たるべき神を生み給はんとて、天照大御神、素盞嗚尊を生ませ給ふ。天照大御神は、神

德高くまし〳〵て、天地の間を照らし給ひしかば、伊弉諾尊、大に喜ばせ給ひて、勅して、高天原を治めしめ給ひ、又、素盞嗚尊には、國土の事を掌らしめ給ひき。

さるを、素盞嗚尊は、御母伊弉冊尊を慕ひて。根國に赴かせ給ひしかば、天照大御神、高皇產靈神と謀り給ひて、御子天忍穗耳尊を、この國の君と定め給ひき。

天照大御神、諸神と相議し給ひ、大國主命をして、國を奉らしめむとし給ひて、經津主命、武甕槌命を遣し給ふ。二神、出雲に到りて、このよしを傳へ給ふに、大國主命、謹みて、命を拜し給へり。こゝに、二神、なほ、歸順せざる者どもを平らげて、復命し給ひき。

かゝるほどに、天忍穗耳尊、御子彥火瓊々杵尊生れ給ひしかば、代りて、降臨せしめ給ふ。時に、天照大御神、皇孫瓊々杵尊に、三種の神器を授け給ふとて、まづ、寶鏡を御手に持たせ給ひて「この寶鏡を視まさんこと、當に、吾を視るがごとくし、同殿の内に齋き祀るべし。」と宣ひ、又「豐葦原の瑞穗國は、我が子孫の王たるべき地なり。汝皇孫就きて治らせ。寶祚の隆えまさんこと、當に、天壤と共に、窮り無かるべし。」と宣ひて、天兒屋根命、太玉命には、專、祭政の事を掌らしめ、なほ、諸神をも、隨はしめて、降臨せしめ給へり。

かくて、瓊々杵尊、諸神を率て、たゝせ給へるに、猿田彥命、途に迎へて、先導し奉り、日向の高千穗峰に降らせ給ひて、吾田の笠狹崎に、宮造して、おはしましき。尊崩じ給ひて、彥火々出見尊、鸕鷀草葺不合尊、相繼がせ給

ひき。（國史）

この一節にて、神代の大略は知らるべし。なほ、御系統の大かたを示さんに、

○天之御中主神 ― 高皇產靈神
　　　　　　　― 神皇產靈神

（以上造化三神）― 可美葦牙彥舅神

天常立神 ― 國常立神

伊弉諾尊
伊弉冊尊 ―（この二神は、國土を造り給ひし神）

天照大御神 ― 天忍穗耳尊

素戔嗚尊……大國主神 ― 事代主神

彥火瓊々杵尊 ―（此の國に降臨し給ひし神）

彥火々出見尊 ― 鸕鷀草葺不合尊

神日本磐余彥尊（神武天皇と申し奉る。この御時より、日向の國をたゝせ給ひて、大和の國にうつせら給へり）

（つゞく）



## 漢文學講義（二十三）

大林弘一郎

廿、圓山應擧　二　菊池純

又有乞應擧畫者。仲選揀櫻本無當意者。遂詣大坂某侯邸。而見飼鷹。寫其眞予之。後有鷹師觀之曰。此謂饑鷹也。仲選將問其故。鷹師不告而去。乃遣人大坂。詳問前日鷹。則新獲而未與食者。其平生用意如此。

所レ著有二青山紅葉。後素餘言等一。弟子長澤蘆雪。僧月仙等。最爲二巨擘一。

この段も、前段と同じく、寫生に用意せしこと深きを示したるなり。

又とは、前にあげし一例の外に、また一例といふ意なり。ある時、鷹の畫を乞ひしものありしが、應擧は、いろ〳〵、模寫し置きし圖などを取調べしも、心にかなひたるものなかりしかば、遂に、大坂なる、某の侯の屋敷に往き、實地に、生ける鷹を見ることを得、細かに、その眞をうつし、後に畫を求めし人に與へたりき。然るに、ある時、鷹匠（鷹の飼養等を主る。諸侯の家には、必、之を任用せり。）某、この畫を觀て、「こは、饑ゑたる鷹を畫けるなり。」といひけり。應擧、その理由を聞かんとせしに、鷹匠は告げずして去りぬ。よりて、人を大坂に遣し、前日見し鷹は、如何なる有樣なりしかを問はしめけるに、果して、新に獲て、未、食を與へざりしものなりきとぞ。こは、その眞を寫したるが爲、饑ゑたるさままでも、寫し得たりしなるべし。應擧が、平生意を技術に用ゐしこと、かくの如し。人の批難をうけたる時は、之を等閑にせずして、その理由を究め、己が及ばざる所を補ふ心厚かりしは、全く、其の技の人に絶するに至りし所以なり。

應擧が著書に、青山紅葉また、後素餘言等あり。その門人にて、最大家となりしは、蘆雪、月仙なりき。蘆雪は、名を魚、字を氷計、といひ、山城の淀の人なり、月仙は、名を元瑞、字を祥譽といひ、伊勢の山田なる寂照寺に住したりき。二人の畫風は、各、一派をな

して、世に賞せられたり。いづれも奇拔なる所あり。一見しては、人をして、應擧の流にあらざるかと思はしむる程なり。巨擘とは、大指のことにて、孟子に見えたり。大家といふ義に用ゐるなり。

菊池純曰。圓山仲選畫睡猪及飼鷹之事。與東坡題戴嵩鬪牛圖之言。並論而均評。庶幾足警醒畫史心膽邪。昔人曰。百聞不如一見。又曰。詢芻蕘。時史貴耳而賤目。故不免老農。鷹師之嗤笑者往々而有焉。仲選虛懷如竹。求益不已。蓋非貴耳而賤目之比也。宜乎其名之赫著而日盛也。仲選其知古之道歟。

とは、評論なり。この一段には、すべて、何事に限らず、自己の知らざることは、その道を求めて、之を聞き、また、實際に就きて、



之を見、然る後、滿足すべく、決して、輕率に、杜撰なる、推量もて事を斷ずべからざる意を述べ、古人の語に徵して、論定し、應擧が、心を虛うして、人の說を納れたるを賞美したるなり。

純曰はく、圓山仲選が睡猪、及、鷹を畫きし前述の話は、むかし、宋の蘇軾(字は子瞻、東坡居士と號し、詩文を以て名あり。蘇詢の子にして、弟轍と共に三蘇と稱せられ、又、大蘇ともいひ、唐宋八大家の一人なり。)が戴嵩が畫ける鬪牛の圖に題せし言と並べ論じ、之を評せば、庶くは、世の畫家たる人の心を警戒し、醒悟せしむるに足らんか。

戴嵩は、唐の頃の畫人にて、名ある人なり。その畫ける鬪牛の圖は、奇珍の品なり。蘇東坡が、之を觀て、題せし文は、左の如し。(東

跋題跋…清の温一貞編)

書二戴嵩畫牛

蜀中有二杜處士一好二書畫一。所レ寶以レ百數。有二戴嵩牛一軸一。尤所レ愛。錦囊玉軸。常以自隨。一日曝二書畫一。有二一牧童一見レ之。拊レ掌大咲曰。此畫二鬪牛一也。牛鬪力在レ角。尾搐二入兩股間一。今乃掉レ尾而鬪。謬矣。處士咲而然レ之。古語有レ云。耕當レ問レ奴。織當レ問レ婢。不レ可レ改也。

この文にても、戴嵩が如き大家の畫にも、猶、實際と違へることあり、却りて牧童の如き、實地に就きて、能く見慣れたるものに及はず、その牛の尾を股間に引き入れしさまを寫さゞるは謬なることを論じたるなり。されば、このことを以て、應擧のことを並べて評論せばよからんといへるなり。

さて、むかしの人も、「百たび聞かんよりは、一度見る方まされり。」といへり。(この百聞云々の語は、漢書の趙充國の傳に見えたる趙充國が語なり。)また、芻蕘とて、草を苅り薪を伐るなどの賤しきわざをなすものに就きても問ひはかるべきこととありともいへり。(この語は、詩經の板の篇に見ても、先民有レ言詢二于芻蕘一とあり。)すべて、自己の知らぬことは、その道の人に就きて、聞きもし、見もすべきことなりとの意をいへるなり。さるを世の多くの畵家は、(時史とは、一時の畵史といふが如し。とかく、耳にのみ聞きたることを貴びて、深く、その實を究め、目にて、實物を見ることを賤み忌む風あるは、事に熱心ならざるよりのことなれど、その爲に、或は、老

農鷹匠が應擧の畫を誹り笑へる如く、世人より笑を受くることは、往々これあるを免れざるなり。(貴レ耳而賤レ目、とは、文選の張子平が東京賦に見えたり。)然るに、應擧は、虛懷、即、虛心平氣に、人の評を聽き、竹の空心なるが如く、よく、己の心を空しくし、人の意見を納れ、益を得んことを求めて、やむことなかりしは、實に、稱すべき行にして、世の人の耳をのみ貴びて、實際を見るを賤むが如き比類にはあらざるなり。されば、その名譽も、あきらかに世に著はれて、日々に盛なるに至れるも尤なることなり。應擧は、それ自身に、よく古の道とする所のものを知れりしなるかなと讃賞したるなり。古の道とは、百聞云々詢二芻蕘一などの道理をさしていへるなり。

或曰。仲選爲レ人、寫二所レ謂幽靈者一。有二婢女一。視レ之昏倒氣絕。今視二押上眞盛寺所藏ノ地獄變相圖一。使二人惴惴然一。則益知二其言不一レ虛也。

この段には、その技の非凡なるを稱せしなり。ある人の話によれば、應擧が、かつて、人の依賴にて、幽靈の圖を畫きしに、下婢は、不意にこれを見て、そのおそろしきさまに驚き、目昏みてうち仆れしまゝ氣もたえし程なりきといへり。今、東京の本所區押上なる眞盛寺に藏する地獄の種々のさまを畫ける圖を視るに、いかにも、人をして惴々として、身の毛も立つばかり恐懼の念を起さしむる程なれば、或人の言も、決して虛言ならざるを知れりとなり。惴々の文字も詩經の黃鳥の篇に出でたり。深く、懼るゝ意なり。

さて、この評論の意は、單に、技術に屬する事のみの如くなれども、作者の意は、ひろく、學者をも戒めたる心なるべし。すべて、世には耳學の徒多く、自、力を盡し、心を苦しめ、研究をつとむるもの少し。たゞ、人に聞くのみを事とし、自、伐するをはかる人々は、いたく省察すべきことならずや。



# 漫録

## わが國家（下）

鹽井正男

山上の憶良が、

天へゆかば、汝がまに〳〵。地ならば、大王居ます。このてらす日月の下は、天雲のむかぶすきはみ、谷蟆のさ渡るきはみ、きこしをす國のまほらぞ。かにかくに、ほしきまに〳〵。しかにはあらじか。

また曰く、

久方の天路は遠しなほ〳〵に
　家にかへりてなりをしまさに

これ當時、儒學の論、佛教の說の、やうやく深く入り來りて、世人、往々、昔日の至情一片の人にあらずして、空論空理に馳するあるをかなしみて、これをいましめ諭したるものにて、この世には、我が臣民の崇拜すべき　天皇のましませり。我々は、唯　天皇を崇して、そのみ心に從ひ、そのみ言にまかせて、つとめゆくべきなり。空論空理に馳せずして、各、我が家に在りて、自家のなり（業）

をまめやかにつとむべし。これ、臣民の分のみと教へたるなり。憶良のいふ所や、誠に、我が國臣民が、固有の觀念なり。天皇を神とも、父ともうやまひ崇拜して、一意これに隨ひ、專心これにつとめ、また他念なきは、誠に日本臣民が固有の美なる心ざしなり。而して、その心ざしの來る所や、理にあらず、論にあらず。唯、神ながら言あげせぬ至情なり。なほ、古人が天皇に仕へ奉れる至情につきて、一二のおもしろき例をあぐれば、垂仁天皇の詔をうけたまはりて、幾多の星霜、萬里の波濤をふみて、遠く常世の絶域に、橘の木の實をたづね來て、帝の、既にかくれまして、れは、さずときくかなしさに、今は生くといへども何の益かあらむとて、天皇の御陵にまゐり、橘の實をさゝげまつり、つひに陵の前に慟哭して、はてたりといふ田道間守、また、おなじ　天皇のみことのまに〳〵、　鳥のあとを追ひありきて、北陸のはてまで至れりときく天の湯河板擧、さては、仁徳天皇の御代、　天皇の詔を傳へむ爲めに、三日三夜、ふりつゞく雨中、山城の筒城の宮の庭前に立ち濡れて動かざりしといふ口子の臣など、今の世の智をのみ尊び理をのみとく人々にきかせたらむには、愚とや笑はむ。狂とやそしらむ。されど、我が古への臣民が、君につくすの至情は、實にかゝるばかりのものありしなり。なほ、わが臣民の純忠至誠の情は、萬葉集一部をよまば、幾多かぎりもあらぬものあるを知るべし。持統天皇が藤原の大宮造らせられし時、

藤原の大宮つかへあれつくや
をとめがともはともしきろかも

とて、宮づくりに仕へたる男が、朝夕天皇の御側去らず、宮づかへしたてまつる、宮女の身の上を

うらやみたる情をくみ、また、日並皇子の薨去あらせられし時、

天地と共に終へなむと思ひつゝ
　つかへまつりし心たがひぬ

とて、舍人がよめる情ばかりきくも、古への、我が臣民が天皇を思ふの至情は、實に、彼の、

世の中にさらぬ別れのなくもがな
　千代もと祈る親の子のため

と、業平朝臣がうたひつくしたる親を思ふ情も、たゞならぬものあるにはあらずや。

我が國家、君臣の至情や、斯の如し。我が國家は、父子もたゞならざる至情を以てなれり。而して理によるにあらず。論によるにあらず。唯一片の自らなる情より出づ。我が國家の本や、誠に至情を以てなれる國家なり。

あはれ、このわが國家や、萬國に卓絕したる皇國の歴史は、實にこゝに本づけり。我が國家、古へに、斯の如き本ありて、今日につきぬ光りのめでたきはあるなり。なほ、國家の行く末を思ふの士は、我が將來の國民に、この本を養ふ事をつとめざるべからず。やがて、將來の國民に、この至情を養ふことをつとめざるべからず。されど、今日歐州の文明は、智識と理論とよりなる。さるが故に、今日の文明の敎育は、智識と理論との上に流れて、情の敎育は、全く、よそに捨てられたる如し。されど、國家存立の本は、國民の至情にあり。智識理論は末なり。國民に至誠の情なくしては、學問如何に發達するも、國家の滅亡は逃るべからず。文明の智識如何に進歩するも、國家の衰運はとゞむべからず。理論如何に發達するも、亡國の難はうちやぶるべからず。遠く希臘といひ、近く支那といひ、照々として、これを敎ふるの鑑

ならずや。

退いて、我が皇國の歴史を見よ。蘇我横逆の誅滅は、鎌足等が、至誠の情に助けられ、道鏡簒立の姦計は、全く清麻呂が至誠の情にやぶられ、四百餘州をこぞりたる、元寇を、筑紫の海上にみなごろしにして、弘安の國威をあげたるは、時宗等が至誠の情による所多く、七道をふみあらしたる北條の豺狼をつくして、建武中興の業をたてたるは楠公が至誠の情により、亂麻と亂れたる應仁の人心を治めて、國家の衰運を挽回したるは、信長秀吉が至誠の情の力にて、徳川三百年跋扈せる武門の政弊をやぶりて、明治維新の盛朝をたてたるは、當時の尊王攘夷の志士が至誠の情、あづかりて力多きにあらずや。國步艱難の時にあたりても、よくこれを扶翼して進ましむる者は、實に智にあらず、理論にあらず、唯一片至誠の情のみ。累卵のあやうききはに當りても、よく國家を保護して、泰山の安きにおくも、實に智にあらず、理論にあらず、唯一片至誠の情のみ。平時はいふまでもあらざるなり、國民の至情の力や、斯の如し。これを國家存立の本となすも、あたらずとせむや。これを國家教育の本となすも、あたらずとせむや。至情や、國民たるの本なり。やがて國家の本なり。國民たるものは、先づ至情なかるべからず。至情のめでたきありて、後に、智の深きも求むべし。理論の高きも望むべし。これ、眞に國家に功あるべき國民なり。古來國家をあやまれる國民を見よ。多く、此の至情なき智者のみ。この情なき理論家のみ。至情や、國家の本なり。やがて、國民の教育の本たらざるべからず。至情の本を養ひて、而して智も磨かざるべからず。理論も教へざるべからず。これ、眞に國家に功あるべき國民をつく

るの道なり。また、教育はもとよりにて、すべて、智識の琢磨といひ、學理の研究といひ、國家を本におかざるべからず。國家を忘れたる智識學理の研究は　余は望まざるなり。國家に用なければなり。しかも、國家をあやまるものあればなり。我が國家を思ふの士よ。いかならむ道に立つも、いかならむ業につとむるも、我が國家の特色を忘るべからず。而して、我が國民固有の至情を忘るべからず。誠に富士の秀嶺の千秋高く、田古の清浦の萬古蒼く、東洋に屹立せるめでたき、我が國の姿をつくれる力は、他にもなほさまざまの助けたる所あるべきも、最も遠く、最も深き本源は、全く此の固有の特色にあればなり。

# 新婚の夫妻に告ぐる辭

細川潤次郎

夫れ、夫妻の身は、猶一身の如し。夫妻の間は、永久悠遠なる交際なかるべからず。此の交際を全うするには、首として、相愛せざるべからず。愛情は、交際を粘連する膠漆なり。愛情は交際を緊束する繩束なり。然れども、愛にのみ偏なるときは、其の弊狎昵に過ぐる所ありて、交際を全し能はざることあるべし。此の弊なからんことを欲せば、宜く、相敵せざるべからず。夫妻相敬することと賓の如しとは、伉儷の美徳なりとす。相愛し、相敬する時は、夫妻の交際全かるべしと雖も、人各其の性質を異にし、其の所見も、亦同じからず。男子の尙ぶ所は、未必しも、女子の尙ぶ所にあらず。女子の喜ぶ所は、未必しも、男子の

喜ぶ所にあらず。若夫妻の一方に於て、他の一方の、己と同一ならむことを望て得べからざる時は、此の交際を全くすることを得ざるべし。此の弊なからしむることを欲するときは、宜く相恕せざるべからず。相愛し、相敬し、又、能く相恕することとは、凡百の交際に適用すべきものにして、夫妻の交際に於ける要道をして始あり、終あらしめんことを。

此の文の末段に、相恕の事をいへるは、固より尋常の説なれども、其の趣味は、全く袁氏世範の睦親の篇の、性不可以强合といへる條に本づきたるものなれば、其の全文を、左に掲げて讀書の參考に供せんとす。

人之至親莫過於父子兄弟。而父子兄弟有不和者。父子或因於責善。兄弟或因於爭財。有不因責善爭財而不和者。世人見其不和



或就其中分別是非。而莫明其由。蓋人之性。或寬緩。或褊急。或剛暴。或柔懦。或嚴重。或輕薄。或持撿。或放縱。或喜閒靜。或喜紛拏（紛拏、牽引也。攙也。謂擾亂也。）或所見者小。或所見者大。所禀自是不同。父必欲子之性合於己。子性未必然。兄欲弟之性合於己。弟之性未必然。其性不可得而合。則其言行亦不可得而合。此父子兄弟不和之根源也。况凡臨事之際。一以爲是一以爲非。一以爲當先。一以爲當後。一以爲宜急。一以爲宜緩。其不齊如此。若互欲同於己。必致於爭論。爭論不勝。至於再三。至於十數。則不和之情自茲而起。或至於終身失歡。若悉悟此理。爲父兄者通情於子弟。而不責子弟之同於己。爲子弟者。仰承於父兄。而不望父兄。惟己之聽。則處事之際必相和協無乖爭之患。孔子曰事父母幾諫。見志不從。

又敬不ㇾ違。勞而不ㇾ怨。見ニタリ論語里仁篇ニ此聖人教ニ人和ㇾ家之要術ㇾ也。宜ㇾ熟ニ思之ㇾ。

## 主從心得草　後編（續）

諏訪忠元寄贈

然れ共、誠の陰徳善事の出來がたき人は、名聞にも、人見せにも善事はなすべし。其の功徳は急度ある事なり。又かりにも、惡事はすべからず。其の災ひの來る事速なり。又よくはなけれども、多くは名聞で持て居る世界なれば、名聞にも善事をすれば、善人仲間なり。日本に名高い大德惠心僧都さへ、初めの内は、名聞の善事をなし給へども後には、誠の道に入り給ふ故に、名聞の二字を掛物にして、拜み給ふことなり。況や、其の外の者共は、名聞はある筈の事なり。此の世界は、名聞ある故に、惡事をする人少なし。若、名聞がなければ、惡事する人多し。大方は名聞ある故に、此の世界は、持て居るなり。然らば、名聞とて、あまり憎むべき事にあらずとしるべし。名聞なしに誠の善事の出來る人は、大上々吉の人なり、若誠の善事の出來がたき人は、名聞にも善事をすべし。名聞にも善事をすれば、終には、誠の道に入りて、天祿を得る人多し。人々考へ給へ。又、いつれの子もかせぎ出す事はしらずして、唯親のゆつりを頼み、親の物を取りて遣ふつもり計りする子多し。又、親のなんぎを少しもかまはず、己れが身勝手計りする子多し。少しも、油斷すべからず親たる者、我身の用心すべし。

くひのみをせずにためたる金銀を子になくされる親は馬鹿者

あさましや子の行末はかなしめど親の行末思ふ

子はなし

此の歌の通なり。子は三界の首伽、子なきにしかずの經文少も間違なし。親たる者、深く考へ玉へ。去る所に神主あり。大悪性の一子を持て、甚たなんぎなり。女郎を買うやら、ばくちう打つやら、大酒呑やう、悪い事といふ悪い事をして、少なりとも取所のない悪子なり。二親のむねに釘打つやうな事ばかりする、心をいためる事すさましく、人にいわれぬ難儀なんじゆうなり。今日や勘當せん。明日や勘當せんと思へども一人子の事なれば勘當を仕兼て居る。又、神の御利生にて、悪心も直りやせんと、親父は毎朝未明に社壇に向て祈りけるやうは、御覧の通り、悪性の一子を持ちまして、甚たなんぎ仕る。何卒神力をもつて御直し下さらば、生々世々の御恩ならん。夫婦共、いかばかりか大悦至極に奉存候。一人の事なれば、家督を譲り、永く官仕へ致させ度奉存候。何卒、かれの悪性の直り候様に、ひとへに願ひ奉りますと、毎朝未明に参詣して祈りけるを、かの一子悪性者、此の事をよくしつて居て、ある時、夜の明ぬ前より神殿の内へ忍びこみ、父の参詣を待所に、かの親父、例の通り、悪性の一子を持ちまして、甚た難儀仕る。何卒善心に相成り候様に御願ひ申上候と、柏手打て、歸らんとする所に、かの悪性者社檀の内より、細き聲にて、其の方毎朝社檀へ、歩をはこび、子息の善心になるやうにとの願ひ尤なり。其の志しに感じて、今、汝に告をなす。愼んで承はれ。汝が子も、一旦はわしかりしが、今は大きによくなりたり。早く妻を持せ、家督を譲り、汝は隱居せよと、社檀の内より、御告あれば、わつとかんじて、御宣詫の趣き承知仕りました。早速仰せの通りに、取計ひますというて、

罷り立所を、又呼かへして、其の妻の事をいそげと、重ての神勅の聲は、どうか、我子の惡徒者によく似たる所に、疑がはしく思ひて、社檀の扉を開て見れば、彼の惡性者は、社檀の中に二王立に立ちて居る。流石の禰宜殿も、びつくり仰天しながら、己れはせがれの左門でないか。神勅といつはり、親をたばかる不屆者、手討にせんと、脇指の柄に手かける、内に、透間を見て、飛出し、一さんに、雲をかすみと逃失たり。己れ何國迄も、追かけて、一討にせんとかけ出しては見たれ共、流石は、親の事なれど、なかなかおひはせぬ。まだ〳〵惡性は、中々、直らぬ、所詮跡はゆづられぬ。養子を貰ひ、跡目相續させるより外はなしと、泪雨のごとくに流して、なきかなしむも道理なり。二親に、苦勞かけるばかりも大罪なり。況や、神勅と僞り、親をたばかる抔は、重々の不屆なり。世に惡性者もあればある者なり。扨て、むすこは、女房のさいそくに念が入り過た故に、妖の皮があらはれて、既にぶつたぎられる所を、あぶなく逃て、大きう世間に、かやうな惡徒者が澤山にあるから少しも油斷すべからず。どうか、よい鹽梅に仕負せたやうにあつたが、あまり女房の事をせいた故に、大てこずりをした。妻のさいそくに念をいれぬと、しれなんだ物を、あまりさいそくに念を入れ過た故に、親に聞付られて既にぶつたぎられる所、なれども、手早く逃た故に、命には別條なし。併ながら、親の方では、大仕合なり。若、是をしらずに、身上を渡しなば、こなみぢんにつかはれてしまうであろうに、惡性者の聲を聞付たばかりに、うそいつはりがあらはれて、親の方では、大仕合となつて、是ぞ正直を守り給ふ神といふべし。世間にかやうな、惡性者多し、親々達、

決して、油断すべからず。中にも、母親抔は、猶々能だまされることあるべし。

## 敎梯抄（二十三回）

新拾遺集神祇

神祇　祝部行氏

神かきに御代をさまれといのるこそ
きみに仕ふるまことなりけれ

同　同

伏見院御製

かみやしる世の爲とてぞ身をおもふ
身のためにして世をば祈らず

新後拾遺集同

後西園寺入道

一すぢに世をながかれといのるかな
たのむみかさの森のしめなは

同　同

百首歌奉りし時神祇　左大臣

たのむかなわがみなもとのいはし水
ながれの末をかみにまかせて

新拾遺集同

貞和百首歌奉りし時　前大納言經顯

ことわりのたかはぬ道をかすがやま
神のこゝろときくもたのもし

新葉集同

題しらず　從二位隆基

おき居つゝ君をいのれぞかみかきに
こゝろ通はぬわかつきもなし

同　同

諏訪の大明神に法樂し侍りし
千首歌の中に　中務卿宗良親王

諏訪のうみやこほりをふみて渡る世も

かみし守らばわやうからめや

續門葉集同　いたはること侍りける比よみて

清瀧の社に奉りける　權少僧都定耀

神よかみたのむこゝろのふかきをぞ

ひとだに人をすくふとぞきく

臨永集同　北野の社にて講すべき歌とて人

のよませけるに神祇　前大納言(實敎卿)

いつはりのなき名わらはす神かきに

ゆきとは花のなとまかふらむ

同　同

題しらず　藤原冬隆朝臣

わひにわひて君につかへむ爲なれば

身をも千とせと又いのらまし

家集　社五首歌の中に　權中納言定家卿

くもりなきみどりの空をあふぎても

きみが八千代を先いのるかな

そふ今もかはらぬ松竹のふして思ひ

おきてぞ祈るきみがよはひを

家集　寄神祝　法印堯孝

守るてふみちにつかへてかみもなは

ひかりたちそふ世をぞ祈らむ

慶賀　十六首

後撰集賀　今上帥のみこときこえし時太政

大臣の家にわたりおはしまして

かへらせ給ふ御おくりものに御

本奉るとて　太政大臣(貞信公)

きみがためいはふこゝろの深ければ

ひしりの御代のあと習へとぞ

御返し

今上御製
をしへおく事たがはずば行く末の
みち遠しともあとはまよはじ
（未完）

# 辨似抄（承前）

赤松景福

そめてし

萬葉十二　紫にそめてし蘰花やかに今日見る人に後こひむかも

古今十七　色なしと人や見るらむ昔より深き心にそめてし物を

此のそめてしのしは過去辭。

古今一　志深くそめてし居りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ



此のそめてしのしは、體辭。前のてしてしの條と參考すべし。

小松

土佐日記　生れしも歸らぬ物を我宿に小松のあるを見るか悲しさ

六帖　子日する野邊の小松のなかりせば千代のためしに何を引まし

新後撰　子日とて今日引きそむる小松原木高きまでを見る由もかな

此等は常の如く、小さき松を云へるなり。

古今十七　梓弓いそへの小松誰世にか萬代かけて種をまきけむ

宇津保　長き夜のふくるも嬉し朝露を落す小松の蔭に涼めば

此等は、たゞ松といふことにて、小は添へていふのみなり。又按ずるに、萬葉十卷に、卷向の

檜原もいまだ雲ゐには小松かられゆ沫雪なかる。（萬葉に小松を子松と書けり）六帖に、こゝにして春日の山をみわたせは小松か枝に霞たなひく、此等も同し。又古歌に、小菅の笠なといへるも同じ。若し實に若く小さき物とせむ、小松の陰に涼む。小松か枝に霞棚引なといふべからじ。又小さき菅は、笠に縫ふべきにあらじ。又猪を、ゐのこ、鹿のかのこ、馬をこまといふ類も、多くは、此の例なり。又、漢籍の語例を按ずるに、獅子といへるも、只獅のことなり。

あけくれ　あけぐれ

六帖　別れても今日より後は玉櫛匣あけくれみべき形見なりけり

此は、あけとくれとの二つにて、朝暮のことなり。

萬葉十　あけくれの朝霧かくり鳴て行く雁は我戀る妹につけこそ

源氏若菜　起て行空もしられぬあけくれに何れの露のかゝる袖なる

此は明方のまだほの闇き程をいふにて、明闇の義なり。右のくれは濟みてよむ。此はぐれと濁りてよむべし。

萬葉十長歌　あけくれはつみの小枝に夕されは小松かられに云々

此は又、右の二つと別にて、夜が明け來れむといふことなり

ながく

萬葉四　こひこひてあへる時だに麗はしき言盡してよながくとおもはゝ

此は、長くとの義にて、長くの下に語意を含めり即ち、長く逢むと思はゝといへるなり。

萬葉四　千鳥鳴佐保の川戸の瀬を廣み打橋渡すながくともへは

此は汝之來との義にて、汝が來と思へば、橋を渡すといふなり。なんぢかといふ言を、ながといへり、古今三に、時鳥なが鳴く里のあまたあれど猶うとまれぬ思ふものからとあるながも同し。

つけ　つき

拾遺　我宿の雪につけては故郷の吉野の山の思ひやらるゝ

新敕撰　秋は只物をこそ思へ露かゝる荻の上吹風につけても

新續古　名のみかる道の芝草生ぬれば繁るにつけて誰かすさめむ

源氏桐壺　蓬生の露わけ入りたまふにつけても耻かしうなむとて、又かゝる仰言につけても云云。

古今集序　侍ふ人々をして、事につけつゝ歌を奉らしめ給ふ。

此は皆つけといへる例なり。

萬代集　水の音のさゆるにつきてうは玉の夜の氷の程を知るかな

こはつきとあり、右つけとつきの活段をいへば、

つかむ　つき　つく　つけ
加行四段　自動

つけ　つけ　つく　つくる　つくれ
加行下二段　他動

右の如く、兩樣に活くうち、通俗書類などには、何々に付きといふやうに、多く自動詞にいへり。さやうの所を、歌文には、いづれもつけと他動詞に云へるが多くて、即ち、前の例の如し。但し、水の音のさゆるにつきての歌の如

く、自動詞にいへる例は多からず。(萬代集にも、他の歌はつけてとあるやうなり。)又、古今集序に、今の世の中色につき人の心花になりにけるより」とある。此のつきは、就從ふのつきなり。こは固より自動詞の方にて、こゝにいへるものとは異なれば、混ふべからず。

おきべ　おきへ

萬葉七　磯にたちおきべを見れば藻苅舟あま漕出らし鴨かける見ゆ

此は沖の方なり。へは濁りてよむ。次のは清みてよむ。

古今十一　おきへにもよらぬ玉藻の波の上に亂てのみや戀渡りなむ

此は沖とへとの二つにて、へとははたを云ふ。六帖に、住吉の岸に家もが沖にへによする白波見つゝ忍のはむ。とある三の句と同意也。(未完)

---

# 廿二番歌合（完）

諏訪 忠元 寄贈

小杉榲邨先生判

河邊の鳥

十九番

左 持　荒山德隣

ゆふくれのあはれをこゝにとゞめけり
關屋のさとのしきの羽がき

右　飯田稻子

大井川あさせの波にすむをしの
あそぶすがたぞおもしろげなる

このつかひ、猶申旨侍る持とす。

判詞に

左の方、鴫をよみ給ふ。これも、秋の景物として、別に立たり。さるを心なく、こゝによみ入給ふは、不覺なる事、前に論ずるが如し。

右の方、をしといふものは、鴨鳧の類に異りて里ちかき河水などに、すむべきものにあらずなむ。況んや、大ゐ川の實况、判者よくしれど、この鳥すむべくもあらじ、いとかたぶかるゝなり。

左右かゝる論あるを以て。

二十番

左　安東菊子

山川の峯のまさごにおりたちて
　友よぶかりのこゑきこゆなり

右　勝　北郷久政

芦の花風にみだるゝ河つらに
　あさる小鳥のこゑのさむけさ

此のつがひ、右勝り侍り。

判詞に

左方、雁もまた景物獨立したる事、前々に論ずるがごとし。

右方、あるべきさまの御口つきなりとす。

すべて、雑題には、四季にわたりて、獨立したるものは、さくべきがつねのならひなり。こは、今さらに判者が辨ずるまでもなく心得給ふべきものならむとおもう給へらるゝを。

廿一番

左　勝　清水菊子

紅葉ぞのなかれてはゆき谷川の
　いはまに鴨のこゑそきこゆる

右　富貴子

暮ちかく墨田河原をこえくれは
　つまやこふらん鵆の鳴なり

此の番ひ、左を勝とす。

判詞に

この左、めづらしげあるにあらねど、さりとて

難は侍らずなむ。
右の墨田川原、こゝにてはゆるさるべきなれど、四句をつゝけむには、にほとりのなく、とあるべくおぼゆる所なり。もとのまゝにては、口つゝなるこゝちす。されば左にはおとれりや。

二十二番

左　勝　　　　牛山晴皦

雨はれし墨田河原の蘆のまに
　　みのけをほして立るしら鷺

右　　　　後藤兼子

川のべにさらせるぬのと見えつるは
　　むれゐる鷺のみのけなりけり

此のつかひ左の方、又、勝をしむ。
判詞にいへらく
左の方、こゝの墨田川は、つゝけからにてゆるさるべし。みの毛もなほ、ふさはしきこゝちす。さのみくるしまれ賜へる、御口氣とはうけ玉はらざれども、難は侍らずなむ。
右の方、さらせる布と見るばかりのみの毛とはいとおびたゝしきこゝちせらるゝ。こはたゞ多くむれ居る鷺のすがたといふかた、公平にして、みのけとはことわり過たらむが如し。
されば、すぐれたる御つゞけにはあらねど、右に此の難を見出るが故に。

秀逸

甲　　　　前田利聲

あしたづの立る川邊によりくるも
　　同しいろなる白波にして

乙　　　　諏訪忠元

君かよのみやことなりて墨田川
　　うかふかもめのわれはかほなる

# 家兄遺文（十）

白松園主人

○鶯所の月（承前）

器械體操は、膽力ありて剛氣なるものか、又は身體の輕捷なるものにあらざれど、最く困難を覺ゆる業なり。然れども、初歩は、体の輕捷よりも、寧ろ膽力の方多きに居るならん。膽力備はれど、少々の輕重には關はらず、容易に上達する事を得べし。膽力乏しくて、優柔に近き者は、背つていづれのわざも出來得る事なし。諸科孰れはあれども、殊に器械體操の拙なきより、困るしきはなきなり。懦弱めきたる者と見る時は、教官彌注目して、わざと危險を覺ゆるわざをのみ、責めつくれば、彌よ器械體操が忌まはしくなりきて、器械體操としいへも、泣くなり。之に引きかへ、剛氣にして輕捷なる者は、器械體操としいへば、何より面白く、暇だにあれば、器械場にのみゆきて、鐵棒にひたさがりにさがり居るなれば、彌上達して、彌面白し。世は何事にまれ、すべて、此の理なれ共、器械體操の如きわざは、殊にそのけぢめいちじるし。拙劣の者は、課定時間だに忌まはしきを。況んや間稽古なんど、夢にもせし事なく、器械場を視る事、さながら獄の如し。されば彌忌みて、彌拙くなりまさるなり。毎週、日課改まりて、日曜には新日課出づ。外出して歸り見れば、友人らが來週の課業を語り居るに、先づ胸とゞろきつゝ、服も脱ぎあへず、課表を見にゆくにも、器械體操が幾何あるかを、先づ數へ見るなり。器械體操のみは、其の優劣によりて、範を分てり。丁範なんどに居るもの共は、棚の尻上りが出來ぬ者のみなり。棚に取下がりて、臀を上ぐる

に、第一擧動は活潑に出來たるが、第二擧動になり、其の重き事巨鐘の如く、耳目口鼻一所によせて、一生の力を振りしぼれども、兩足が僅かに、棚の縁にとゞくのみにて、臀部は、遙か下樣にあるあり。古生徒が語りけらく、予もまた始めの程は、一つだにきづなくて出來得るわざなく、久しく戌範といふに滑り居て、尻上りの出來ざる組なりしが、器械體操といへば、其の前日より苦にやみて、唯何事も思はず、明日の器械は、如何にすべきかと、それのみに心を惱まし、憂に沈む事いつも〳〵定まりなりしが、これにては到底果づる事なし。人も爲るわざを、己なりとて、爲しえぬ事はあらじ。必竟勉强の足らざるならん。間稽古にも、度々行き見んと、午後練兵濟みの後、器械場にゆきて見れば、他に自習に來たる者、ほはなるが、此等はいづれも、鐵棒の反動上がり、

棚の中ぬけ、木馬の閑脚、一節飛びなど、高尙の術のみを、見事に愉快に爲し居るに、心忽ち沮まれて、衆人、皆、此の如きに、我一人如何にして、愚かなる、尻上りなど、爲し居らるべき。やみなん〳〵と、地に唾して立歸りし事もありしが、課定の日再び來て、又々苦しめらるゝがいとつらさに、今は夜中人の見ざるひまに、行き見んと、夜の自習時間の果つるを待ちて、密かに器械場に馳せ行きて、棚にさがり見れど、尙ほ重き事もとにかはりし事なし。兩腕の絶ゆるやうなるを忍びたへて、凡そ十たび許り、やめては下り、やめては下がりする程に、遂に兩腕しびれて、動かずなりぬ。今は、これ迄なりと、打止めて歸りぬ。かくて、消燈喇叭鳴りて、寢臺に就きても、又いかにせむ爲しえらるべき。とせば宜からん。かくせむと。種々に思をこらして、夢現に夜を明かす

こと多かり。人は、皆寢臺に就きぬる間が、我身なりとて、寢ぬることを、唯一つの樂みとして、横だはるや否や。前後もしらず甘いする中に、予は夜の間だに辛苦の暇なく、今こそ、我身なれと、思ひしこと片時もなかりき。これは、是れ何の爲ぞ。器械体操の出來ざるばかりなり。かくては、如何になるべきか。卒業も覺束なしなど思へば、心膽こゝに腐るが如し。さる程に、ある日又、例の器械体操にて、今日は鐵棒の尻上りなりしが、如何にしたるか、ふと、臀部輕やかに上がりて、難なく出來たり。教官をはじめ、衆人皆、こは〳〵と驚きぬ。此の時の予の嬉しさは、いかばかりなりけん。たとへんに者なく、氣も心も空天に上りて、覺えず莞爾と打笑みぬ。教官はさる者、さてこそ出來たれ。出來ぬといふ事はある事なし。汝は思ふに、自習にきたるならん。見ずとも知れたり。こをはずみに、忘れぬまに、今一度爲し見よといふ。即ち手に唾して再び上らんとするに、此度は絕えて出來ず。一旦出來ぬるものが、今少し少しといへども、如何にも上られず、腕しびれて、終におちにき。朽惜しきなんど、いふばかりなけれど、すべなくて、列に入りぬ。かへりても、我ながら訝かしくて、一旦出來ぬるものを、いかで〳〵、今一度とりかへさでやはと、午後自習に行きぬ。先づ何をおきて、鐵棒にとりつきぬれば、難なく上られたり。さてこそとて、つゞけざまに三四度出來たり。愉快なる事限りなきやうになりぬ。今は忌み避けし器械體操も、早く、其の日の來ん事を、願ふ心とはなりぬ。日比は我番にあたりて、もじ〳〵として、進まぬがちに出でけるが、今は、我番くるやおそしと、進み出でぬ。戊範は、直ちに丁範に上り、丁範丙範打ち超えて、程なく

乙範に上りて、あつぱれなる者と、なりすましぬ。

（完）

## 亡き友につきて

葛の屋主人

おのれ、一日、ある友がりゆきたるに、をりふし、そが妹なる人の、購讀せる女鑑ありけれど、何心なく、取上げて、見もて行きけるに、白松園主人の寄せられたる、家兄遺草といふがありけり。白松園といふ名の何とやらん耳なれたる心地しければ、さてはとれもひて、讀み下すまに〳〵、思ひきや、かの家兄としもいへるは、おのがまたなき友たりし新井健之助君にてありつらんとは。その筆つきは、よく、その心をあやどりいで、君を見る心地して、轉だ、今昔の感に堪へがたくなん。かれ、こゝに思ひ立ち、本紙の余白を借りて、君につきておぼえしとの、一ッ二ッをおぼろげながら書きつゝげんとす。これ、一ッには、なき友に手向くる、おのが微意にて、また、一ッには、この遺草を讀みたまはん人々のたよりとなるともありなんかとて。

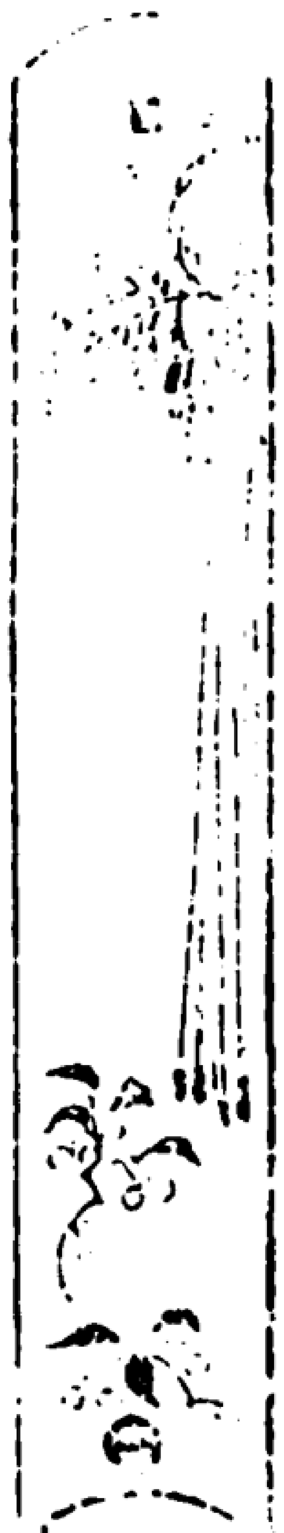
君が父君としもいへるは、漢學に至り深く、また國學をも究めたまひし人にて、夙く鄉里の小郡といへる處に陳閑社といへる塾を設け、數多の書生を集めて、教授せられけるが、君も、また、父君に從ひて、其の業を手傳ひけり。折ふし、おのれは小學校に勤め居りし事とて、晝の間は、暇なかりしかば、夜々、此の塾に至りて、その教を受けたりき。これおのれが君を知るの始にして、交るまゝに、情いよゝ厚くなりて、後には、日曜日毎に、君と、この塾に相會し、共に遊びたりき。し

かゝるに、世の變遷に連れて、漢學を學ぶもの、日に少くなり、生徒も他へ轉學し、或は止めて、その鄕里にかへりなどして、今は塾の費用をだに支へがたくなりしかば、君の父君も塾を閉ぢて、山口なる師範學校の敎師となりたまひき。さて君は山口黑城私塾の中に設けられたる体操傳習所に入り、六ヶ月余の後出で、鄕里の小學校に奉職せしが、また、止めて敎導團に入り、卒業の後姫路分營に勤めけり。折ふし父君失せたまひつれど、勤めの身のいかんともしがたけれど、故き弟子ども打よりて、いともねもごろに葬りをなし、目ざましき石塔をも建てまつりける。かくて、君も勤めを終へて國にかへり、山口の黑城私塾の舍監となり、母君への省養怠りなかりき。その時、たのれもまた山口に遊學し居たりしかど、朝夕共に行きかひて、いよいよしたしくまじらひしが、かゝるを一歳あまりにもなりぬらんとおもふころ、ある日、おのが宿を訪ひて、われ年ごろ國學に志すといへども、書物に乏しくして、その道を得がたし。しかるに長門國住吉神社には、古書を數多藏めあるよしかたりて、その地の小學校に世話せんといふ人あり。母の許を遠ざかることは不孝なるに似たれど、これも志を遂げて、さき〳〵、厚く報いむためなれば、現今の職を止めて、やがて、行かんとおもふはいかにとかたれり。おのれこの親しき友に別れん事かなしく心苦しけれど、その志を遂げん道に立たんといへど、また身にかへてうれしかりければ、そはいとよきことなり。とく〳〵といひてすゝめたりしが、間もなく、君は彼の地にいたりて、砂子といへる小學校に敎の鞭を揮りぬ。住吉の神主にねがひて、その藏書を借り暇のまに〳〵、讀めりなど言ひやりたりき。

かくて、おのれも師範學校に入りて、四とせの後業を終へて、豊浦の小學校に奉職するとはなりぬ。かれおもへらく、あはれ豊浦としもいへば、君の在る所とは半里ばかりのへだゝりなれど、またもろともに行きかひてたのしくかたらはんと、勇みて郷里にかへれば、君もまたかへり來りておのが家を音つれたり。いぶかしみて、何事の起りたるにか、折ならぬ此の頃しも歸り來れるはととへば、さればこそ、おのれすでに住吉神社の藏書を見つくしつれば、これよりは上京して、なほ、この道のおくがを究めんとおもふ。かれこたび暇を乞ひ得て歸りつるなりけり。學びの志にはげまされつゝも、なほ君と共に語らん日の、いかなればかくは短かゝるらんと、なげかるゝよといひて、打しほたれければ、聞くごとに胸せまりて、おぼえず暗涙をこぼしけり。さればいましばしの別れに打興ぜんとて、その後二三日がほど、互みに、訪ひつ訪はれつして、心地よげに語らひ、さてこそ、西と東とに別れたりしが、圖らざりき、これぞ永遠の別れとなりにけんとは。

君が東京に上りつる後は、互みに文もて安否をつぐること二三度もありつるが、君も學びの業しげかりけむ。おのれもまた公の務の忙はしきにまぎれて、何時しか雁の音づれも絶えたりしが、一とせの夏、砂子學校の教師にあひ、君のはかなくなりしことを傳へ聞きて、われにもあらで打なげきたりき。たゞ互の契淺くて、談笑の日少なかりしことを、今に及びて、かへすがへすもかなしくおもふになむ。

（つゞく）



# 雪は殿様

新井無二郎

おのれ、ことしは珍らかにも、故郷にありて、年を迎へぬ。夜ひと夜、ふりつもりし雪に、背戸なる篁もたわゝになりて、たてし門松も斜めに傾きぬ。元日のあさ、雪のふりつもれるは、ひとしは心地よく、げに年も改まりぬるよと覺ゑて、いと〳〵なつかし。玉階瓊殿一夜のうちに作り磨かれて、二すぢ三すぢ、たちのぼれる煙も、いぶせからず。鳴鞭雙々として、玉珂遙に響く五陵の貴公子はあらで、鶴氅を被て立ちて徘徊する里の翁、雪を蹴たてゝまろびあひたる犬の子、竹馬にのりながら、雪は欄杆を擁してと、歌ひたるをの童など、なか〳〵にをかし。

晴れたる空の、俄にけしきだみて、大きやかなる雪の、ほと〳〵とふり出できぬれば、四つ五つばかりなる女のわらは等、軒下につどひ來て、聲をかしげに歌ふを聞けば、

　雪ハ殿サマ　霰ハ御處士
　雨ハ草履モチ　跣足デ走ケル

げに雪は、殿樣然たるぞかし。その落つるさまの音もせで、長閑やかにおちつれたる、霰のばら〳〵とおとして、いさましげなるは、お處士ともいふべからんか。雨の惡さげに降りきて、ふりつもれる雪をぞ消すなる。草履もちと嘲けりたる、はたをかし。東京などに、

　雪ハチラ〳〵　小池小河ニ氷ガハッテ
　　サゾヤメダカガ　ウルサカロ

と歌へるに比して、村謠のおもしろさを見るべし。かくて、ひねもす訪ひくる友もなく、終に夜に入りぬれど、寒燈を剪りて、萬卷を書せんとするに

さばかりの勇氣、全く挫けて、兀坐悄然として、ものとはなしに耳を傾ぶくれど、四隣寂寞として、山寺半夜の鐘も聞えず、潺々たる谷の水音のみ心耳を澄すをりしも、忽然柴門をおしわくるおとして、大聲「雪はトノサマ霰はお處士」とうたひつつ入りくる者あり、驚きて窓をひらけど、ことし八つになれる甥の、雪をふみて來れるにぞありける。

## 禽獸の言行

大隱

髭のみは、立派に見ゆれど、鯰の如きぬらくらにて、捕へどころもなきものあり。一皮はぎてやらまほしき皮剝魚の如きものあり、鮃の如く、上のみをながめたがるのあり。鰧の如く、形も、甚だ醜く、あまつさへ、はりをさへもつあり。藻伏魚の如く、容も醜く、味も佳なら、とりどころなきものあり。尺とり虫の如く、人の尺をのみとりありくものあり。がうなと云ふむしは、蟹の如き虫にて、己れはからもなく、何もなきはだかなるを、他虫のかひがらの間に住みをりて、其の虫、口をひらくをまちて、已も餌食し、口を閉づればまた、其の間にかへる。之を寄居虫と云ふ。人の中の食客にや。目張魚の如く、目をはつて見るあり。八目うなぎの如く、人を見るめを數多にもつあり、さやうの目、ちと雀目の者どもにゆづりては如何に。






# はゝその露

はゝそば

備前の國岡山のかたほとりの新田に、おきた明神とて、其のほとりの産土神として、參詣の人の絶えぬ中にも、收獲の頃はことににぎはしく、人々爭ひて、とれたる新米を、供物にして供するあれど、團子にしてすゝむるあり、萩の餅となして供ふるもあり。殊に祭り日には神樂を供し、花車を出していたくにぎはふとかや。さてもこの神は、あら人神にて、むかしは、おきたと云ふ女なりしを、此の岡山に津田某といへる



經濟に長じたる士ありけるが、此の地、かた〳〵は山にそひ、かた〳〵は海に沿ふ地なれば、その

海の方に石を畳みて界とし、新田をつくらば、十萬石の米を得べけれ、されど、そのはじめに人柱とて、男にても、女にても、一人を龍宮に貢せざれば、成就せずとか。されど、罪科を犯せしものはけがらはしとて用ゐず、あやまりて落ちたるものは又用にわたらず。さればとてたゞ〳〵生れてし人の玉の緒、誰れも絶つはをしくすゝむる事も又ならず、せん方なくそのまゝやみなんとせしに、かのきたと云へるやもめなるが、此の事を聞き及び、もし、己れが命にてもくるしからずば、奉らんと云ふに、即ち、その女を召して、何故にさは思ひ立ちしぞとといひ玉ふに、さして何をうしと思ふにも侍らねど、生きて益なき命なれば、死して世のためにならんと思ひ侍るなりとて、偏に思ひ入りたる趣なりければ、志誠に神妙なり。死せむ土産神に仰がんと仰せありければ、をきたは、即ちつめをきり、髪をたち、齋戒沐浴していさぎよく海にとび入りぬ。龍宮も、その志をあはれみてにや、やがて新田をつくりけるに、事なりて、十萬の米を得るに至れりとぞ。よりて、その地の地主神にまつり、おきた明神と稱せりとか。國のため人のためには、命をさへをしまぬもののもあるものを。玉の緒に堪ふるばかりの公益は誰もあらまほしきものにこそ。

## まにまぐさ

まに生

若狹國小濱に湯野生峠といふあり。六郎左衛門といふもの、其處に茶屋をしつらひ、旅人を宿し憩はせけり。雨のいたく降りし夜、あやしげなる老翁、一宿をもとめたりしに、主人、いと懇にもてなし、いたはりしかど、其の翁、歸るさに、我

は疱瘡の神なり。昨夜の情に報いむため、是よりこの家に、疱瘡病ましめじといひて、立ち去れりまことや、六郎左衛門の家には、今に至りて、疱瘡を煩ふことなしと言ひ傳へたり。其の近き邊にて、何某とて、生利口なる男住ひき。この男、謠といふものを習ひ覺えたりしが、一日三井寺の謠にて『蓬窓雨滴りて、馴れし潮路の梶枕』とあるところを謠ひければ、近隣の老婆來合せて、何の謠ぞと尋ねし故、この男、例の心に田舍婆の何なれぞとや思ひ下しけむ。蓬窓雨滴りてといへば、是は即ち疱瘡の謠なりと戯れ答へき。老婆重ねて、さても、雨滴りてとはと問ひければ、男、更に眞しげなる面色して、然ればなり。昔、湯野生峠の茶店にて、瘡疱の神、雨をいとひて宿りしことありしより、雨滴りとは謠ふなりと答へければ、老婆いと嬉しがりて、家にかへり、日々孫子をして右の文句を一遍づゝ唱へしめけり。是より、其の家も、亦、疱瘡を病まずなりしといふこと、何時しか、世に聞えわたりければ、我も、我もと、其の句を唱ふる者多くなりぬ。寺小屋の先生この事を聞きて、其の謠は疱瘡の謠曲といふにはあらず。三井寺の謠なるをと嘲み言ひけるを、何者か、耳敏にまた、聞きつけて、三井寺こそ疱瘡の神の本家なりしかと言ひ散しければ、何事ぞ。遙々の途を、老も弱も、三井寺に參詣するもの多かりきといふ。世の流行神といふ者は、大方、斯る由緒のあれぞなりけり。また、もの知らぬ人々の神佛信心は總べて、斯る由緒より、求め得る類のみ多かりけり。あはれむべきかな。



# 草むら（夏）

白魚女史

梅林塾と云へど、もとは都に名高かく、校主、梅林芳雄と云へば、隨分音に聞えたる博學の大人なりけるが、一年、腦をわづらひてより、醫師もすすめ、自からも思ひ入りたる深草の里、しからば、我も共に行き、草をもかり、田をも作らんと云ふ弟子も多かりしを、田をかへすは末だ汝等には敎へられじ。我老農となりたる後に、尋ねこよかし。しかるまでは、世をうづらの床、とふべからずとて、たゞ妻子と、他人の娘三人、一人はふらちせし妻の子、すてんと云ふ友の娘、つる子と云ふと。潔白をよろこびて、日來二つなくむつみたる某の、妻と、娘とを殘して、にはかにみまかりし、其の娘の淸子と云ふと、之も同じく、友の娘なるが、我子ぞとは、親にも妻にも深くかくす所、昨日生みの母もみまかりたり。たゞたのむ、君とておき去りし松代と云ふとの三人の娘をつれての草の庵住み、之れ等娘供も、鎌もてともに草刈る時あり。

先生は、快濶に、公平に、おもしろき人なるを。妻は少しくかたましく、折りにふれて、三人の娘たちをも云々する事あるを。けしからぬ、我は、我が力もて、我が欲する所をなすなり。之ばかりの義を、とかく云はんには、汝をも思ある人のすゝめにはだされて、强ひて入れし後妻、まづ其の義より捨てん、鈴代は、女なれど、おきゆくもよし、とく出で去れとて、二日も三日もおやまちをわぶるまでは他處に見るものから、妻も是非なく、又云はずなりにたり。

流石に、小學の事、中學の事は家にも敎るれど、人の中に交へざれど、智能は發達せざるべしと



て、元雄今年十六歳、秋の定期試業をまちて、都に上ぼさんとしぬ。先生は磊落、小事に心をおかぬ君なるが、子を思ふ情は、又かはりたるもの、如何に深草の地なればとて、干魚ばかりの祝ひはとて、自から遠く魚屋に走り、鯛、かながしらの如き魚あまたをさげ來りて、自からつくり、酒屋へも、人を走らして、さて、祝の膳ならべさするもあはれなり。

自から一杯をのみほして、盃を元雄にさし、汝、必ず學をみがき、能を發達せしめて、ゆめ、あだし道にふみ入るな。家をも名をも起して、國家につくす道を忘るなと、まづおごそかに誡むれば、元雄もかしこみきゝて、父君の御誡め、必ずまもり申すべしとて、盃をかへしぬ。其の夜はふくるまで人々祝ひことぶきぬ。

かなしからぬ道の別れも、別れとなれば、かなしまるゝ人の情、中にも、松代は、よべ祝の席に列りながらも、ほろ〳〵とえ堪へぬ涙をこぼせしが、其の夜はねぶれず泣きあかしぬ。あしたの門出早う、師につれられて、草深き野を送り行けば、大伯皇女が、大津の皇子を送り給ひて、あかつき露にぬれ給ひしむかしもくまれて、そゞろに露けし。元雄は何と見けん。都に至りし後、父の許へおこす手紙のしば〳〵毎に、松代にのみは、必ず便り聞えたり。

その心のやさしさにもよらんが、如何なる故か、師は、尤も松代をめで給ひぬ。我が子の鈴代にもまさりて。

つまらぬ、人の子ぞ。吾が背は、ほんにわかぬ人よと、妻は、折り〳〵かげ言をする事もあれど、賤子を見る如くにはいとはれざりけり。何故か、妻は、賤子をいとふ事いみじく、よれぞ罵りたく、さ

はれむにらめたく、よき事をされても腹立しく、なづかしくされてもいとはれ、かしこまられてもにくさわりなし。さりとて、賤子、心のまがりたるにもなく、顔つきのにくきにもあらず。妻女をいとふにもあらぬを。師は、是等のふるまひ見て、他の子に云々するときの如く、つようはえも云はず。たゞ〳〵人知れぬ涙をうかぶるは、そも何故にや。

（つゞく）

## 愚癡の婆

笑止

己と云ひて、己と惜しむ、をかしきはなしもあればあるものかな。むかしある家に老婆ありけるが、其の婆のあしきにや、嫁のあしきにや。よく爭ふと見えて、其の老婆、日毎に閻魔明王の前に至り、文錢を投じて祈りけるやう、我が宿の嫁は、いたく心じやけんにて、我を憎み、むごうする事限りなし。なまじひに老の身のながらへばこそ、かやうにむごきめには遇はさるゝよ。願くば、早く我が命を引きとり給へと、大言あげて、いつも〳〵ぬかづきをるに、その寺の和尚、之をきゝ、憎しと思ひ、或日例の如くぬかづきねんずる閻魔のうしろにかくれをりて、老婆が願の終るをまち、よし、よし、願の趣き明日にも叶へ得させんと云ひしに、老婆はおどろき、かやうに靈ある明王とは思はず、日々祈念をこらしゐひけるよ。願くぞ、今の願事は水にながし給ひて、今少しの壽命をかし給ひてよ。南無明王と、わなゝき〳〵念じけるが、其の後は、また來らざりしとなり。





# 文林

氷　東久世通禧

夜嵐のはげしかりつるあとみえて
けさはかけひの水のこほれる

山影寫水　前田利嗣

さかさまに本立は見えてつき山の
影おもしろきにはのいけみづ

窓前梅　松浦詮

わたゝけき南のまどにふみよめば
梅のはなさへかをりきにけり

海眺望　風早公紀

いつこまで汐はひきけん沖の石も
浪よりいでゝたかく見えけり

新年松　宮地嚴夫

朝日かげさすや高ねのひとつまつ
また霞まねとのどけかりけり

和布刈神事　阪正臣

浪の音しばしとたえてまつの火の
かげぞほのめくめ刈すらしも

山家梅　小出粲

松やまの奥にひとむらさき匂ふ
うめのはやしは誰家なるらん

溪梅　植松有經

谷のとにふかくこもれる梅が香は
あらしもよそに誘はざりけり

雪後曉月　荻原嚴雄

いつの間に雪ははれけん立出で
さやけき月のかげをふまゝし

道臣命　遠山英一

皇軍もすゝみかねたるやまみちを
　こえしいさ立の高くもあるかな

石川丈山　鍋島榮子

行水のきよきこゝろぞ知られける
　せみの小川のあとをみるにも

社頭杉　前田朗子

神さびてみえわたる哉みやしろの
　わたり小くらくしける杉むら

夜聞水聲　松平健子

早せがはながるゝ音をきくよひは
　思ふこゝろもよどまざりけり

望遠帆　保科節子

見るまゝに沖の浪まにあらはれて
　かへる白帆のかずもそひけり

大原女　南鄕柳子

處女らかおもきつま木を輕げにも
　いたゞきてゆく大はらのさと

藤原藤房卿　小池道子

まことのみ世には殘して雲みつの
　行くへしられずなりし君かな

國旗　常磐井文子

日の御旗のきにかゝげて君が代を
　しつかわらやも祝ふけふかな

孟母　服部磯子

はた糸の千すちをたちて一すちに
　子をいさめたるこゝろ高しも

烟草　中島歌子

月花のいろもひかりもまきこめて
　のむたばここそ樂しかりけれ

夜話　河村直子

かまの湯のにえ音すみて更るよに

昔かたりのおもしろきかな

## 昨年今年

遠山英一

舊臘やまひにかゝり相州葉山に轉地せしをり鏡にむかひて

あし引のやまひわるみもしは風に
　ふかれて黒くなりにけるかな

歳暮に

おは方はやみてくらせることしたに
　くるゝはをしとおもひけるかな

歳旦に

あやうしとおもひたるしもなからへて
　むかふる年そうれしかりける

## 偶感

岡部讓

八隅しゝ、吾天皇の、神隨、たかしりいます、秋津洲、大和の國は、天照す、日の本つ國、細矛、千足の國、くにといふ、國の眞秀國、もろ〳〵の、國の祖國、うちやまの、國といひつゝ、天壤の、むだ無窮に、さかえ來し、君が御國ぞ。國といふ、國は多きを、たま〳〵に、人と生れて、この國に、あり經る人よ、國の爲、つくさであらめや。君の爲、つとめであらめや。安らけく、治まる世には、八意の、智識を開き、手力の、膂力を盡し、精妙はしき、事を考へ、偉大なる、業をも興せ。かりこもの、亂れし時は、山行かぞ、草生す屍、海行かぞ、水漬屍と、往昔に、たてし言たて、身に負ひて、身もたなしらず、霰なす、矢彈をしのぎ、氷なす、刄をかし、潔き、大和男兒と、古ゆ、さやけく負ひし、丈夫の、名をしくたすな。かくてこそ、日の本つ國、細矛、千足の國、くにといふ、國の眞秀國、諸の、國の祖國、浦安の、國とい

ひつゝ、天壌の、共とこしへに、さかえ來し、國の御民の、かひはありけれ。

## せまき宿　　鹽非ふく子

せまき住家のいとをかしきや。垣の内なる花は、あまりに近きものから、梢は、屋根の上にそびえて、家の内には匂はず、中々にとなりの梅の初花めでたく、朝の戸にうつりて雪ともかをれど、夕べの枕に通ひて月ともかゞやき、我が宿の春風は空にのみふきて、隣りの梅が香、あやしきばかり袖にとまりぬ。をかしさやと軒端に笑へば、

我が宿の梢は如何にしらま弖
春をとなりの梅が香にしる

と歌ふ聲す。さては、彼方にも同じきにやと、いよ／＼は、笑まる。之は、互みによきを送り、よきを見る、いみじうよろしき事なれど、人の心のせまきはよ。己のみいみじく見えて、人のよきは中々にかくるゝものぞ。自警せよとの宿がらにや。

## 房州日記　第四回　　柴田しづえ子

かくて、車は、まづ加知山までとて、道をば、其方にとりて行く。こゝは、上總と房州との境なり名高き鋸山も、ゆくて近く聳えたり。そも、此の山は、花岡石の産地にして、鋸もてきりたちたる如し。これぞ、此の山の、名を得たるゆゑなるべき。殊におどろくべきは、此のあたりの村は、すべて、此の石もて、たゝみたる家の、多くさまことなることとなり。住む人は、農か、鑛夫か、はた漁夫か、都會にて、かかる石もて、たゝみたるは、上流社會の家なるべきになど、おもひめぐらさる。山麓に、こゝかしこと、多くの花岡石を、切り出して、はこびまろがす、礦夫どもの有様、い

とあはれなるに、まして、此の石を、車にのせて運搬するものの中には、赤兒を負へる婦人もあり。かの臺灣の、婦人のさまなど、思ひ合せらる。おのれらの車は、めぐりめぐりて、山の中腹にかゝりぬ。こゝよりは、一輛の車に、三人の車夫を、要するなり。トンネルの數多ければ、出でゝはまた入り、入りては、また出づ。穴の中、石もておほへるさま、いとものすごし。落ちかゝらむとしてなほ落ざるものあり。或は穴の半ば、くぼみたる所など、筆にはつくしがたし。危險なる通路を、辛くして、海岸に出でぬ。こゝも猶山のふもとにて、右は斷崖に、うちよする浪さかまき、左は山屹立して、ものすごし。一たび足を失せば、いかならまし。岩より岩にかけ渡したる、土橋の上まで、汐みちて、浪たちこえたる處に至れば、車をうかしつゝ、ひき入るゝなど、その道の容易ならぬに、照る日影やくが如く、あつきに、今は、腰いたくつかれはてつ。

白浪の岩にくだくる時にこそ
　色なき花はさき匂ひけれ

など車の上にて　うめきつゝ、加知山の里につきぬ。時に午後五時ばかりなり。車の上に、安らふおのれらさへ、つかれたるに、まして車夫の、いかばかりならむ。世のたつきには、いはばいへ、いとあはれに、おぼえたれど、おのれらは、こゝに旅宿もとめんといふに、車夫はいま少し行き給へ。こよひ九時には、必らず北條の里に、つくべしとすゝめたり。されど賃錢に賞金を加へて、車は、こゝよりかへしやり、旅宿につきぬ。入湯して後夕飯をたうぶるとき、陪膳する亭主に、此の里は鰯もて、名を得たるにや。いかで漁夫どもの、車にのせ、籠にもりて、もてありくはといへど、主

人、答へてさなり、此の近邊は、おもに小魚の、漁のみ多きに、ことに、此の二三日は、鰯の漁多し。そは、よべより、房州沖にて、鯨をとらへたりこよひ、此の里にも、もち來て、鯨肉の市をも、たつるならむといふに、いまはた、かの八村のにぎはふべき、ためし思ひやられたり。すゞしき夕ぐれの風は、旅宿の室にかよひて、皆人心地よければ、ともにともに、岸邊にいでゝ、そゞろあるきす。海の上は、きのふにかはりて、浪靜なり。手にとるばかりなる浮島は、夕日のかげを、なゝめにうけて、半ばはてりかゞやけり。此のあたり、よする浪の、けしきおもしろし。かくて日も、はのくらくなるまゝに、おのれまづ、たちかへらむとするに、ほどちかき町に、きゝしには、たがはで、鯨肉の市たち、あまたの漁夫ども、集まりて、おどろおどろしう、さわぎす。中にもおもだちた

る、漁夫の何おもひけむ、あはただしう、彼の鯨肉二斤ばかり、竿のさきにかけて、此めせよとよびつゝ、おのれらにまゐらせんといふ。うたておぼえて、にげかへり、亭主にとへば、そはよきえものなり。漁夫どもは、おのれらの譽を、あげむとて、君達に、さゝげ參らせむとするなり。うけとりて、鹽につけおき給はゞ、御歸京の折の、よき土産ならむにといひき。浪靜かなるまゝに、明朝はとく汽船にて、此の里を、出立せんといへば母もよろこび給ひて、おのれまづ用意す。十八夜の月、さやかにてりて、ねふらむも、をしければ、ふたゝび北の窓を、ひらかせ見るに、あなおそろし。はるか鋸山のかなたには、ひらめくいなづまの、光りすさまじくも、黑雲のひまより見ゆ。皆人東京わたり、夕立してあらんといふ。夏の夜のみじかくて、とかくするほど、東の空はのばのと

うちしらみたれば、人々をよびおこしつ。時に午前四時なり。顔あらひ、口すゝぎなどするに、滊船は入港の滊笛を、報じぬ。朝飯の用意、とゝのはねど、そのまゝ、皆をいざなひて、波止塲まで、いそぎゆきぬ、端舟は、おのれらを、まちしがごとく、いそぎ、うちのるまゝに、沖の方さして、こぎ出でぬ。岸には宿の亭主、いとねむごろに、別を送りて、手をわぐるさまも、ほのうちきりたる、朝たのけはひに、おぼろに見やられければ、こゝにも答へぬ。やがて舟は、沖にまちつる滊船の、そばちかく、こぎよせたるに、皆うちのりたり。こたびもまた、甲板に昇りぬ。海の上靜かにて、朝風いとすゞし、船は進みに進みて、終に阿彌陀崎につきぬ。巖の松の、千代の緑は、色深き水にうつり、木のもとに、浪の打よするさま畫にかきてましとぞ、おはゆるや。

## 雜報



●御救恤　去し卅二年十二月二十四日、東京府伊豆國神津島火災のため、罹災者困難の趣、憫然に思召され　天皇　皇后兩陛下より御救恤として金五百圓を下賜せさせたまへり。

●英照皇太后御式年祭　去にし十一日は、英照皇太后三年御式年祭にわたりしかど、宮中にて、御親祭あらせらるゝ筈なりしが、御都合により　天皇陛下の御代拜は、岩倉掌典に、皇后陛下の御代拜を藪權掌侍に、東宮殿下の御代拜を高辻侍從長に仰せ付られたり。即ち、同日午前九時御殿の粧飾を奉仕し、式部官若床の上開扉（此

間奏樂）神饌御幣物を供へ（奏樂）祝詞ありたる後、各御代拜、御玉串を捧げ、次に親王、王、各大臣、顧問官、親任官、勅任官總代、公爵、勳一等、侯爵總代、各祗候總代等の禮拜あり、同十一時御幣物、並に神饌を撤し、閉扉の上、御式を終らせられたり。また、同日午前九時より、京都東北陵にても、三年御式年祭を行はせられ、天皇陛下御代拜は、九條掌典、皇后陛下の御代拜は、滋井舊女官、東宮殿下の御代拜は、足立東宮亮奉仕し、伏見宮殿下を首め奉り、內海京都府知事、井上警部長、內貴市長、外、官民數百名參拜、姬路聯隊よりは、儀伏兵一中隊を附したりと云ふ。

●貞宮御式年祭　同じ十一日は、故貞宮多喜子內親王殿下一年御式年祭に相當せしを以て、午後一時より、宮中にて、御靈殿祭、同二時半より豐島ヶ岡御陵前に於いて、御墓祭を行はせられたり。

●幣帛料御下賜　宮內大臣子爵田中光顯氏の北堂十二日逝去に付、皇后陛下より、北島權掌侍を差遣され、幣帛料を御下賜せさせたまへり。

●白雉の献上　府下西多摩郡小曾木村字黑澤に一禽あり。全身純白雪の如く、尾長くして、身丈殆四尺余、森中に出沒して、容易に人目に觸るることなかりしが、舊臘、遂に、之を銃獲し、丸山郡長に示しゝに、郡長は、所謂白雉にして、稀有の祥瑞なりとて、宮內省へ献上せん事を勸告せしかぞ、同村柳內氏は、之を携へて上京し、其の手續に及びたりと云ふ。

●教育者の摸範　兵庫縣加東郡八城尋常小學校、訓導中村鶴造氏は、元、三草藩士なるが、平素溫厚寡言にして、生徒に接すること溫和懇切に恰も慈母の愛兒に於けるが如し。氏嘗て同郡三草

尋常小學校長たり。然るに、兄某も、訓導たれども、氏の次席なりしが、日々、學校に出入するに際し、禮義を守りて、兄より、先歩することなく、退校の際など、氏は校長なれど、校門迄は、各教員に先だち歩めども、門に至れど、立ち止り、兄に歩を讓り、後に從ひ歸宅するを常とせり。其の謹直方正なること、實に斯道の好模範と云ふべき程なりと云ふ。また兵庫縣赤穗郡赤穗高等小學校訓導岩崎元一氏は、去年の八月二十八日の夜暴風雨の爲め學校舍潰倒の際、御眞影奉還に盡力せしを以て、同校組合會に於いては、決議の上此の頃、氏に送るに、感謝狀に、銀盃一ケを以てせり。其の感謝狀に曰く

本年八月二十八日の夜、暴風雨の爲め、本校舍潰倒の際に臨み危險を冒して、御眞影を奉置所より取出し、他に奉移するを得たるは、全く貴下必死の盡力に職由す、本組合は、其の功勞を嘉し茲に、銀盃一個を贈り以て謝意を表す。

●生徒の龜鑑　兵庫縣美含郡諸寄村二百二十九番地平民濱田治左衛門の二男與助は、一昨年三月、村里の尋常小學校を卒業して、直に隣村なる濱坂小學校に入り、目下、高等科第三學年に在りて、修學中なるが、性質温順にして、人と爭はず、學力衆童に抜で、品行、亦方正。二十九年、私立二方郡教育會、木盃一個に賞狀を添へて、授與せしことあり。又、試驗毎に優等の成蹟を得て、賞狀を授與せられし事、數回ありと云ふ。與助家裕ならざるを以て、朝夕、家事の手助を爲しつゝ、通學怠らず、其の殊勝なる與助の性行賞すべきを以て、校長稻田春治氏は、彼を特待生として、授業料の賦課を免じ、教科要具を給せられん事を、町長へ申出で、町長は、之を町會の議に附せしに、町會は、滿場一致を以て、可決したり。又、同地郵便電信局長森義之助氏は、教科書、一切取揃

へて、之を前記與助へ與へ呉れよとて、學校へ送りしかば、校長は、早速、其の旨を通じ、衆生徒の面前に於て、與助へ授與せりといふ。世間幾多の學生鑑みる處あれかし。また兵庫縣加西郡九會尋常小學校第四學年九會村の內、繁昌村菅野佐助長男、菅野岩太郎(十年九ヶ月)明治三十二年五月中、退校の際、同校第三學年兒童菅野秀太郎病後疲勞、且、風雨の爲め、誤て、同村下重木村字玉の坪溜池內に陷沒せるを見て、其の身を忘れて、速に、之を救助せしのみならず、其の着用する所の衣二枚の內、一枚を貸し與へて、無事に歸宅せしめたるは、其の善行、實に、他の兒童の摸範とするに足れり。

●感心なる娘　氏も育ちもたゞ心一つによることぞかし。美作國、勝北郡豐田村、大字柿五十四番地、柴田鹿市長女サタノは、至つて心掛の良き娘にて、家には、父、及び、兄弟六人あり。母は先年病死せり。其の後は、家事は、勿論、小供の世話まで、手一つに引受け居たりしが、父鹿市も、亦、病身にて、永く病床に臥し居れば、農事も自ら爲し、父の看護兄弟の世話の片手間には、野に出で、山に行き、男一人前の仕事を爲すのみならず、生計向貧しくして、學校の敎育を受くる事能はざりしをば、口惜しきことに思ひ、業務の餘暇を偸みて、獨學を思ひ立ち、人に問ひ字引にすがりて、衣食の料より剩し得たる錢を以て、新聞雜誌小說等の類を求めて、根よくも學習せし結果、今は振假名なしの新聞をも、おぼろげながら讀み得る樣になり居れりといふ。いと感ずべき行爲と云ふべし。

●泥中の蓮　岩代國針道村大槻喜平の妻りきは、土方の娘に生れたれども、性質頗る溫柔にし

て、克く貞節の道を知り、五年以前より、不具にして起居自由ならざる夫を看護し、家業の傍ら、五人の子の教育に心を用ゐるなど、常人の及ぶ所にあらずと言ひはやさる。

●下婢の摸範　信實は、心の鏡なり。曇らねばこそ輝くなれ。山梨縣甲府市富士川町中川享氏方の下婢伊藤ハナといふは、同縣北巨摩郡上手村のものにて、一昨年十一月中同家に雇入れられたるものなり。昨年六月頃より主家の妻女、肺病に罹りて、常に病褥に臥し居り、先頃遂に死去したるが、同家には、腕白盛りの子供數名あるのみならず、共立女學校の寄宿生もありて、其の多用なること、一方ならざるに、一心不亂になりて立働き、一家の差支なきやうになし、且つ病者の看護に懇切なること、他の家人の及ばざる程にてありしかば、人々感心せざるものなしと云ふ。





●華族女學校の擴張　華族女學校は、改正條約の實施に伴ひ、皇后陛下の令旨を奉じて、學則を改正し、更に、内外上流の女子を入學せしめ進んで女子大學の課程をも増設する計畫あり、其の取調も、已に成を告げたれど、遠からず　皇后陛下へ奉上の手續に及ぶべしと云ふ。

●衞生　食料と衞生法　食事の時に、湯水を與ふることの可否につきては、禁止するは無理なり。私は、制限說にして。食事を終る頃に與ふるをよしと思ふ。陸軍の學校に於ては、食事の終らんとする時、當番の生徒、湯をつぎ行く。かく制限する所以のものは、消化液を薄くするを以てなり。

日本人は、ことに水を多く呑む習慣あり。ことに、小兒は、之を禁止し能はざるが故に、制限して呑ましむるなり。これ、困難なる事にあらず。熊本の或、尋常小學校にては、土瓶を各學級に供へ、小さき茶碗を添へ置きて、教授終るや、教師は、湯を呑まんとするものに擧手せしめ、それのみをつれ行きて、一ぱいづゝのましめたるが、之が爲に、病人を減じたりと、或學校にてかく注意するも、家庭にては、しかせざるを以て、無益なりと云ふものあらんも、かくの如き言をなすものは、教育者にはあらざるなり何となれば、學校にて、よく注意し、之が爲めに、家庭にても出

意するに至らしめざるべからず。

日本人は、三千年來食事をなすも、飯を食ふことへたなり。澱粉あるものを食するも、之を、デキストリンに化せずば、用をなさず、而して、之を、デキストリンに化せんとせば、唾液を注がざるべからず。胃液は、決して、澱粉を消化するの用をなさゞるなり。されば、もし、今日の如く、茶漬となすは、大に不可なり。もし、此の習慣を改めずんば、進化説に依りて、日本人は、齒なきに至らん。到底茶漬を廢せざるべからず、さう云ふ時は、英雄は、チヤーハ、生米ナクテ、腹ナ火ニアブツテ、飯ナタクと曰はんも、それもとより、英雄の事のみ。通常の人は、決して、之に倣ふべきにあらざるなり。

▲トラホーム　實際に、トラホーム患者あるも、之不治の症と云ふにあらず。尤も生徒の身體弱きものは、とかくもなり。此の病氣は、全國に入り渡りたるものにして、目下、どうとも仕樣なし。只、人智進みて、種々の注意をなすに至らば、之が跡をたつに至らん。

其の治療法は、完全なるものあり、其の病氣の直る直らぬは、其の人の體質如何にあり。

シロートにて、トラホームーの傳染するものなるや否やを區別するには、目やにの出るものを以て、重しとせば、先づ可なり。

トラホームが、學校に於て傳染するは、體操器械にて、或、病者が目をすりたる手を以て、器械にふれたるを、他の生徒の手にふれ、それより、其の生徒の目に入ることあるべし。注意せざるべからず。されば、或學校にては、トラホーム病者には、あまり目にたゝぬしるしをつけ置きて、遊戯は、他座と區別しあるなり。

（高知教育雜誌）

▲ペスト豫防法　曩に神戸市に於て、ペスト豫防策として、部分的診斷、即ち病者ありたる附近に限り、特に健康診斷を勵行し、若し疑はしき者あれば、直ちに、隔離室に收容して、病毒の傳播を防ぎしに、大に、其の効を奏し、殆んど全滅の姿なるより、大阪市、亦、此の例に倣ひ、那の金巾會社附近の住民、八千餘名に對し、一日一回、嚴重なる健康診斷を施す事とし、去る八日より實施せり。（東京朝日）

●費府商業博物館　フィラデルフィア商業博物館館長ヴイソン博士は、書をForum雜誌に寄せて、該博物館の組織を詳述し、かゝる組織は、世界、未た曾て有らずと誇稱せり。先年、シカゴ萬國博覽會の閉會を告ぐるや、費府市參事會は、其の殘品を讓受け、前記の如き博物館を開設し、該市の官吏、並有力なる市民を撰任して、之を監理せしめたり。該館は、三大部より成る者にて、第一部

は、教育館とも稱すべく、商業地理を教ふるを以て、目的とす。第二部は、博物館本部にて、商業に關する世界の貨物を蒐集し、公衆の覽に供ふ。最も注意すべきものは第三部にて、通信局（The Bureau of Information）と稱し、同國の實業家をして全世界の商業事情に通曉せしむるを目的とするものにして、先づ、第一に名國發刊の商業雜誌（規則正しく受取るもの二千餘種の多きに上るといふ）を集め、各國の言語に通ずる者をして、最も有益なる事項を摘譯せしめ、之を紙牌制に由り、索引に便ならしむ。就中直接に注意すべき事柄は、其の都度商工業家に通知するものとす。例へば、アルゼンダイン共和國、並に墺太利國に於いて、稲苅機械の需用盛なりとの記事ある時は、直に右機械販賣者に通知して之に關する各般の注意をも併せ報する者にて、此の種の報知を發すること、毎月二千件に超ゆといふ、第二に、合衆國は勿論、各國領事の報告、其の他の公報を集輯す。其の集輯の手弘きこと、政府にて、從來行ひ來りし如き者の比に非ず。第三には、同博物館に夥多の商業事項研究生を備ひ置き、其の中若干名を外國に派遣し、米國輸出商の爲め、各地の商況を視察し、及び、該國政府、並に、商業家と、同博物館との連絡を作るに盡力せしむ。此等の研究生の報告書を細大集めて、觀覽に供したるものにて、第四には該館の爲めに外國通信を集めたり。通信員は、貿易に從事せる者に、委囑するを常とす。又、信用ある外國の輸入仲買商の名簿を編輯せり。目下、しりきに、外國會社の便覽表調製中なりといふ。



# 女鑑歌文月次兼題

二月廿日發行の分

歌　江上霞

文　名所の寫眞を友に送るに添ふる文

二月八日限

三月五日發行の分

歌　歸雁

文　二月十一日の日記

（廿二字詰十二行以内）

二月廿三日限

## 投稿書式

### 歌書式

題

住所
姓名

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

### 文書式

題

住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、片名假は普通の平假名にて別々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總べて沒書とす。

○女子は、なにびともにても隨意に投稿することを得。



# 教の庭

## 一月廿日兼題　爐邊會談

天　大阪市南區北炭屋町百八十七番邸　日吉あさ子

埋火をかきおこしつゝおもふどち
　語ることよひはふけすもあらなん

地　但馬國出石郡　西川順子

いにしへを語りあひつゝ釜のゆの
　わきてうれしきうつみ火のもと

人　東京市小石川區江戸川町六番地　本多いと子

更くるをも忘れはてけりうつみひの
　おもひおこしてかたりあふ夜は

人　肥後國八代郡八代町　田代艶子

おもふどち火桶圍みてかたらへど
　ふゆのよなかもみしかゝりけり

## 秀逸六首

榾の火にくつろぐ宿のまさゐには　うき世のかぜもかよはざるらむ　伊勢　河原芳子

埋火のあたりのどかにかたるよは　ことの葉ぐさのはなそさきける　羽前　金森俊子

うつみ火のあたりはいさゝ長閑にて　かたることはにはなもさくなり　信濃　齋藤よし子

埋火にすみさしそへておほきみの　あつきめぐみをかたる夜はかな　肥後　友永章子

心あひの友がきゆひて夜もすがら　かたりあかさんうつみ火のもと　秋田　大塚小松子

團居て語るさちこそうつみひの　したのこゝろも赤くはありけれ　加賀　永山豊子

（以下原稿到着順）

寒ければ火なけにちかくうちよりて　かたるもうれしこゝろのどかに　高やす子

うち集ひほたひおこしてあたゝけく　よのとりさりなかたるたのしさ　河田いし子

いくたびか炭さしそへてもろともに　かたるもたのしうつみひのもと　羽田三緒子

思ふどちかたりあふ夜はうつみ火の　うつもれし身もわすられにけり　小川初野子

打つどひ睦かたりするうつみ火の　あたりははるのこゝちこそすれ　陣田楨子

うつみ火ははひさなれども共どもに　かたることはは盡きせざりけり　道臨やゑ子

白ゆきのふりつむそのをながめつゝ
火をけかこみてかたるたのしさ　村田嘉子

思ふとちと語り合ひつゝうつみ火を
かきおこしてそ夜をふかしける　萩原章子

思ふとち火をけのもとによりそひて
かたらふ夜半はふゆとこしもなし　田代綾子

まとゐしてむかし語らふうつみ火の
あたりははるのこゝちこそすれ　内海順子

へたてなき友うちむれてうつみ火の
のこりなきまてかたる夜半かな　山根久子

おもふとちもの語りつゝうづみ火の
しらむをたにもおほえさりけり　稲原菫子

あたゝけき物かたりこそせられけれ
さむさわするゝうづみ火のもと　佐々小琴子

枝すみをさしそへてこそかたりあへ
こと葉のはなに木のめかをりて　佐々有鄰子

かきおこし思ひおこしてともどちと
むかしをかたるうづみ火のもと　吉富彦子

さくら炭かきおこしつゝともとちと
かたることばのはなぞゆかしき　村上昌子

霜ゆきのさむさわすれておもふどち
かたるもたのしほた火たきつゝ　松永信子

賤の男がましばたく火にまとゐして
むかしかたりに夜ぞふけにける　佐々木忍子

へだてなくかたりかはせる言の葉の
はなも實になるうづみ火のもと　佐々富枝子

かき起しかきおこしつゝうつみ火の
もとにむかしをかたりかはせり　受樂院圓子

---



うづみ火の埋もれたりしこゝちさへ
かきおこしつゝともとかたらん　平山政子

思ふとちこゝろものりてうつみ火の
しろくなるまでかたりあひつゝ　尾倉益子

語りあふことこそすきぬうつみ火の
しもとなるまで夜はふくれとも　永井さい子

うつみ火をかき起しつゝおもふとち
かたる夜半こそたのしかりけれ　平尾まき子

はや咲きのうめの一枝をながめつゝ
ともとかたらふうつみ火のもと　立神富子

深雪ふるさむさわすれておもふとち
かたらひかはすうつみ火のもと　井上千代子

ふりつもる雪をながめてうつみ火を
なかにかたらふふゆのころかな　鶴田直子

うつみ火をかきおこしつゝ團居して
かたらひかはすふゆのころかな　安原園子

峯のしぐれせみの松かぜしらべよく
かたりかはせぬうづみ火のもと　稲津千子

諸ともにこゝろもとけてうつみ火の
しもとなるまでかたりあひつゝ　德永萬壽子

長き夜をおもひのかづもうづみ火も
のこりなきまでかたりあかしつ　德永辰子

豊としのたちてこゝろもはれやかに
かたりかはさんうづみ火のもと　澤田春子

はるならて言葉のはなもに匂へるは
ともにかたらふうつみ火のもと　田村多豆子

言の葉の花もにほひてのどかなる
　ほた火のもとのまどゐたのしも　村上採子

思ふどちよりてかたらふうつみ火も
　ほのかになりぬさよふけぬらし　横山柳子

思ふどち語るよいつか更けにけり
　ひをけのすみもはひとなるまで　横山寸賀子

いへのうち残るひとなくうつみ火に
　まどゐしつゝもかたるたのしさ　池江榮子

ほたゝきてまどゐしつゝも友どちと
　かたらふよはゝみじかかりけり　池江もと子

なつかしきむかし語のそふまゝに
　夜ふかくなりぬうつみ火のもと　財田富子

うちよりてしばのうづみ火起しつゝ
　ふくにもしらでかたるたのしさ　南里佐多子

さしそふる炭のかずかずおもふどち
　かたるもたのしうつみひのもと　駒澤まつ子

うづみ火をかきならしつゝ友どちと
　かたらふまゝに夜をふかしけり　那須昌子

まつはりの厚きすみ火をおこすかな
　ひとのまことはとにもかくにも　中山庫子

うづみ火のもとに集ひておもふどち
　むかしかたりはよをふかしけり　村崎包子

さまざまに言葉のはなのさきそひて
　ふくるもしらぬうづみ火のもと　黒田明子

うづみ火の側にはらから打ちよりて
　をさながたりに夜をふかしけり　黒田美津子

うつみ火のきゆるもしらで友どちと　鵜澤千代子

---

　かたりあふまに小夜更けにけり

うつみ火のあたりを春とにぎはしく
　よろひとごとにかたるたのしさ　河方喜代子

さくらずみ匂ふあたりはほろめきて
　むかしかたりにはなぞさきける　鈴木秀子

さしそへし櫻のすみのにほひいでゝ
　むかしかたりもほろめきにけり　鈴木なみ子

おもふどち語りつきせでうつみ火の
　すみはいくたびさしそへにけむ　上田綠子

うづみ火のもとにつどひて語る夜は
　ながかれかしといのる甲斐なき　長松ちせ子

長しとは誰がかこつらんうづみ火の
　もとにつどゐてかたるこよひを　藤尾まつ子

うづみ火のもとに兄等がまどゐして
　かたるは明日のなりのわざなり　甲谷すみ子

うつみ火のあたりは春のこゝちして
　むかしがたりにあかぬ夜半かな　山方春子

なつかしやふるきともどちうつみ火に
　すぎこしかたをかたりあひつゝ　根田よし子

思ふどちことはのはなもさき出でゝ
　ふゆとしもなきうつみ火のもと　山下やよ子

うつみ火のもとに集ひておもふどち
　ありのことごとかたる夜半かな　林はる子

思ふどちほた火たきつゝうちとけて
　むかしをかたる夜半ぞたのしき　松岡まつ子

埋火のほとりははるのこゝちして
　しもよもしらずものがたりしつ　神村たか子

とひとはれかたみに語りかたらひ
　こゝろへたてぬうつみ火のもと　石川るい子

うつみ火に梅か香たきてかたる夜は
　のどけきはるのこゝちこそすれ　石川らく子

うつみ火のもとは寒さもしらゆきの
　つもる夜すからかたりあかしつ　石川久子

思ふどちつどひてをれはしもさゆる
　ふゆの夜しらぬうつみ火のもと　石川なゑ子

まらうどゝ火をけ圍みて打ちかたる
　おきながことばおもしろげなり　目黒佐喜子

夜更くるも知らでおきなのうま言を
　きくゝうれしきうつみ火のもと　都木春子

もろともに老もわかきもまとゐして
　むつみかたらふうつみ火のもと　澤井英子

埋火をまなかにすゑてかたらへは
　むつかしこともかとなかりけり　坂田信子

うつみ火をなかたちにして思ふどち
　こゝろのどかにかたるたのしさ　八木沼里子

うつみ火をかき起しつゝはらからと
　ふくるもしらでかたるたのしさ　幡谷たみ子

ふくるよも知らでかたらふ興たかし
　うつみ火のあたり集ふはらから　川嶋まさ子

うづみ火のあたりに友とかたらへは
　さながらはるのこゝちこそすれ　伊東露子

降る雪もかたらふこともつもりつゝ
　ふゆとしもなきうつみ火のもと　伊東鶴子

火のあたりばかりははるめきて
　むかしがたりもたのしかりけり　横手たち子

埋火のあたりのどかにまとゐして
　むかしをかたることぞうれしき　横手こう子

うつみ火をかきおこしつゝ語りあふ
　ひとのこゝろははるめきにけり　木村菊子

うつみひのあたりは春のこゝちして
　むつひかたらふゆきのふるさと　若代りう子

うつみびの元によるよるまとゐして
　こゝろおきなくかたるたのしさ　川島さく子

睦ましく我がはらからとうつみ火の
　あたりのどかにかたるうれしき　佐藤きみ子

むつましくかたることばに花さきて
　はるおもほゆるうづみ火のもと　藤野聰子

ゆきをれの音はきけどもまとゐして
　のどかにかたるうつみ火のもと　石川鶴子

わすれても春かとぞ思ふをもふどち
　むつかたりするうつみ火のもと　二神京子

うつみひのあたりのどけく春めきて
　かたることばのはなも咲きけり　井上津佐尾子

うつみ火をかきおこしつゝ友どちと
　むかしがたりによをふかしけり　筑紫春子

おもふどち柴のうつみ火かきおこし
　むつかたりするふゆのよはかな　高宮謙子

うつみ火をとり圍みつゝむつましく
　ふくるもしらでかたるたのしさ　道家靜野子

やからみなつどひて語るうづみ火の
　あたりはふゆの夜半としもなし　川邊つた子

しづが家も楽しかりけりまとゐして　むつがたりするうづみ火のもと　甲谷ちよ子

うづみ火のあたりに友とまとゐして　ふくろもしらず夜ごとかたれる　藤尾たか子

うづみ火のもとに夜な〳〵円居して　むかしがたりをきくぞうれしき　甲谷ゆり子

みやこなる人は知らじなうづみ火の　もとにしづ等がかたるこゝろを　甲谷つゆの子

うつみ火のもとのまとゐは長閑にて　むかしがたりもはろめきにけり　二神きよ子

うつみ火のあたりに友とまとゐして　かたる夜半こそたのしかりけれ　松山壽枝子

思ふどちのむかしがたりも春めきて　いとのどかなるうつみひのもと　梯たけ子

樵りつみしつま木たきつゝ子孫らと　まとゐのみちをかたるたのしさ　永井國子

夜を寒み背よみさしてうからやから　かたるもたのしうつみ火のもと　名取正代子

夜をさむみ老もわかきもうつみ火の　もとにつどひてかたるたのしさ　名取よし子

埋み火のもとによる〳〵たらちねの　むかしがたりをきく〳〵ぞたのしき　坂田喜美子

埋火をかき起しつゝまとゐして　親しきどちもかたる夜半かな　亀井玉子

うつみ火のもとによる〳〵思ふどち　かたらひかはすことぞたのしき　齋藤すわ子

おもふどち夜な〳〵共にうちつどひ　ほださしくへてかたるたのしさ　簗田花子

埋み火にすみはいくたびそへながら　かたること葉はつきんともせぬ　河野みち子

埋火のもとに木のめもかみりあひて　かたることばのはなぞにほへる　山田香川子

埋み火にこゝろのこほり打ちとけて　ことばのはなかたりかはしつ　坂本遊多歐子

埋み火のもとのかたらひつきぬまに　ながき夜なれどいたくふけたり　石田藤子

うつみ火のもとに集ひてはらからと　さよふくるまでかたりあひつる　磯野こと子

月さゆるふゆの夜さむにおもふどち　かたるもうれしうづみびのもと　杉村すが子

とも垣のほた火かこみてなにはがた　ふしあしもなくかたるたのしさ　馬場梅尾子

うづみ火のもとに友どちまとゐして　こゝろへだてずかたるけふかな　井川澄子

ふくろをもしらでかたらふ友がきの　まとゐたのしきうつみ火のもと　林文子

たらちねの親はらからとうづみひに　むつがたりする夜半ぞたのしき　佐藤秀子

暫しとてよりにしものをうつみ火の　もとのまとゐに日をくらしけり　徳永そう子

埋み火のほとりに近くうちつどひ　むかしに今にかたりあひつゝ　青木たま子

うつみ火の許につどひてくさ〴〵の　むかしがたりにけふもくらしつ　尾崎嘉子

埋み火のはひとなるをもしらぬまで
たゝまくもをしよ半のまとゐは　本庄小なみ子

まとゐしてうつみ火近くかたらへば
はるならねどものどけかりけり　佐々敏子

睦ましくましはたきつゝかたらへは
はるもかよへるこゝちこそすれ　杉浦三恋子

埋み火にまとゐするよはさむからで
ふるしらゆきもはなとみねけり　根津禮子

おもふどちのどかに語るうづみ火の
あたりははるのこゝちこそすれ　氣賀すみ子

おひ人もわかきも交るうつみ火の
あたりのまとゐいとゝうれしき　加藤たま子

ともどちとまとゐをなしつゝましはたき
かたりあふ夜そたのしかりける　月野さへ子

寄りそひて語ればはるのこゝちして
ふくるもしらぬうづみ火のもと　酒井淺子

埋み火にすみさしそへてかたらへは
おもひもとけてはるめきにけり　永田うめ子

うつみ火をかこみてかたる嬉しきに
ふくるもをしきふゆの夜半かな　吉田政榮子

うつみ火のきゆるもしらて語りあふ
友のまとゐそたのしかりける　白瓦藤子

風さゆるよはをもしらぬうつみひの
もとのまとゐははるこゝちせり　椎野ねき子

はてしなきむかしかたりに今日も又
すひつかもとにひと日くらしつ　本多さし子

埋み火をかきおこしつゝおもふどち　山田婦美子
かたりあふ夜そうれしかりける

埋み火の消ゆるもしらでなつかしき
むかしかたりにさ夜は更けたり　山田静子

うつみ火のあたりにけふもより集ひ
かたらうこゝのたのもしきかな　淀朝子

埋み火をかきおこしつゝおもふどち
かたらふよはそ楽しかりける　角龍子

はひがちになるをも知らで語りけり
しもさむき夜のうづみ火のもと　大谷津峰子

埋み火のあたりのどかにまとゐして
こゝろのおくをかたるうれしさ　酒井れい子

おもふどち花みむはるのあらましを
かたるもたのしうつみ火のもと　服部萬子

木のめなるひをけのもとの楽しきは
へたてぬともとかたるなりけり　服部正子

雪はけしみちのさむさをはすれても
かたるうれしきうつみ火のもと　加藤數子

なか〳〵に寒き夜半こそたのしけれ
ともとまとゐのうつみの火もと　三宅中枝子

木のめけるいほそ楽しきうつみ火の
あつきこゝろにかたりあひつゝ　河合縫子

おのつから友うちつとひにひさしの
うたかたりするうつみ火のもと　伊東以佐子

こゝろあひの友と語ればなかきよも
おもはすふけぬうつみ火のもと　伊東千代子

おひはこの幼あそびをかたりいでゝ
さむさもしらぬうづみびのもと　三木壽子

埋み火のつきぬかきりはかたりあふ　こさのはくさのたれはありけり　伏脇米子

おもふさちかたりかはしつ媚しさを　かきおこしたるうつみ火のもさ　濟水まん子

冬の夜のかたらふさものあろしこそ　はろなもしらぬ火をけなりけれ　野中しつ子

けふもまたしたしき友さむかふかな　ひさもかすそふうつみ火のもさ　三高まつ子

うるはしき言葉のはななさかせつゝ　まさゐうれしきうつみ火のもさ　野中朝子

おもふさち春のこのめはくみそへて　のさかにつさふうつみ火のもさ　森こさ子

おもふさちかたりかはして永き夜の　ふくろもしらぬうつみ火のもさ　山崎ちよ子

おもふさちひをけのもさの語らひは　はな見るよりもたのしかりけり　由非濵子

言の葉にいかなる花の咲きぬらん　ひをけかこみてうちかたる夜は　由井すみ子

うつみひのもさによなく〳〵圓居して　語るもたのしはらからのさも　高砂よし子

さくらすみに匂ふ火桶のさもまさゐ　こさ葉のはなも咲き出づるらん　高砂きよ子

ゆくりなき友もよりきてをかしきは　ひをけをかこむまさゐなりけり　高砂菊代子

思ふさちあかきこゝろをかきおこし　かたるもたのしうつみひのもさ　高砂隆子

一人よりふたりよりきてうつみひの　高砂玉子

---

ふる雪をさもにながめてうつみひの　まさゐはせまくなりにけるかな　高砂準子

一人さひふたりさひきてうづみ火の　あたりのさかにかたるたのしさ　富田郁子

思ふさちかたりあひつゝさゆる夜の　もさにぎはしくかたるたのしさ　高橋かれ子

いくたひか炭さしそへてうつみ火の　ふくろもしらぬうつみ火のもさ　竹村竹里子

埋み火のもさのまさゐにうちさけて　もさにかたらふこさのたのしさ　服部倫子

おもふどちふくろもしらで埋み火の　かたるもたのし夜のふくろまで　服部萬壽子

白ゆきのつもろおもひをかきおこし　もさにかたらふこさそたのしき　服部充子

ほたの火にまさゐをしつゝ言の葉の　かたりあふまに夜やふけぬらん　山代由子

ふゆのよは火桶かこひてたらちれの　はなのかをりに夜をふかしけり　丹下花子

おもふこさ語れさつきぬまさゐかな　むかしかたりをきくもうれしき　丹下重子

さくらすみかき起しつゝおもふさち　ふゆのよさむのうつみひのもさ　歛内都喜子

ましはたく宿に集ひてこゝろ合ひの　あかきこゝろをかたろ夜半かな　遠山たゞ子

埋み火のあたりのさかにまさゐして　さもさかたるそたのしかりける　永井貞子

かたればはるのこゝちこそすれ

まとゐして語りこそあへうつみ火を
かきおこしつゝあかさぬよはかな　鈴田よしい子

## 一月廿日兼題　わが里の新年

### 天

三重縣度會郡宇治中之切町　河原芳子

新玉の年立ちかへるあしたより、二日三日が程は、たゞなごやかなるまとゐの中に、かるた、すごろくなど、とりどりにもてあそびてたのしむは、大方のすさびならむ。そのこ子、女の童などのものもてたはむるゝは、いづくもさありなむ。何の式ある、くれの祭あるなど、にぎはしからむ。あらず、くはしくえしらねども、さありなんや。さるに、わがすめろぎの遠つ御祖とます神のしづまります五十鈴の宮の片ほとりになんあるわが里は、天つ日の御光りいとたふとく、遠つ國よりまふでくる人のにぎはひはさらなり、萬歲など、大宮まふでのついでに、皷の音のふしおもしろく、むかしながらのてぶりいとをかしき。外、しるすことなく、骨牌、壽娛六など、もてあそぶはまれなり。をのこ子、めの童などの、ものもてたはむるゐなども盛ならず。たゞ、五十鈴の宮に歲旦元始の大御饌たてまつりたまふぞたふとけれ。十一日は私の御饌とて、宮司以下五丈殿にて、舞樂みそなはし給ふ式ある、いみじうたふとし。松の內はとは、のどけくわらひ興じて、ゆたかに、新年をいはふ心ぞ、都も鄙も、おしなべてかはらざらめ。あなめでたし。

### 地

富山縣氷見郡窪村字柳田　屋鋪鈴枝子

吹く風も枝を鳴らさず、四方の海波靜かなる大御代の惠のあまねさ、斯る山深き賤が伏屋に住む身も、隈なく立ち返る年の初日に逢ひて、濁なき世の千代の若水掬ぶ嬉しさ。柳の糸の繰りかへし、祝へど〳〵つきずなん。花の都に生ひ立ち給ひし人の、思ひもより玉はぬは、山里に埋れ住む身の、年の初の樂しさになん。さるは、馬の走り、車の軋る音の騷こそなけれ。門の松竹、日のみ旗こそ立ち續かね、百千鳥の千代〳〵と鳴く聲は、庭の松風の調に通ひ、雪ながら薫れる梅の、時知り顏に見ゆるなど、心置なきおのづからの友になん。里人はうからやからの如く行きかひ、睦みあひ、祝酒汲みかはし、ゑみくつがへりつゝ樂しがる。人心

裏表あるとはやうかはりて、人々の顔の色にさへ、赤き心のあらはれて、うらとけたる様、實に心安うなん。住めは都とは、誰が云ひそめし言の葉ぞ、なつかしいをかし。我が里の新年。

人　　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

足引の山里は、心玄づかに、超歳て、門の松は、實生のものを用ひて、立てかへず、ゆつる葉も、軒に繁茂せるを、其のまゝにをらそへ、卯枝には、園の梅を、白馬には、手がひの駒をひきたて、餅鏡は、門田の新米にて、神酒は、自製の醴を、氏の大神に奉り、家族集りて、新年の宴をひらくものから、波風穏に、中垣のへだてもなく、歌ひ舞ひ、さしなみの隣よりも、あさつく日むかひの家よりも、八拍手うちかはし、一月の元始祭をぞなしつる。あな目出たの大御代。いとゆたかなる大御年。

うたひまひかなつる袖にやひらでも
　やますひびきてにぎはひにけり

人　　相模國小田原　大谷津桊子

あらたまの年の立ちかへるあしたの空、いと長閑にて、治れる御代のさまは、都も、ひなも、平らかに、年の始をことほぎまつる事になん。さるからに、片山里に住める身も、うからやから打ち集ひ、とそ汲みかはし、ほぎ事のあひて賑し。外面に出づれば、朝日に輝く、日の丸のみはたは、かしこき君がみいづをあらはし、家毎に、たてつらねたる松竹は、幾千代もかはらぬ御代のさまをしめし、少女子は、羽子、手まりの遊に、餘念もなく、男の子は、こまめぐらすも勇しく、見る物聞く物、皆よろこびの種ならざるはなし。老も若きも、一つ心に、年の始を祝ふめり。夜に入れば、近きわたりの友かきら、打ちつどひてかるた遊に、時のうつるもおぼえず、山里のわびしき一小村も、かく安らかにことほぎあふも、實に、明らけく治まる御代の、たまものなりけり。

（以下原稿到着順）

## 秀逸六篇

松山市一番町十九番戸　宇高まつ子

父の君と共に、後の山にのぼりて、あれやよけん、これもおもしろしさて、男松女松の枝ぶりよきを擇びしは、一夜へだてし許りに、早去歳となりて、今朝はうるはしく門に植ゑられ、さひ來んもろ人をむかへ顔なり。床の花瓶には、室咲ならで、自ら、新らしき暦と共にひもときそめし梅の花は、庭の玉椿の千代に八千代をさへさしそへつ。先、大君を祝ひ、御代をことほき、身をも祝

ひて、事なく年をかされしをよろこびあひぬ。さて、今年も恙なく、守り幸ひ給へと、神にいのるは、昔も今も、はた、都もひなも、かはらぬ例といとかしこうなん。我がすむ里は、都の如く家居しげからねば、羽子の遊も心安く、蛛手なす電線もなければ、凧をあげんにも、心のとかなり。見る目もまはゆき大禮服にいやをたゞし、馬車をかる貴人達はなけれども、慈愛ふかき父母のかはらぬ御影あり。綾錦の衣に、花の如くよそふ少女こそまれなれ、新らしき木綿の清げなる衣まとはぬ人はなし。此の上に、何をか願はん。いざ我等も、母の手織のはれぎゝて、氏神の御社にや詣でゝん。深山木の生ひしまゝにて、つくろはぬ心の花の友許やさはん。實にうれしくたのしきは、我が里の新年よ。

松山市一番町十九番戸字高濟衛内　近藤よし子

朝日にかゞやく日の御旗には、大君の御いつもたふとくあふがれ、軒端に引きはへたるしめなはには、よはひのなかゝらん事を願ひ、年毎にかはらぬ門松のいろには、ときはときはに榮ゑん事をちぎる、さて、男兒ともの、凧揚げ、小女子等の追羽子、あるは歌かるたの遊など、花やかなるとならぬのけじめこそあれ、新玉の年の立ちかへるをよろこふこゝろは、萬里同風にて、いつこも〳〵、いと〳〵目出度なむ。都にはありやなしや しられども、我が里の新年には、元日より三日にかけて、四の宮より、お多福の御禮とて、醜しき女の、お多福の假面を被りたるが、目出度目出度と歌うたひつゝ、をかしげなる舞まひ、まひをさめて、「おかちんは、ゆがんでも、大きなるがよろし」とて、餅むとほろさま、年毎の例ながら、いとをかし。慾ふかきお多福やと いふもあれは、また「大きなるがほしとおもひながら、小さくてもよろしなさいはんよりは、罪淺くや」など笑ふもあり。ある人「さばかり、空のみ見つめ居なば、足もと危からんに」とたはぶれいひたるに、「ころびてもはなをうち侍らねば」と答へたるに、人々いみじう笑へり、顔をば、手拭にてつゝみ、片目ばかりをあらはし、假面を、額より上樣にかふり、たれば、舞はぬをりは、上をのみ見る樣に見ゆれば、なりけり、かゝる事おもしろしとにもあられど、笑ふ門には、福來るといふ事もあれば、それにちなみて、まだしり給はぬ人達の笑ひ草にもとてなむ。

富山縣氷見郡氷見南上町　伏脇米子

呉竹の一夜ばかりの隔なれど、新玉の年立ち返りては、萬珍らしき心地せられて樂しきは、都といはず、鄙と限らず、高き賤き差なく、一つ心なれは、程々につけ、さるへき設して、君をも、身をも祝ひなごすあり。されど、「浪華の芦は、伊勢の濱荻」とか、物いひのかはる如く、なべての手振にもかはりあるぞ世の樣なる。況て、進み行く世の習とて、萬、月に日におしうつり、改まり行くをや。いで、我が山里の年の初の、をかしき手振一節を、大方にしるさん。

宮詣よ、何はともあれ、鷄の聲きく即て、朝清めすと、年の若水もてならし、姿、形、心、身に繕ろい、產土神に詣づるなりけり。其のおりのぼりの道よ、高き賤き分ちなく、聲だにかはさず、おりくる者は、嚴かに禮すれど、のぼる者は、目もて答ふるのみ、詣のぼりてぬかづく迄と、頭だにゆるかさず、行きかふめり、一年のうち、似る時なうをかし。宮詣しはてゝ朝食終れは、暮れての後迄、祝ひ詞間はかはしつゝ回りありく、都人は、近きあたりだに、賀狀もてすさきけど、我が里人は、遠きも厭はで、かちよりす。なほ、松飾、神棚より、屠蘇、齒固、筆初め、歌合せ、或は双六、かるた、まり、たこ、など遊びぐさの末までと思へど、書きつゞくれは、大方に同じこととも澤にあらん。さては、見給ふ人の目も、煩はしからんとて省きつ。

遠江氣賀町　氣賀すみ子

松竹處せく立て連れて、花をかざし、きらを裝ひて、ことほぎかはす玉しきの都の手ぶり、さることながら、あまざかるひなにはあれど、我が住み馴れしふるさとの年の始ぞ、實に忘れがたき。程ちかき外山の松も、うちつけにみどりの色を深かめたりとおぼゆ、春毎に根芹つむとて馴れにし門のへのいさゝ小川の水音も君が八千代やうたふらんときこゆ。くだかけの聲ものどかに明けわたりぬれば、まづはるかに、都の方をろがみて、やがて打ちむかふもちひの鏡のくもりなき御代ほきかはすに、幼きはらからの、うれしげに、君が代唱ひたる、げに心ものびらかなり。まいて、玉くしげふたおやともに、打ち揃ひて、春のことあたゝかきめぐみの露のかゝる身は、うれしともうれし。日もたけぬれば、筒井筒ふりわけ髮の幼かりける折の友どちの、遠きみちをも徒歩にて音づるひなの習ひとて、あやは飾られど、にしきは裝はれど、昔を忘れぬ人の情のうれしともうれしくて、心のおくをかたりあひ、外山の松のときはかきはに、いさゝ川のたえじと契りかはしつゝ、物ごとにあらたまるてふ年の始にも、昔にかはらぬ人心こそ嬉しけれ。あはれ、姿の花をのみかざるときくなるみやこ乙女に、見せばやとおぼえてなん。

但馬國出石町　西川順子

初鳥の聲もまだきに起きいでゝ、君が代の千代の若水汲みあげんと、朝戸明くれば、曉かけてふりいでし白雪に、きのふのいぶせきさまは、みながら埋もれはてゝ、一夜のほどに、天地も、新たになれる心地ぞしぬる。例のことゞも、かたのごとくしをへて、拜賀にとて、學校へとたちいづれば、軒毎にかゝげたる日のみ旗は、朝風に打ち靡き、たちならぶ門松のみどりの上に、ふりつもれる白雪は、年ある秋のしるしと見えて豊けしや、たのしげにうち笑めるちごのおもわも、けふはことにうつくしう、君が代うたふこゑもほがらかにいさまし。拜賀の式もはてぬれば、ふたりみたり秋つられて、敎のおやのみもとを、まづとふめり。へだてぬ友どちの、打ちつどひて、かるたなどとり、をかしげに打ち興ずるを見るさへあるに、しひてとゞめらるれば、日頃のいやなさへに忘れてたはむるゝを、師の君も許し玉ふは、新らしき年の始の賜ものならんかし。隣れる家にも、今、かるたの盛りとおぼしく、笑ひののしる聲、いと賑はし。遊びつかれて家に歸れば、母君は紙硯などとゝのへて、わが子の試筆を待ち玉ふらん。心づくして都の兄君の送りたまひし羽子も、手まりも、この雪にてはと、少女がかこつに引きかへて、男の子らは、おのが時とや、こゝかしこに、大なる雪だるま、雪燈籠などいと工みにつくりあげて、ほこりかなり。去歳、妻むかへし人の、年始の禮にとて來れば、祝にとて、手に手に、大なる雪玉を作り、頭といはず、背といはず、投げつけて、多くあたれるをめでたしと笑ひ興ずるが例なりしを、さきつとしより、戸毎の廻禮は、廢止との事に更まりしものから、今は、たゞ、うぶすな神に詣でしかへるさ、近きみよりの許を音づれ、一盃の屠蘇に、深き交りを汲みかはすのみなり。大路に千鳥の足もとあやふく、醉ひしれし人は稀なれば、路の邊の雪だるまも、世は太平といはまほしげに見ゆ。わがやどの軒端の梅の、雪の下より、清き香を放ちてほゝ笑めるさま、えもいはずあはれなるに、きのふ手折りて、花瓶にさしゝ枝のみは、火をけの櫻炭と共に匂ひて、鶯をも、まだきにさそはれぬべき心地ぞせらるゝや。

香川縣高松市高等女學校生徒　木村菊子

清らかに煤を拂ひて、待ちし日も、けふとなりぬ。とし男の數々の祝ひ物年徳神にさゝげ終ふれば、父母をはじめて、諸共に、四

つ足の高膳に向ひて祝ふ。雑煮物、ごまめの肴も、いさ目出度うなむ。常ならば、きそひて、雨戸開けなむを、けふしは、入りにし福を千代迄も納めて、外へ出ださじさ。怨だにあけぬ習はしにこそ。下男下女、何れも勝手にせで、只、お目出度うさいはふのみなり●外面は、例の神詣りさて、行かふ人も多かめる、又、福面かづきの女姿、あるは、坊、あるは、封建時代の武士などに装ひて、家毎に、をどり入る様などは、田舎をおきて、他にやあるべき●

よひのまに入りにし福を萬代に
　しめんさてこさ戸をはさすらめ
あけじさのおくのいはれは知られごも
　福をやらじのこゝろなるらむ

（以下原稿到着順）

肥後國下益城郡松橋町　友永章子

住めば都のこさわさにて、もの學びにいでし身も、さすがに、ふる里のなづかしくて、新玉の年をむかへんさいさまを得て、かへり來ぬ。山里さはいへ、年のくれは、たれも心せわしからんさて、わざさ友にはおさなはず。一日二日すごせば、年の初にはなりぬ。おり立ちて、千代の若水くみされば、垣根の梅ほほ笑みそめたるに、うらうらさ朝日さしうつり、軒ばの竹にさわぐむら雀のこゑも、君が八千代をうたふふしかさきこゐて、いさのどかなり。かくするほさに、氏神に詣づらん、初衣よそひて、門のべすぎゆく人もあり●おのれも友のもさを音なへば、文机にむかひて、新年の歌ならん、短冊にしたため居たり。竹馬の友に、一年あまりあはぬものから、年のこさほさよりも、おのがかへりつることを、まづうちよろこびて、さそ酒くみかはし居るに、つく羽ねにつかれたりけん、友の妹も、庭よりかへり來て、うれしげに、今日のあそびのことをかたりぬ。いざ友達さ、宮詣せんさ、うちつれだつ道すがら、都の氣色に、わが里のことをも、さりごりかたりかはすも、新年のなくさになんありける。

熊本市京町　駒澤まつ子

新玉の年立ちかへりぬるに、おのれも、いさゝかいさまを得てしかは故郷なる熊本へさはかへりぬ。實に、都も鄙も同しくて、四方の山々かすみたち、昇る朝日もうらゝかに、戸毎にひらめく日の御旗には大君のみさかにも見ゆ門の松竹のみさりそへたるさまにもいはれす●まして、折々、雪のふり來るなごまことに、豊年のしるしにや。むかし撫政の君の、
みよしのは山もかすみて白雪の
　ふりにし里に春は來にけり
さ詠み給ひしもおもひ出られてゆかし。折しも、朝風にもすそかろげに、學びのにはに通ふわらはべ年のたちしをよろこびて、幾つになり給へるなど、語りあひつゝすぎゆくもあり。年の壽申さんさ音つる人々もいさ多し。おのれもはごなごちて、さゝめくこゑのきこゆる方にゆきてみれば、こゝの乙女子、彼處の童など、打ちつさひて、はごつきかはし、または、ふしおもしろく小歌うたひながら、手まりつきて遊ぶなど、樂しさいはん方なし●かなたには、うくひすも、梅か枝にきなくなさいさをかし。日くれてよりは、思ふさち、打ちつさひて、かるたの戰に、かちつまけつ、打ち腹立つもあり、また、笑ふもあるなど、樂しさも樂しく、年の初ならでは得かたきことになん。

和泉國泉北郡深井村　福原萱子

しかすがに、此の里も、一夜あけぬれば、窓にさし入る朝日子の、影麗らかに、軒端〳〵の御旗に映じて、輝やけるのごけさ、門にかざりし松竹の千させのみごりいさゆたけて、羽手鞠さ、うなゐ

ゐらの鵜せたはむる〻あはれさ。さては、氏の神社へ詣でんさ、村人の、おのがじゝ、清らに着かざりて、屠蘇に、顔さへあかめながら行くもあり。年始のよごさ申し述べんさ來るもあり。みるも聞くも、一さして、樂しからざるはなし。かくめでたき年を重ぬるも、みなこれ、大御代の御惠にこそ。仰ぎまつるもかしこくてなん。

福島師範校　村田よし子

田舍の新年ばかりをかしきはあらじ。きのふ迄、やつれたる衣きて、山に野に出でし賤の男、髮亂して働きゐたりし賤の女も、けふは、黑き膚に、美しき衣つけ、白き足袋うがちて、行き交ひあるは、丸木にてかこみたるあやしき屋の破れたる障子も、俄に新らしくなりて、さながら別界世の心地せられてなん。宇下端につり下げし大根の葉も、にはかに、日の丸の旗さかはり、門に立てたる豆腐の標も、門松さかはり。昨日迄、鉦の音だに聞ゐざりしを、今朝よりは、大鼓の聲の、おどろ〳〵さなりわたり、吾妻おろし時雨をさそひて、吹きくる夕方、彼方の野べに、紙鳶をあげつゝ、童子のさわぐなさ、いさおもしろし。かゝる田舍にありて、この新らしき年を迎ふるこそ、他所にはまして、一きはたのしけれ。

仙臺市東七番町　山下八代子

道の程こそ、都さは、へたゝりたれ。我が里のさしの始の樂しさよ。參朝の車のひゞきなどは、きかんすべもなけれど、何さなう、こさ新らしう、にぎ〳〵しきぞ、をさまる御代のしるしなる。朝まだきよりおき出でゝ、れいのことゝも行ふ。やがて、初日のかげうらゝかにさしいつれて、學校に通ふ童子らの男をみな打ちむれて、うれしげに語りあひ、笑ひさゞめきつゝ行く。母の手おりにもやあらん、木綿ながらも、新しうきよげなるを、着かざりたる、見るからに心地よし。家毎に、立てゝかされる門の松竹も、いへゐづゝかれば、はゐ〴〵しからねさも、かへりて趣あり。高くかゝげたる日の御旗、近つき見れば、紙なるも多く、さをのさきに橙子をつけたるなど、いみじう興あり。さすがに田畑のあぜ路、人のかげだに見ゐず、老顏に紅さしたるおきな、足もしさろなる若人、さては、髮美しう結ひあげ、白きものしたゝかにぬりたるをさ女の、昨日のさまににるべくもあらず。をしなべてさゝめきあくる今日のさまよ。都もひなも、へだてなきは、げにゆたけき御代の年のはじめなりかし。

羽後國仙北郡荒川村　河方喜代子

大君のみいつ、いさゞかしこきや。あはれ、我が里も、開け行く世の態に遂ひて、今年は、いやが上にも、いみしう賑はしく、將、又、去年までは、片田舍さて、都人の來るをも、いさ珍らかにいひはやさるゝはかりなりしに、今は、外つ國人も、古跡など尋ねむさてや、そこはかさなく、すゞろありきするを見るなど、いさ〳〵うれしきや。年の始は、よろづうれしき事のみなるに、今、又、斯る目出度事を見聞するは、いさ〳〵さちある手になんありける。

芝區愛宕下町　横手たつ子

おのれ學ぜんさて、ふるさきを、たち出でしより、殆、十餘年、其の間あまたの辛苦艱難をなむることさ、數ふるにいさまあらず、時さしてははたらちねの事を思ひ、時さしてははらからのうへをおもひつゝけ、或は月に、或は花に、種々の思ひ、胸にふたがりてすぐすさもなく、過すほさに、はや、明治三十二年も、白駒のひまをゆくが如く、忽に馳せ去りて、新しき三十三年さはなりぬ。こゝにいさゝか暇を得て、ふるさきなる、土浦に歸りぬ。竹馬のさもどちうちつさへて、昔をかたるもいさ樂しく、園に遊ぶ樣の

花、庭に囀づる鶯の聲、畑には、麥、徑には、雪の下草、もえ出てたるを見きゝするなど、いと心地よし。まめやかなる里人は、互に新年のほぎごとをのべ、暇としては、から歌、大和歌の聲、風のまに〳〵きこゆるもをかし。

新玉の年の初に鶯の
こゑものどけし賤がふせやは

神奈川鎌倉長谷　佐藤君子

とし浪の立ち返りたるけさのうれしさは、都も鄙もおしなべて、仝じことになん。軒端に、けさは、日の大御旗、風のまに〳〵靡かぬぞなき。あし引の山里にしあれば、常盤の松などは、見なれたれども、けさは、一しほ色そひしやうにて、いとめづらし。都大路は老も若きもわかちなく、追羽子なんど、面白けれど、我が里は、いと鄙びたる所になんあれば、都には、つゆ比ぶべくもあらじ。されど、住めば都の譬にて、親しき友ども打ちつどひ、羽子あるは、手鞠のあそびなどは、いと面白き業になん。中にも、歌がるたには数しれぬまで、人のよりつどへば、わきて面白し。げに鄙といへど、年のはじめは、めでたきものになん、あなる。

福島縣相馬郡岡部村大字立谷　齋藤すわ子

梓弓射るが如く、去年もすぎさりて、呉竹の一よあけぬれば、あら玉の年の始めとはなりぬ。見渡せば、四方の野山は、昨日とはことにして、空のけはひ、いとほがらかなるに、豊かなる朝日子の影、うら〳〵とさしそめたるなど、天地も何となうのどやかなる心地す。わが住む里は、陸奥のひなゝれど、實に、今日と云へば、家毎に、軒端には、朝日の御旗をひるがへし、門邊には、松竹を飾り立て、老いたるも若きも、一所にまとゐして、君が代を謡ひ、屠蘇白散を汲み、或は、鶴龜にことよせて、祝ひかはしなどして、嬉しさ樂しさ満ちたらひぬ。又、女子どもは、いとはれやかなる着物をつけ、隣りを呼びつどひ、羽子、毬、或は、かるたなどの遊びごとをするなど、見るもの聞くものにつけて、いと面白し。況いて、都の地は、いかゞあらん。いとうらやまし。

伊豫國松山市出渕町桝内　二神きよ子

晴れわたれるけさの空に、かゞやく初日の影、いとのどけく、何事も、あらたまりゆく心地して、常は淋しき我が里も、何となく、にぎはしうぞ覺ゆる。げにけふこそは、門毎に、松竹たて、賤がふせ家も、いとたのしく、年の初を祝ふめり。日頃したしきは、さらなり。うとき友までも、とひつどふ。あまりのうれしさに、

したしきもうときもあひて呉竹の
世にうれしきは年のはじめよ

なりしも、小學校の祝賀の式終へてや、わらはの「年のはじめのためしとて」「初日の光明らけく」と聲たからかにうたひつゝ、かへりくるも、げにいさまし。かなたのやしろの廣まへによりつどへるは、あたりの女こどもならん。とりどりに、着かざりて、たのしげにあそぶめり。さびしきわが里たにかくのどけきを、都ならましかば、いかばかりなん。おもひやらるゝ。うべけふの目出度さは、げにかはりなき世のためしなりけり。

大分縣大分郡大分町　本庄小なみ子

明けゆく空のけしきのふにかはりて、けさあたらしき心地す。さるは、いそがはしとて、のゝしりさわぎし人も、くれ竹のひと夜あけぬれば、自ら心ものびらかに見え、いまだかすまぬ空ながら、いとうらゝかに覺ゆればなり。おのがじゝ、さゝくみかはして、君が代は、千代に八千代とことほぎ、又は、衣きよげなるが、喜びあふれて、大路を走りめぐるなど、ことにてをかし。互に、知る知らぬ、祝ひごといひつゝ、入り來るも、何とはなしに、睦しき心地せられてなむ。げに、大君のみ惠に洩れぬわが里なれや、年の

はじめのけしきは、ゆたかなりけりと、且つ嬉し。

横濱　畑中澄子

我が里は、山いや高くして、谷ふかく、野原いや廣くして、林多く、木々の、梢に、さへづる鳥は聲をかぎりに、歌ひつゝ、岩間を漏るゝ水の音は、さや〳〵と、いと心ちよし。斯かる所の、遙か彼方に見ゆる賤か伏屋あり。まがき破れ、屋根は朽ち、庭はあれ果て、見る甲斐もなくて憐れなり。是ぞ我が里、我が住家なり。こゝは山里なれは、訪ひくる人もまれにして、いと淋し。さはさりながら、新玉の年たちかへれは、最寄の知人をあつめ、老若男女の分ちなく、かるた遊するなど面白く、泣くもあり、笑もありて、狂ひつゝ、はては、加留多は、或は破れ、或は朱に染み、百枚ありしが、いつしか、五六十枚とはなりにけり。彼方の乙女子等は、羽子よ、双六よと、樂しげに遊べるさま、天使にも似たりけり。夜に入りても、かるた遊に除念もなかりしを、やがて、時計は、十時を告げゝれば、名殘りをしみつゝ、皆家にかへりぬ。

盛岡市外加賀野　月野さへ子

明け行く空のけしき、くたかけの聲も、きなふにかはりたりとは見えれど、柴かる山がつが、引く駒の鈴の音は、たえてきこえす、門毎に立て並へたる松竹の、いと太やかなるに、あてなるかざりはつけれども、さすがに賤の男が幾千代かけていはふこゝろも見えてをかし、白雲さへも、けふふりそひ、にはの梢に、さながら花のさきたるに似たり　。いづれも、年の始のしるしとて、初日の出づるを待ちて、かたみに、とひつとはれつして、祝ひ心は、我かすむ雪降る里も、に匂はしき花の都も、等しかるべし。

大阪北區堂島北町　吉田政榮子

鶯の初音と共に、ことしもあけそめて、まだふるとしのなごりとおく霜も、やがて朝日のさす影にきえうせ、なびく御旗は、ひなも、都もかはりなく、乙女子がやりはこの音、風のまに〳〵昇る。童子等の凧の遊も、げに、ゆたけき大御代のみ惠なり。夜に入れば、うからやから、打ちつどひて、歌がるた、すごろくと、遊に夜のふくるも知らで、過すそたのしきや。

松山市三番町　清水まん子

玉しきの都に遠き我が里も、改まりぬる年のはじめのあしたには、門ごとに、日の御はたかゝげて榮え行く御世をことほぐなど、いとうれしうなむ。初日の光、うら〳〵とさしのぼりたる、云はん方なきに、昨日にまして寒き風も、何となう長閑におぼゆ。學校さして行く少女等が、絹布などゝめられつとて、皆、晴服にと共に改まりたるも、いとうれしかし。ひなにしあれば、馬車の行きかひはなけれど、さすがに、力車に打ちのりて、祝賀の會、はた、回禮にとて行かふ人多くて、ちまたいとにぎはし。屠蘇にゑひて、おもわに、花さかせたる人の多き、はた、羽子つき、かるた取などにたのしげなる少女の樣も、明らかに治まれる御世のめぐみとおもへば、いと〳〵うれしうなむ。

伊豫松山市三番町　由井なみ子

都の空はいかならん。我が里も、さすがに、あら玉の年立ち返れば。初日のかげもうららかに、門毎に、松たてわたし、軒毎に、日の御旗高くかゝげて、君が代をことほくもいと目出度し。己が業に、日もたらずと、いそしみ、夜明くるまで、ともしひともして、ゆききせし人の跡もたえて、人の心も、なにとなくのびやかなり。昨日までは、暖かなる、冬よとよろこびしに、一夜のほどに、寒さきびしくなり、南山には、かくまだらに、雪の積れるを見るも、萬改まりぬるしるしとやいとをかし。大路は、學の屋さして行くをさめごら、ちごらをはじめとして、公會堂に催せる、新年祝賀會に行く人、或は、諸官衙の拜賀におもむく人、さては、

少女子の追羽子、うなゐ子が、のとけき凧に、凧をとはすなど、とり〳〵にぎはしう、同體にて行きかふ人も多し、午後二時過る頃より、空のけしきかはりて、雨あられふり出しかど、しばしにてやみぬ。日のくれつかたより、しるもしらぬもうちつどひてかるたとり、さては、はかなきたはむれなどもして、打ち興ずるいひしらずをかしうなむ。

肥後國菊池郡城北村　徳永廣子

あら玉の年のはじめは、千里もおなじおもひに、いく萬代とことほぎまつるになん。まして、わが里の年のはじめは、四方の山邊は霞立そめ、遠近の垣ねにほころべる梅花の香は、風のまたまにかよひ來て、いとゆかしくおぼえつるに、里のをと女が打むれてつく羽子の音の、いとのどかにきこえて、老も若やぐこゝちしはべる。さまざまのあそびも、いとたのしく、いとおもしろくおぼえて、諸人の、君が代は千代に八千代とうたふ音の樂、いと目出たき里になん侍る。あなたのし。あなおもしろの大御代や。

## 松上鶴

仰ぎ見る千代田の松のかげしげみ
　やされる田鶴の聲ぞゆかしき　寺師榮子

生しげるまつの木すゑにやどしめて
　のどけきはるとたづなきわたる　出田香川子

とことはにみどりをそふる松が枝に
　御代をことほぐつるのもろこゑ　服部萬蕊子

君が代を千代よぶつるはまつが枝に
　よろづ代かけてあそぐ今日かな　服部充子

まな鶴はまつの木すゑにすみなれて　仁保志摩子

高さごの尾のへのまつにすをくひて
　おのが千年もしらずやあるらん　仁保基子

君が代を千代よろづ代とよばふかな
　千とせをよばふあしたづのこゑ　徳永萬壽子

君が代は千とせのまつにまふつるの
　つるの毛ころもまつにかされて　徳永廣子

あら玉のとしのはじめをことほぎて
　よはひもながくさかえまつらん　吉富理能子

新たまのとしのはじめの門どまつに
　まつの木すゑにつるぞあそべる　吉富季子

君が代を千代よろづ代とかげたかき
　きみが代うたふともつるのこゑ　吉弘周子

御園生のまつの木すゑになくつるの
　まつの木すゑによばふともつる　田代艶子

千代八千代さかゆく松のうへに來て
　こゑものどかにきこえけるかな　田代綾子

あら玉のとしのほぎごとささぐらん
　とよとしよばふつるのこゑかな　長野孝子

幾千代もゆるぎなき世のしるしにや
　三はしのまつのあしたづのこゑ　黒田美津子

大きみの千とせをまつにしらぶらん
　まつの木すゑにつるあそぶらん　山代由子

よろづ代もさかゆく松にうちむれて
　むれゐるつるのこゑぞにぎはふ
　きみが代いはふともつるのこゑ　山形富子

# 國光臨時發刊豫告

本誌發刊以來、號を重ぬること一百八十七號。年を閲することゝ十有二年。其の間、世態の變遷は、實に非常なるものありしかども、本誌の主旨とする所は、終始一貫し、羈束せらるゝ所なく、阿諛する所なく、斯道の恢弘を以て自任し、遠く流俗の表に卓立して、一片耿々の所信を透徹せしめむことを務としたりき。輓近數年、內外の趨勢、急速變轉の影響は、人心、常に外形末法に奔馳し、國家の依て立つ所の根底を培養するに疎にして、日本的思想の特色本領は、歲と共に、愈益委靡衰頽に歸せんとす。況、今年は是れ、內地雜居の第一年、東西思想融合作新の頭初にして、日本的精神の、最旺盛を要すべき時期なるにも拘らず、人心の頹廢は、殆底止する所なく、廉耻地を掃ひ、士風湮滅に歸し、國民固有の特性特色殆見るべからず。今日の狀態を以て推移せむ、邦家將來の運命果して如何、吾人區々の微衷洵に止むへからさるものあり。復何ぞ。溫言緩語、以て春陽の永きを期するに堪ふべけむや。依りて本誌次號即第百八十八號を以て特に臨時發刊となし、誌上全體に異常の體裁を具へて、勵聲疾呼、侃諤の苦言を吐露し、來る二月十一日紀元節の佳晨を期し、出して以て、普く江湖同憂の士に質す所あらむとす。

# 誌上の體裁

本誌第百八十八號臨時發刊は、紙數凡そ一二百余頁とし、侃々諤々の論議沈痛奇拔なる評論親切丁寧なる教訓有益珍絶なる史料警世諷俗、高尙優雅趣味津々たる文字を以て充たさむことを期す。而して其の材料とする所のものは漫に當世名士の原稿を購求して誌上の虚聲を大にするが如きことを爲さず。世人の夙に欽仰する高士の寄稿を登載するの他は皆專ら本誌同人の主張に關し近時特に胸間に鬱積して止む能はず普く江湖に質さむと欲する所のものなれは各題目ともに皆一時の偶筆に成るものに非ず何れも記事長篇に亘りて拾餘頁より三十餘頁にも及べるものも諸多之あるべし而して今回本誌臨時發刊の擧を爲すは單に一時雜誌の虚聲を張るか如き時流を趁ふに非ずして衷心深く思ふる所のものあるが故に、臨時發刊の冊中に載する所は各篇ともに皆讀切りにして再讀三讀旨義愈深きを加ふるが如き種の文字たるべし、されば此一冊中に包含する所の内容はまさに他の七八部以上の貴重なる書冊を集めたると同様にして此一書によりて世界新世紀の局面に於ける我が大日本國々民の要務を明にし、また本社の多年唱導せる主旨の要領をも網羅し、以て讀者の机邊に於ける永久の伴侶となさむことを期するものなり。

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 （電話番號新橋八八） 國光社

## 社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事


女鑑
每月五日廿日發行

| 定價 | | 廣告料 |
|---|---|---|
| 一冊 | 拾錢 | 五號活字廿三字詰一行金二十錢 |
| 六冊前金（三ヶ月分） | 五十五錢 | |
| 十二冊前金（半年分） | 壹圓 | |
| 全國無遞送料 | | |

明治三十三年一月十九日印刷
明治三十三年一月二十日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛
印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木良雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社（電話番號新橋八八）

# 盃類製作廣告



拾八金製盃徑三寸（自價百二十圓至價百五十圓）○拾四金同（自價九十圓至價百十圓）○拾二金同（自價七十五圓至價九十圓）○九金同（自價五十八圓至價七十圓）○七金同（自價四十八圓至價五十五圓）○拾八金製盃徑四寸（自價二百圓至價二百五十圓）○同拾四金（自價百四十五圓至價百八十圓）○拾二金（自價百二十圓至價百四十五圓）○九金（自價九十二圓至價百十圓）○七金（自價七十三圓至價八十五圓）

純銀製盃徑二寸五分（甲價五圓五十錢乙價五圓）○同徑三寸（甲價七圓二十錢乙價六圓五十錢）○同徑三寸五分（甲價九圓七十錢乙價八圓七十錢）○同徑四寸（甲價十二圓四十錢乙價十一圓二十錢）○同三組徑三寸五分最下層の徑中小之れに準ず（甲價二十四圓八十錢乙價十八圓八十錢）○同徑四寸（甲價二十六圓乙價廿三圓五十錢）○同徑四寸五分（甲價三十五圓三十錢乙價三十一圓八十錢）

輕金製盃徑三寸（一圓二十錢）徑四寸（一圓七十錢）

（此の外白銅安賀母尼及び木盃も御望に從ひ御調製可仕候）以上何れも盃臺及桐箱を添ふ（市外運送料金貳拾錢）

右は頌德祝賀又は勳功の報賞其他一切の紀念として最も高雅の贈品たるを以てその囑製を命ぜらるゝ者近來極めて盛なり是に因て弊堂は特にその製造を精にし價格を嚴にし迅速調成以て愛顧諸君の便利に備へんと欲す若し盃中に文辭を刻し或は山水花鳥及諸種の紋様を鐫するときは彫刻の繁簡工手の精粗に從ひ別にその料金を要すべけれど注文に當り豫め贈與の趣意を照會あれ弊堂は之を考案に質し又彫工畫家に咨りて其さに復問し毫も間然する所なからしめん冀はくは大方の諸君遠近都鄙を問はず陸續御注文を下し賜はらんことを敬で稟告す

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類貴金屬美術品商 **天賞堂**（電話番號本局三百三十三）

妙技一等賞牌



東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

**天賞堂小川町出張所**

大坂市南區心齋橋北詰北二入ル（電話番號七百三十三）

天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸

天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛冶屋町十番地

天賞堂熊本出張所

長崎市萬歲町上野屋方

天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方

天賞堂小樽臨時出張所